遊歴雑記

初編 天

和書門 類
九一七六號
七三函
一四架
一五冊

内閣文庫
和 書 類
九一七六號
一七七函
一五冊
二四架

内閣文庫		
番號	和	9176
冊數	15	(1)
函號	177	1167

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

夫扶桑乃州郡名所多し六海三山
平地といへとも毎遍歴も難く盡し
のこるし昔聖と世ありて奥して深山
幽谷を分起霊場としひらいてより
人民安足高山にも登上し海濱湖濱
我波ゐ古とも得る理此時に望富
にかゝんとの誰人の十方の國邑丘

日本政府圖書

聚ト遊履し神社佛閣ト詣て
神仏霊徳光を仰きことを憶んや
志うるに採まの名くおよ後へ古徳
の遺跡を傳聞せるもいへとも往詣せる
人稀なり爰に十方菴大浄老師
解ハ一切に通して偏執なく行ある
一門に仍而往業を成し又も嘉遯

北跡をしたひ山嶽嶮岨聚落陸閭の
處も厭ハすを巡行して竟路其記を
論して遊歴雑記と題し予に序せよ
乞といへとも不敏愚朦にして何を
いふへきの筆代下さん志のいまと文辭
なるも本意なきされハ聊かのにて告
仕類億師乃壮健なる風流得意の

古趣深哉此師餘蹤有時んハ月ニ
嘯し風ニ吟し定家家隆の和哥の
深奥ニ感吟し宗祇貞徳芭蕉翁の
行脚をまねし道の人も清流ニ汲み
古跡農分明なりにし家継ハ起ハ
其事実を訪問し是就し小冊と
鄙しく燈辺の机上ニ安し数寄なる

茶事の折ふしごとに一席の同志ニ記
し数寄の一二を語りなば聴き居なる
うちまじり名所を知りて面白かり
其風景を見る古とも教ひんも豈
饗菓の佳菓ニ満たしむや実ニ古乃
清楽ハ庸人愚夫乃及ぶ為さに何したる
於乎此良師と共ニ山間水濱ニ逍

遂し精神能養ふものハ上界神仙
の侶と謂つべしと云爾

文化弟十一年甲戌秋八月

山中生西寺老隠義道識

遊歴雑記初編之上

目録

弟壱 伊奈樹の檜の木椿
弟弐 柏木村圓照寺濤の桜
弟三 一ツ目弁才天音曲奉納
弟四 蒲田新宿の梅見
弟五 下高田村東山藪稲荷
弟六 目黒村祐天寺あさきの芝
弟七 川越喜多院の怪談
弟八 定家卿小倉山の手水鉢
弟九 梛原家雅女の古墳
弟拾 大久保組屋敷の映山紅
拾壱 下総國府の臺總寧寺
拾弐 下総真間古跡拾五ケ所
拾三 下総國分寺の八景
拾四 浅草穢多弾左衛門が遺緒

国立公文書館 National Archives of Japan

拾五　杵川浄光寺の御寿像

拾六　植木屋権左衛門が家景

拾七　中野村宝仙寺の象骨

拾八　富士見茶屋林子亭の[illegible]

拾九　谷原村東高野山

廿　相州忍の一海弁天の事実

廿一　守屋明神の指景

廿二　武州金澤の八勝景

廿三　太寧寺範頼の古墳

廿四　浅草寺追儺の家例

廿五　野火留村平林禅寺

廿六　白子の瀧澗の不動尊

廿七　北澤村淡島の灸点

廿八　澁谷村八幡宮金王さくら

廿九　中目黒村別所新富士山

三十　四ッ谷熊野拾二社大権現

三十一　下総やハた八幡宮の古跡

三十二　やハたしらすの藪の事実

三十三　下総中山法華経寺

三十四　下総あつ村宝成寺の椿

三十五　下総梨林法雪の墓

三十六　王子村若一王子田楽躍

三十七　王子村稲荷大明神

三十八　飛鳥山の花見

三十九　[illegible]島村[illegible]堂寄稱庵

四拾　大宮八幡由井正雪が[illegible]

四十一　吉良上野介義央の墓

四十二　梶川与惣兵衛頼照の墳

四十三　社僧檜山秋葉坊家景

四十四　麟祥院境ニ居禅尼の像

四十五　井上家蝮蛇の沙汰

四十六　武州石浜里城址の年元

四十七　小栗駒繋松むさしの景

四十八　上板橋清水村の湧泉渓

四十九　羽根田村弁才天

五拾　平間寺厄除弘法大師

五十一 大相模村大聖寺の不動堂
五十二 能見堂擲筆山の始元
五十三 七里が浜行合川の事実
五十四 吉祥寺村猪のかしら弁才天
五十五 小金井村の花王
五十六 むさし野新田小金井の始元
五十七 比企郡岩殿の観世音
五十八 蛍沢いはれの無名
五十九 膝折の駅家ヶ谷(カツケ)の事
六拾 武州入間郡大井川の事実
六十一 目白台胸突坂五月雨塚
六十二 杉山の堺榎上田氏の古墳
六十三 横見郡岩室の観音堂
六十四 上田家の城山古実来
六拾五 坂東拾壱番吉見の観音
六十六 武州常河内村の温泉

以上

日本政府図書

遊歴雑記初編之上

武城赤山真宗廓然寺十方菴大浄敬順老衲著述

一 三縁山増上寺本堂の後なる黒本尊に隣りて左の方に出張したる構ハ台徳院の御霊屋なり此御魂屋の外駒よせの内左右にありて合て檜椿といへる名樹の両木繁茂せり是は凡四五尺にて樹の高さ六尺ほど通りかたわらにも九々苅込るそのあり此樹一体ハ椿にてありながら九条の下又ハ小枝の股より檜の樹の小枝一ツづつ生せり依て呼のき椿と号し元ハむかし台徳君の御愛樹なりし御遺命によりて爰に植させ給ふよのかや稀なる此樹の小枝を得て接木として或ハ刺樹なさしむれども遠からじ

て枯失ぬるに接したるもの〻依て適に件の實を得て土に蒔ば生ずるは
いへども椿の樹の小枝は生ぜずして長寿常の椿に戻りて希異ならんべし
業ぜざるに尊霊の怡悦せ玉へるにや又は草木なりとはいへども稀に
台廟の御尊霊を慕ひて元樹のかたちに生ぜさるものと見えたり天下の
霊樹といはん歟若此樹の接木にて栄え又實生にて成木に及びなば植
木をこのむ人の徳は千金を得るにまさる事ならん但し此名木の外に生ぜ
ぬ種類のなきをもつていよいよ尊霊のはかりがたき御威徳を仰ぎ奉るのみ
予先年故ありて彼樹の小枝一本を得てしまひ大切に宮に蔵して家宝
となせり依て今其小枝の枝ぶりを生寫しにして左に圖して知らしむ件の

槇の樹椿なとならびて繁茂して御魂屋の外駒よせの左右に在て諸人に見
てしるべし又此外にも御霊屋の内に朝鮮國王より献上せし干満の石の
手水鉢と号するあり是は潮の満る時は其ごとく手水鉢の中自然に
湧出してあふるゝが如くに水湛え又引汐の時は水かはりて又自然に枯渇
きて跡に底にありて潮の満干をしらする名石あり或は世上に名ある羅漢
石等の名物数品ありといへども霊廟の御内なれば恐れて爰にしるさず
唯其のさ椿のみを挙て余は秘せる事のみ予過し壬申の孫主住職を譲り隠
居となりてより花に心をよせ遠近に枝を引古跡名所をたづね就中風景
の土地に遊ひて天元の数を養んとす性質下戸なれば酒に憎まれ才遠に

なましバ其の飲食に昧まれバ茶具の骨董を携て諸方を遊歴しまた又
珍んハ本意ならねバ覚書に記しおけり但し寺社の由緒古器品物なども
あらば無に載て風色に至らざる事を要とせりくりきりせバ後人の穿鑿家に
譲て述せず彼檜の樹椿の図左のごとし

第貳

一 武州四ッ谷柏木村の衛門桜ハ大久保の西淀橋の北八町にあり寺ハ密宗にて釣鐘の銘に武州豊島郡柏木村医光山円照寺と見へたり境内西に表して本堂と薬師堂との間に名ある桜ありて存れり但し古来の名木ハ枯朽てその根茎より若木生長し今四方へ繁茂せしより凡四五間竹の埒垣を構て側へ寄しめたり又本堂の前正面にも桜木一株あり花盛ハおのづと立春七十四五日目をよしと人惜むべくハ土地片鄙にして神田下谷より先の人ハ常にのぞむ少く至らざるハ眼とりて遊し且濁つ桜の由来ハ先哲の小説にみへしかバ爰に略す

一 薬師佛ハ尾張殿千代姫君の御寄附佛を納めありとかや今本堂の本尊薬師

堂是又此堂の軒下に篆字を以て薬師堂と認めし三字の横額は玄竜
の筆なりし筆勢又すぐれて見事なり因曰此左玄龍といふは梅本丈角が入木道の師
匠にて天和貞享元禄宝永正徳の五元の間玄龍益道文山の三人の書
家を江戸の三筆とてその頃の人持難せり就中左玄龍没年より今に至
るまで百有余年におよぶ左玄竜の事は後巻に議して述ぶべし

一 薬師堂と表門との間に南面せる一社あり鐙大明神と号じ此神躰ハ
相馬小次郎将門が着せし鐙なりといひ伝へて是を明神と崇む今は柏
木淀橋角筈村の鎮守として例祭は九月十五日都鄙の男女山をなして群
参せり都て武州の地は神田鳥越筑土の明神をはじめ将門の神霊を崇
め祭ることの少なからず且鐘楼と表門との間に無比の大樹の根あり又は薬
師堂の前には銀杏樹の大木存ぜりさながら境内の茂林鬱蒼として日影を
く閑寂として野猿の群おそひきたりけるの俗事を離れたりされば此
辺は一圓湯島天沢山麟祥院の領なりて弐百五拾石余にあり残り弐百五
拾石は駒込を領せりされば此辺の多くは早の懸ひなく花に富み菜に富む郭
公をきくに早く雪の眺望におもむき雅人おの歴せざれば有るべからず

第三

一 本所一ツ目辨才天といふは 常憲君家綱公の折りにおひて吉祥弁才天
の五文字の法筆を法正躰として宝永年間の勧請なり此濫觴を伝
へきくに杉山検校は若年にして瞽者となり父母甚貧しく三歳の衣食に乏し

くもバ実ニ天下ニ凌ぐべき衣類ニし依て大願を発起し相模國江の嶋ニ至り日
本三弁天の社ニ詣りて霊験著明と聞ゆる南の岩窟ニ断食し一心ニ念
願して曰我か一生を送ぬべき一藝を授け給へ若然らずんバ一命を召上け給へ
と祈誓せしの念願感じ既ニして明日満願といへるの夜ニ於て吉祥天女を
枕上ニ顕現して申されく汝針術を学びて鍛錬せバ後安楽ニ生涯を果
すべしと夢見たりその霊夢ハ偽らず覚ゆるさるニ針治の発忽然として
手の中ニ握れり是より日夜寝食を忘れて針術を修練し後ニ感
應ありしが天ふくし 常憲君へ針治を奉り殊ニ君の御意ニ叶ひ深
く賞し給ひ加々上達せり 或時公の宣ハく望むものありやと杉山答る

答して曰瞽者の身ニ候ハバ何より少し何卒目ひとつ下し置され候と公にもの
事ぞと上意ありて翌日ニいたり本所一ッ目ニ方弐町の地面を永く拝領
仰付らる今の本所一ッ目河岸通惣録屋敷これ也 後年又杉山検校
ハ男子両人を法眼并ニ召出しかひ両人とも百俵づゝを下し置る杉
山家兵庫杉山藤蔵の両家其の子孫ニして今ニ存す 公の御仁政あり
がたき事ならずや扨 武田大膳大夫入道信玄ハ智謀勇猛ニ於て
ハ古今ニ独歩せる名将なりといへども逆愛のゆへに盲人ハ乱國の助
ニ邪魔也殊ニ天下の癈人なれバ兵粮を無益ニ費すものなる一切の瞽
者ハ國ニありて益なしと家職をあたへたる者を縊てちからし招ニせ高楼

に登らしめて火を点一同に焼殺しけるとなん去ゆへに今公は益愛厚く
斯子孫まで永立なるに信玄の非道の無成敗に比すれハ天地雲泥の隔
高恩さらに起死回生の相違といはん歟かゝる事さへ忘るゝ満年我
天の加護たるによりて己が僧録屋敷の西に勝りて吉祥天の一社を建
立させしめ件の座像を徳正神と崇めしとなり
一例年二月十六日六月十九日の両度不闕に瞽者の徒当社に集会し
琵琶を弾し平家を語ひて奉納はその後雨夜の先帝天皇に幼少の巫
女禰宜等神楽を奏して神慮をなぐさめ此式終りてその日勤役の盲
人おのおのその身分の衣服を装束せしめ或ハ撿八人又ハ撿五人且撿校勾當
は輩ハ内陣の首座に列し同分の徒ハ下座又ハ矢来の方に列し左右上下に
居流れし瞽者おのおの御廚子へ向ひて拝礼終り着座定りて後麻上下着
する俗人両輩二面の琵琶を持出て先末席の瞽者に渡しければ
て調子をさくりて人々にて弾かゝりけれハその音律高きにあらバ冷(サヘ)る有
嗄(カレ)るもあり古きいかり節ひするもあり但し平家の曲節ハ三行又ハ五行に過
ぐ斯して壱人弾し終れバ此方に控へし礼服着する俗人又一面の琵琶
を携て向座に居ならべる瞽者に渡しせバ又調子を合せて弾かゝりにする
事初めれども末席の後方より弾そめ首座の先座に至て弾じ終
るその次第の上刻より午の刻に及ぶその式止時刻の遅速瞽者出席の

多くハその折柄の時宜によるべし當家の名目ハ撿校の帳押に張出しあり
て番組の次第當役の盲人年々同じからず定りし當家の大台ハ横笛然
野とみえて朗献ず返へ也教宗殉ずるの數あり是に上手下手切者不切者
あり鴨田検校海き福都越都富を上手として聞しむ松の青曲を比
まさしバ更に面白きてのにハあらざれど唯古雅にして俗樂なる程野鄙を離
れて訛なく陸中節然として誉る云葉も法則あるも一品なるべし依
て遠近の雅客こぞとめんと辰の生別より布天堂に集来して群をな
せり但し風雅に疎き瓢客多くの婆の歎きを不興にして帰るも多しいる
のありこの又面白からずや　予ら参詣せしハ六月十九日鬱暑にして蒸るが如く

一天さるに風なし悩かハきし膝もひえて待るも侘かりしに驟雨宮田市庭より疾より
来り居て携えし茶具をとり出げ濡檐に一炙して手をとりめ来合せし諸人
も振舞るゝ程いとゞ相曲の席の雅客にして一入面白かりし
一松山検校ハ急のしてへ若干の社領を寄附し又其宮に堂社を造営しあるは
僧侶やしきを建立て瞽者一派の役所とし法式を起し規矩を定めり
依て彼が徳を貴びて一類の者ども京江戸ともに松山が像を安置し別
して當處ハ其天ハ急のしてへを勧請せし事なれバ已往しにハ一派の盲人
夜に参詣し諸商人ハ路傍に居ならび遠近の者群をなせり　予此日午半
のころ社頭を立出しが炎暑に堪ず王子國の橋詰なる喜久亭可樂が出張に

憩ひつゝ終日川風に暑を凌ぎ黄昏迄遊て帰宅もしけり

梅花

一 武州荏原郡東海道筋やはたに隣りて大森村北側江戸の方より出三軒目の和中散といへる薬店にそひて細小路を北へ入れば方弐拾余町の梅林にして園のおもむき白梅あまたいとやさしく早春遠望の壮観言ふにあらぬべくぞ覚ゆ但し野梅にて八重は甚少なし立春より廿四五日目をよしとす大方は正月十日目黒池上を過矢口村新田明神の祭禮より古川薬師をさして此地の梅又は遊歴する徒あり年の定例になれりありしこともを鎌田の梅見といへり本広の梅やしき皆その数はたゝいえ遠方といひ片鄙にして梅林の富に憩ふ處なし只畦路を彼方此方と逍遥して又出口のこなたに茶店のあきは眼ことといふべしされど誰何に人にをもは花の下に風呂敷へ行て吸筒ふたの酒に旅もあるなり彼武州久良岐郡杉田村を梅見の第一とし當處かぐはし是に継出し大森の所にてむさし梅といへり又は梅干を名産といひならはして南には皆此地の野梅なりけり但し梅の園堅く種のふさきは相州鎌倉を限れる歟此花路まぐろは鮫洲濱川鈴が森やはたが浦を新宿大森と次第して茅屋よりは四里余りおんかし海にそひ耕地にそひ左右の山里に住わびに目には何見ても一つとに面白し故に鼻衆出し人に負じと矢立の切筆に拙ふくいくらし枝に結捨けり

梅園神景を肴進のうかゞひ初

鮮僊 以風

第五

一武州豊嶋郡下高田村の藤稲荷ハ高田馬場より西北の山手八九町にあり建石に東山正一位稲荷大明神と銘付たり往還より小道へ入る数十歩爪先あがりに高き所に登り又石階を登る事四五拾段頂上に宮社あり広庭ありて南に表をなし麓ハ清潔の瀧の漲り落る垢離の行場あり又縁むすびの榎の樹ハ社の下にありて神木となり此地高閑寂として東南の耕地を眺望し遠くハ和田戸山を望み近くハ猪のかしらの下流をながめ風色天然として佳景あり春ハ遠近の花に愛でゝちらくの野の花ハりよりまたよろこびの摘草に日のかたふくを惜みて初夏ハおもしろぎにの初螢より秋集ひて田植をうたれ黄昏よりハ行るの一面に飛かひ甚此土地の一奇観といふべし秋ハ月見冬ハ雪見殊更中喜の化ハ此邊より氷川明神の森の前後路傍れ左右ハ蓮花草の一面に咲できしゆうまた毛氈を敷とも初ハおよみ陽が又南にハ猪のかしら落合川の下流ハ道にそひ田畑にあひて逆流ハ目覚る心地をせさる實に雅客文人の遊ぶに適しき雅景ハ天造の風色といふ可し

一當社稲荷ハ彼近年時めく王子村の稲荷より八年当按群古くおもし六孫王經基の勧請とさん神躰ハ陀祇尼天の木像にて作ハ何人ともいひ傳へずといへども年代いく積り立るん金箔自然と剥落ともあらく杉

植し空月出て宝殊勝ふおぼえし凡九百年ふあまりともいへり されバ京都
東山ふハ條の本稲荷あるが故ふ東武下落合村の宝殊ふハ山の上ふあれバ常
都ふ准じて東山芝稲荷といふ号せるよし 此日折あしく社僧も庵して
留守なれど一笑し拔萃まし清檀側ふ腰打懸つてしばらく憩ひいたし
由緒のことゞもたづね侍しかバ庵主若て先代の社司の住しにハ古細きの
中ふ正宗のたち一振ありしが盗まれしも也兎角庵主の替る毎しく古記
の類も紛失せるよし申侍し偖ことの物語ふ時を移せり當庵主ハ修験
とかくて妻あり子あり先當山流派の山伏とみえたり 此社ハ同村の薬
王寺注言の持とかや旦後の山ゟ續し朝相生茂り年中代なき焚ていへ

ともをびして薪ハ買求むることなん此地も離れて茶菜ふ有あり凡水火
の災害ふし高て寒くとして高きより東西南の三方を遠く見晴し
四季折々の風色偏ふ天然ふ出バ晩景いかん方ふし只恨むらくハ茶まで買
ふ里ふ路遠く不便利なるハ詮方隠者ハ風流ともいへん歟彼楽楊庵
住かりしがひとり節をも出ずれ余ふありなん
不ときたゞ自由自在なきし里ハ酒屋へ三里よし好屋へ二里
一同寺東の方山の中腹ふ高さ尺余の石地蔵あり此石佛後の方を四角
ふ削り抜て地蔵尊の住居ぞうりを差出しあひおそれ見まバ常の石像
に異なることハめづらしき石工の手際よりよく依て腹ごもりの地蔵と称じ

寛延二己巳年より剣出り又垢離場の崖に石の小天狗をこしらへ寛延三
年より剣しよ又石像の不動ハ同じく五年と銘付あり何れも凡そ六十七八年
にも及べり外に穿ちえ座きをのふしぎハなし風景に於てハ見るべき所稀
人絶りして寺了べし

第六

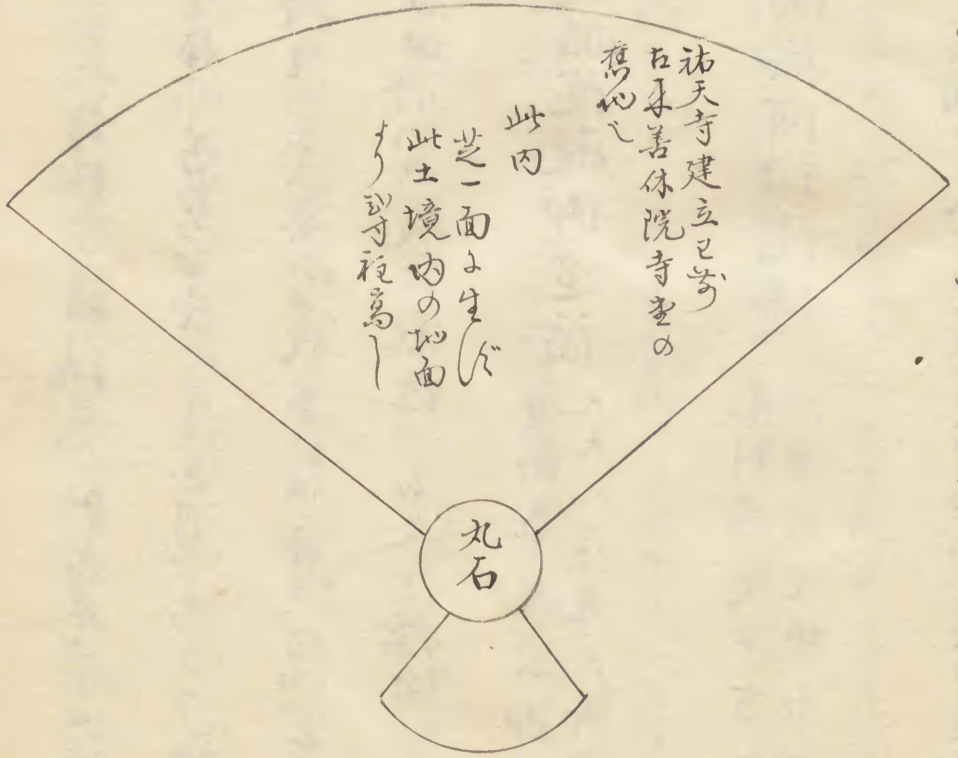
一武州荏原郡目黒村祐天寺 浄土 ハ開基祐天の名をもって寺号とせり則
本堂には正面に祐天の木像をすえ置り且表門の横額に妙顕山と記し本
堂の横額に祐天寺と認めしハ当山起立二世祐海書とあり裏表の門
にハ下馬札あり此寺御祠堂金五百両を賜ひて地頭なしける例寺社に
若干あり但し例年三月朔日祐天の木像ハ本丸大奥へ御輿にさしむる
に於て後までハ御城内にとどめ置たまひ下城の砌ハ小袖に包み御飾し長持ぞ
目黒へ運送に及侍えし祐天の木像ハ自身の形をもって又外に数多本像のある
事なれバ上をとどめ大奥の女中達等へ分ち与へしかバ種々奉納しき
小袖を仕立て彼本像の着替にまいらせ其外結縁のためにする歟又ハ
人形の御伽這子のためにする歟もづらしき例といふべき歟

一本堂の前に石灯籠二基あり右の方なる灯籠の際に扇子を開きしめく
土を一段高くし四方二間ほどつるに作りてまろく芝生しあるぎハ銘目と
覚しきものなく石を置けり是ハ往古此寺文に善休院といひし一字あり
しを祐天此寺に一円に御頼し本堂伝僧堂庫裏等を建しがむりし

佛堂のありし跡を応箕に踏荒されて今にハ善休院のありし古跡を
ころもすの説なりお本堂の西北の方なる弥陀堂の後の地蔵堂なりと
彼善休院の累代安置の本尊なり其外表門の内左右に忌佛
堂観音堂等あり例年七月十六日より同じく廿五日まで千部讀経に
凡常念佛の聲ハ山林に響きて煩悩を退け伏魔の音ハ峯々に谷
響して羣有の眠りを覚せり境内元来閑寂にして俗の耳を離れ道人
の住べき地なり春ハ山内のさくらふるぐさ秋ハ裏門へ通りたる樹林
の落くまで紅葉の燃るがごとき実に紅を置べし此外由緒品物を写ちあれバ爰
千ある人々と記すところを学し腑氣をいるめるが如し他々只今するを

此ことを載て余ハ略に件のありしき形の芝地左のごとし

寺の裏方



表門の方

一本堂の前右の方に鐘楼あり破風及び彫物の小口柱ニいたる迄悉く皆
真鍮の金具を施し善美を尽して玉目づちより鐘の頂まで三尺余あ
り見ゆ前ニ向ふ撞座の上ニ葵の御紋及び御施主の御名を鋳付又後の撞
座の上ニハ魚葉牡丹の御紋と観経の名文を鋳付たるものなりし

葵御紋

文昭院殿御追福

近衛基熈公御姫君
大夫人一位尊尼御寄附

撞坐

魚葉牡丹

南無阿弥陀佛

光明徧照十方世界
念佛衆生摂取不捨

撞坐

第七

一 武州入間郡川越城下の入口ハ立場の茶屋町を通りて足軽町左右ニ家居し
直ぐる事七八町ほど杉山ニ川大宮道への大道より既ニ此処中町を通り過て
右手東へ入細小路あり此小路を入る事凡そ町斗りにして路傍の右手定杭を
建て院号ハ御朱印領殺生禁断と記せり是喜多院の領分ニ
てハ之を入れハ此喜多院より以ハ東叡山の御配下ニして寺領七百五十石と
おはしまし慈眼大師住職あり　東照宮の御魂屋を造立しませし此寺
住古ハ北院中の院南の院と三ヶ寺同列にて中の院をもつて上席
として本務相続せる慈眼大師の代の北院へ住職ありてより中の院南の院
の二ヶ寺ハ塔頭同様ニ成りて七百五十石の内ハ配分にして寺席相続せる
事とハなりぬと夫より以来北院の文字を喜多院と書替本坊のぬ

くせり七八と往古の山号を以て中の院ハ今ハ檀林となり且又院号ニ中
南北谷を唱ふハ其の寺〻の住居の方角ニよりて名付しものなりと云バ
件の細ニ路より入て东の方九品町へ往行ありて左へ曲れバ一堀あり然
無一國ニ生ぜる樹林盛ニ茂しにより参詣せしハ文化十一甲戌年十二月廿四日
雨天なりしハ更ニ遠近より人気なく寂寞としてさながらさびしかりし既にして右ハ
なひ又き町ぞりにして喜多院の表門ニいたる山門の左の柱ニ平仮
名を以て山法の條目を板ニ書記して打付けり左の如し

此門の内にてれいをとる事かたくきんぜい

月日

右表門を入て右ニ下馬札あり又北へ行事寺町ぞり右の方に喜多院の
僧房ありて左の方ハ駒よせありて砂利留の内より右石の左右ハ黒く平き
小石を悉く木の葉かせするよし参詣しハ実ニ見るのみニ右石の正面ニ矢大臣
門ニ花見を守し銅尾の猿喬く化り新通柱ニ番木の小口ニいたるまで滅金
の光りハあたりニ映じてまたゆく朱塗の光澤ハ四方へうつりひときらびやか
ニ左右の両大臣の像の结構なる造作を加えるみふの両脇つの中
央ニハ東照大権現の五字の竪額かゝりけり外のつまやうな莊麗なる
斯のやしろの莊嚴を曝りしと数る〻事も侍る年〻正四五九の内忌日
ニハ参詣の徒を許し入ることす皆ハ矢大臣門を閉しされバ右禮など

しるしに残る多し西なる堂の北の正面には六間四面の堂あり是本
堂にて開山堂にて彼是をたづねて問ふと云へど更に人気なく境内只
寂寞として松栗竹の葉の音のみ殊に昔雨ふりていとど寂静として
物凄じく殊には大木の樹林鬱茂して空を覆ひて昼暗くさながら也
して今しくは又のぼりかたし此山に山法ありて鉄をもてるものを禁ぜしは其
稀に参詣の六部修行の徒等あやまりて鉄を帯たる事あれば須臾の間に大地
震動し一山鳴るがごとく或は坊舎僧房は倒〔刹〕るがごとく動揺し又は暴
雨大雷等の災害あるによりて山法として堅く禁ずるとなん其の由来を
彼に尋ね寺僧の内何代目の寺務にてやありけん天狗になりし僧あり

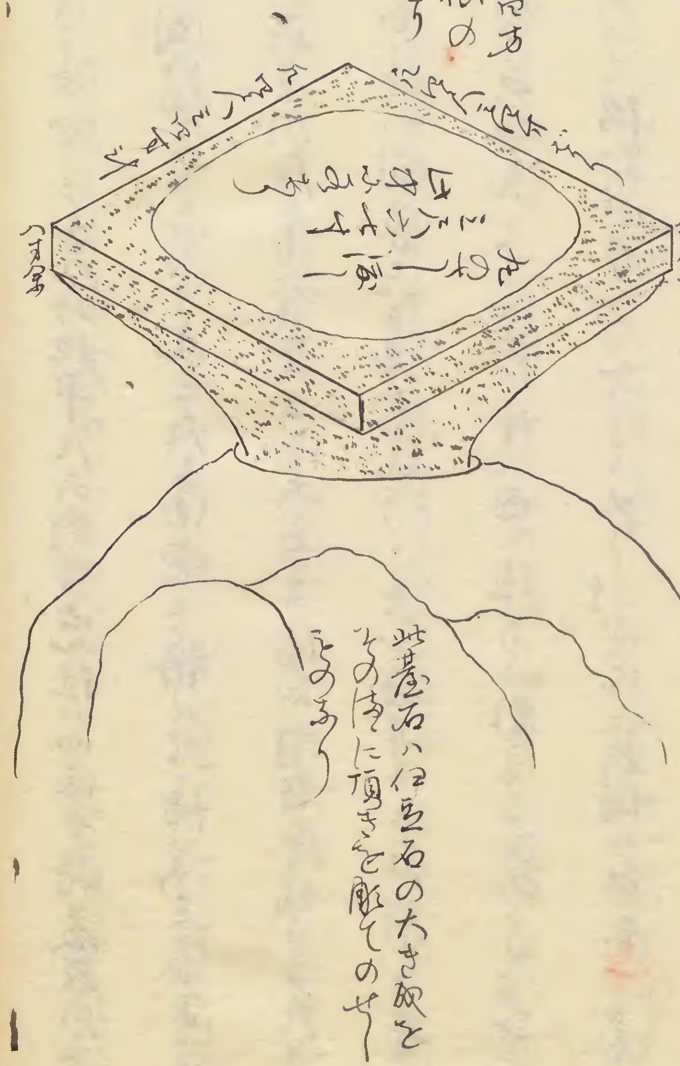
或日弟子等へ申けるは我日頃尊信せし妙義山の中の嶽へ飛去ると述
給ひを唱へ給ひけり雲を踏んで立去りけり時に京の君とかや名乗し小性の妹背
捨て居しが我も御供申度しとつゞいて虚空へ飛上り失ぬ中の嶽と江
隔つ事は川城より三十里にあらんとも越ゆる彼少人は中途にて四身落ち
しや空より墜て死したりとなん是によりて其の処に死骸を埋み研木明神
と崇め祭りけり其摂木を横に採りし其の山法ありと誤りて針
相当へ趣又は立趣侍し杯をきれば忽然として摂木より目鼻を生じ
故に蔵蚕摂子木の化法と鉄を帯たるものを堅く禁制と定めき奇怪
とするべし其後に中の嶽へ飛去し住職を世人誤りて南光坊僧正と

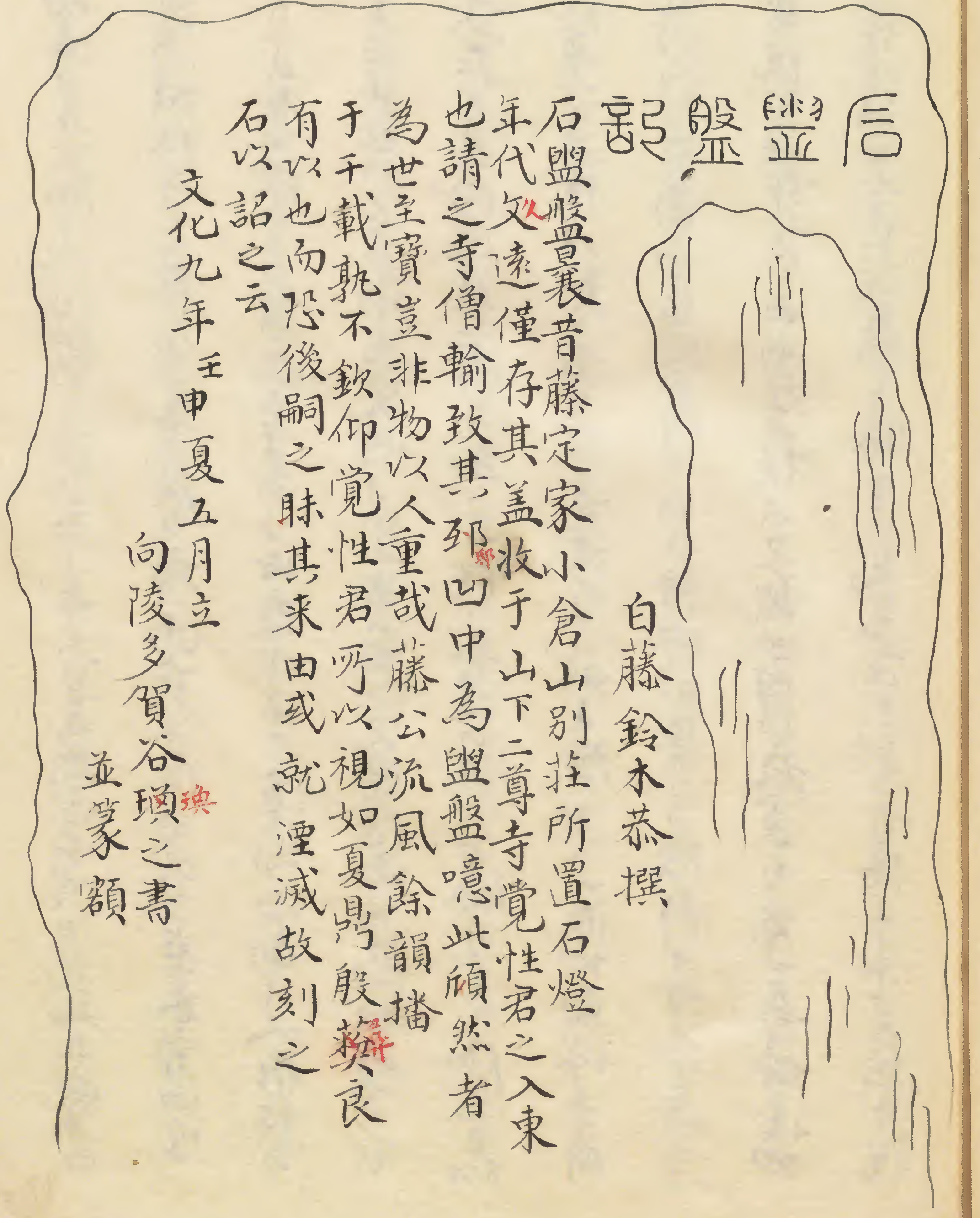
思ふ人ハ非なり好事の人参詣して見るべし

第八

一 青山原宿西側竜岩寺の南に隣りて松平左京亮一万石の下屋敷の庭に黄門定家卿の秘蔵ありし石の手水鉢あり形ハ自然にして筆洗の春林和雅なりし真の古物にて由緒来ハむかし定家卿小倉山の別荘におゐて時土中より堀出し外に用ひ方なきによりて山荘の手水鉢とし秘蔵ありしを後年鷹司公深く懇望ありて譲請て二百余年鷹司家の御庭にありしものなり一体ハ元手水鉢にハあらず燈籠の笠石の殊に四角にてバ又縁ひて石のうらを仰向て手水鉢に用ひしものとみえて殊に遠程過く 有徳院君の御代君も上覧ありて思召によりて鷹司家より当屋敷へ譲られしものなりとかや此松平左兵衛督先祖ハ四位少将藤原の信平とて鷹司左閣の男にてありしが凡三左京亮督と称して諸侯之家あり其一ニ天下筋にハ喜連川左京亮督其二ニ大名にハ播州明石を領せる左京亮督其三ニ公家にてハ当家左京亮督なりしといふを世上にて三左兵衛と号したぬ彼手水鉢の形を述へし丸き縁の内ハ強ちに彫なるものとも見えず自然の中凹ありて其鉢の中を見てるがぬし手がえし折柄ハ水赤く濁り培螻（ボウフリ）を生して鉢の深さを計るべく石ハ自然の皆なりしと見えて上にハ仮初の日覆ひを作り定家卿の堀出しおひてより六百余年を経たるものなり小倉の土中に埋まりしハ筆洗の星霜なりや古雅にして実にめづらしく覚

あべきしてのゝ傍ら旧塚の南十間ばかり隔てゝ小山の上に稀代の青石を西
表に建て手水鉢の記を刻める石の幅七尺余五寸ばかり長さ六尺四五寸厚さ
壱尺ばかり青山恩田の耕地より此碑能見ゆ四件の図左の如し





石盥盤記

白藤鈴木恭撰

石盥盤曩昔藤定家小倉山別荘所置石燈年代久遠僅存其蓋投于山下二尊寺覚性君之入東也請之寺僧輸致其邸凹中為盥盤噫此頑然者為世至寶豈非物以人重哉藤公流風餘韻播于千載孰不欽仰覚性君所以視如夏鼎殷彝良有以也而恐後嗣之昧其来由或就湮滅故刻之石以詔之云

文化九年壬申夏五月立

向陵多賀谷瑍之書
並篆額

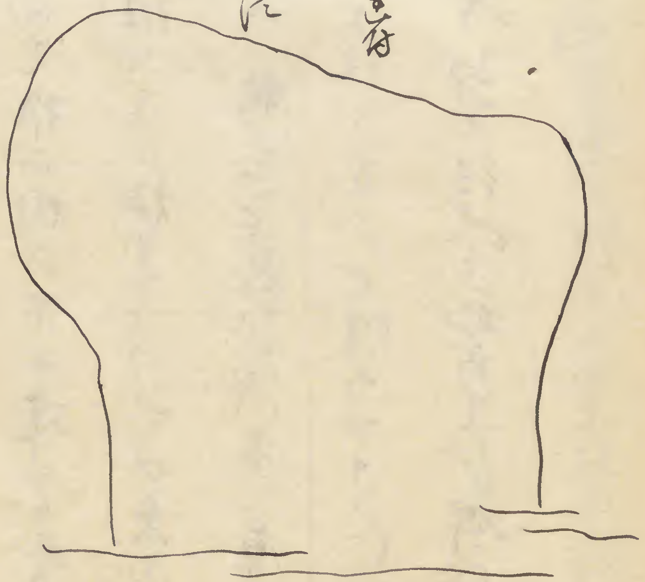
彼向陵は書を能しけるが爰に於て去し辛未の夏画會を催さし砌そこ寧曲
河月潭開林寺と夢屋一身を贈り席画ありそびしとめて右篆書四字
をそれより石面に彫して百四拾五字あり此庭中より遥に向ふの山々又樹林の
間より叢屋の見ゆる松も完ややに茂れは田を見る事をふさぐ又は畑路を人の
行かふ事も思ふ傍に右は千駄ヶ谷代々木辺の村々を眺望して風色の極
いふ方なし又園庭裡に名高き竜岩寺は此に隣りて一段地面低くなる所
に境内引込て閑雅なる所にて西の耕地へ打張つゞき彼新日ぐらしと称せる
千壽院の庭中をば西北の方様ふ見越囲内の雅景を最も集めたる勝地
なれば新日ぐらしの庭より眺望の風景に比すれば百倍にして天然の雅

景なりぬとし只記憶に止めてゆるへき事に足るやまを閑雅をも目移する
人を矢野氏の傍に寄して温順にしてその身烟盤を据ゑちかちかと明細に案
内して見せ扱あまりて同意せしかども且つ炉を廻し立つ席茶を煎して又
其煎茶を一服して風景を愛さを興ぜり此家の主は如何なる人ぞ此矢野
氏元も名ある人にありしが龍岩寺に寄寓し住持は此孫に命じて寺を矢
野氏方へ同道して此庭を見せて給はれと案内せよと所望し許諾してできやうに
見おしもの也此園庭の広さ南北の長さ三町にあまりしが東西の方つ場の
路傍に梅園ありて梅の諸木数を尽して数百本植込ありて又桃園には
桃樹数百を植ゑたれば折りし花の頃は如何あらむと思ひやりぬその傍に夫婦杏

国立公文書館
National Archives of Japan

といふ大木ありて根元平より左右に分れ雌雄繁茂せり広き表にへようく
此ある場の左右の並木ハ第一秋なる頃しかりん住古ハ街道のよし申伝
ふと語りぬ左ハあるへしと覚ゆ左之東普析して実を儲せる庭中
に桜梅桃李杭樹数品を植込て春秋の実遊ハ無一ともなへくなり
又廣庭の真中に笠松と称する一樹あり根より枝しげりて際に至る人余
直りあるより宗中宝に傘のぬく如く茂込りれハ笠松とい云へ隣りかゆ漏
ハ園体松も隠りぬべし又茶園ありて廣さ十坪程なり又椎原が
愛せし烏帽子石と名付し生色の後なる踏石ありて清し尋ねその所ハ
えくてハ人々と当家に於て大切の物のよしその所園のよいとし

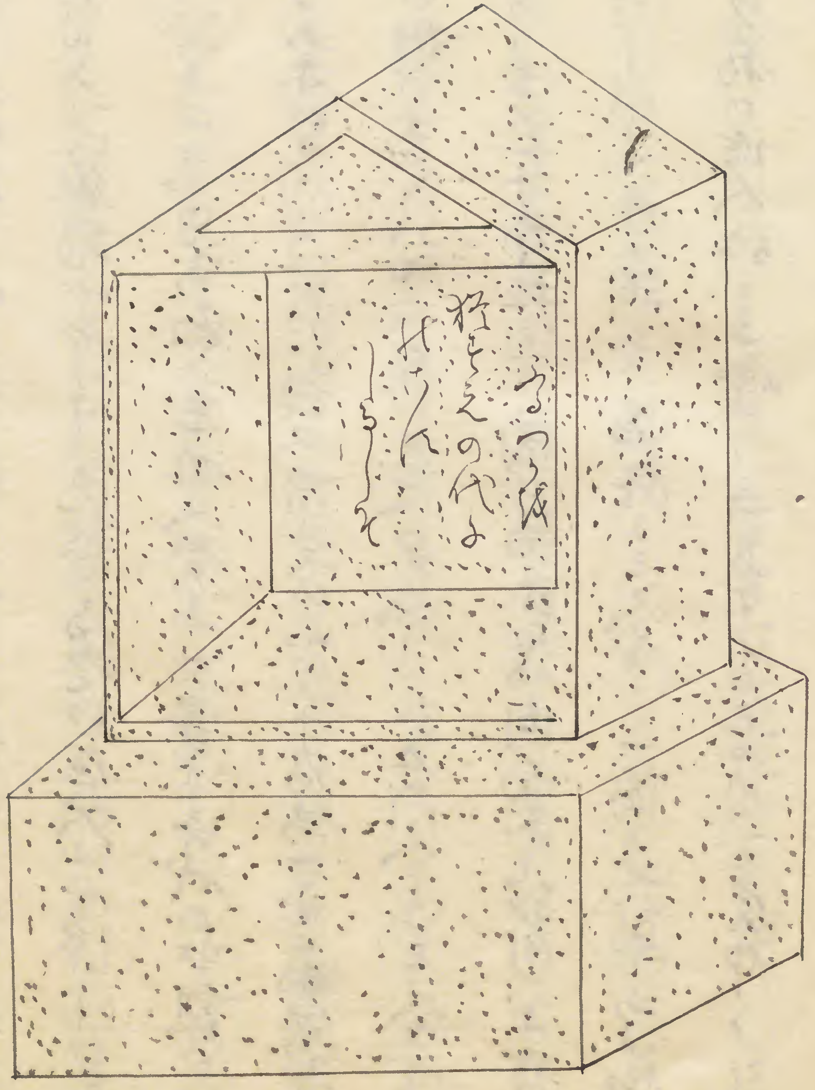
一 此石横 四尺五三寸
一 地上ヶ出る処 高さ 七八寸
一 伊豆の相模石のめく生ま石の落る処 青石之ハ非ず
日本殊なきに依て苔更
に生せ代新しきがぬし



第九
一 下谷池の端榊原式部大輔中屋敷並所の方表門の際四谷新とい云る
長屋の前崖の上に椎の大木あり往古の樹ハ朽損して根のミ残りその
根より若樹生じて今ハ大木となれり此大樹の本に梅若の母班女御

国立公文書館
National Archives of Japan

おれ杖と笠とを埋めし古跡ありと見えたりし奥州へ通りせし街道とや
故にその上に碑を建て平仮名の一首の和歌を刻せり西式部太輔より
八三代以前の此奥方の詠歌なりとなん此碑家に建てより凡百余
ケ年におよぶと我碑を東へ向て椎の樹の下に建てり高さ三尺余
幅三尺五六寸に過へりぬ彼班女及び梅若よりはそのゆかりびた又伝へ
よ隅田川むかしにおもかげ梅若を慕ひ浅茅が原なるかどが
池に入りてし班女の母此家に杖と笠とを埋めたりといふ同名
実今なる後の穿鑿家の考勘を経れて和歌及び碑の実弁たの
ただし



さて今も此所の名は杉田古塚を杉田の世に知れたる也とぞ

第拾

一 大久保百人町組屋敷の通り組同心飯島武右衛門といふ者の西の木戸より北側
の二軒目にて躑躅に名高し先彼か居宅の庭大小の躑躅三拾株を
植並へて其色の紫紅白の花形又其名々ハ更なり其代の壮観なるを見さへ
え上る大木の躑躅もあらさたに抱え居宅のめくりは只一面躑躅ならざるハ
しなの樹の高さ八九尺或ハ壱丈余低きハ五六尺より三四尺まで左右よ
り成木也し事数千本植廻し園の幅東西八間南北九間余其の間ニ而
両側ハ一株毎に垣と溪あり幅路ハ三尺也一園ニ生茂る花ハ只燃るが
如く其物の詩人酔るに似たり立夏より四五月を空中より遥に花
の咲揃ひし時ハ其のあたり相映して彩面ハおのづから紅粉にそむるが

如し凡武州の内に於る数千万の躑躅の成木あるものを見ん野外つゞじの
鼻の花ざかり几年々ここに及ばん江戸第一の壮観といふ可しいづる人々
唯是川くとの感賞して足を閉ざし酔ふ者あり花を過ぎて家に帰
るの思慮なし要するに英雄ておよそといへども数千万億の陽ばの映じ合て
夕陽を此地にとどむ映山紅と書る字義は宜なるかなや只恨むらくは片
鄙にして武家の人々のみ噂ふのミ伝え聞て見ざる族多し殊に立夏の比
より諸侯大夫の宮をさしめ家物に殊し士庶人にいたるまで日々群より
引きも切らず群集して或ハ此組屋敷の園中に終日酔をさらし又詩
歌連誹に日のかたぶくを恨める徒ありけり惣じて此組屋敷の家々ハ躑

躑躅の樹の大小となく三百株又ハ五百七百ならざるハなく成木におゐてハ壱丈
余なるも絶倫の色れきありその上組中の垣根に植えたるハ琉球種にして
かやいえる花の紫赤白の三色相交えて咲揃ひ東の木戸より西の木戸に
いたるまで八町余南側の垣根に咲る花の風情又垣根を見越して燃るが
ごとき成木の躑躅爛熳たる景色ハいとゞ盛貴をむらし
の良品を此地に植付其価といひえるなれバ高家前に見えざりしハ究竟多
し又此組屋敷南通りに同組五拾人同例に家居して躑躅を作るといへ
ども此組の五十人分なれバ且又家々躑躅の大樹幾千ありといへど数盛
武家の一邸にあるべし実に東武第一の躑躅といふべし都鄙の雅人見るえ

どんバあるべからず又躑躅のみならず家々に孟宗竹の筍を作り又ハ夏の草花
にはらしてなくさむ土の好みよりいでつものを作り世上に植木ありとて賣あるき又
ハ椽日の法にて稱出せるの大久保を第一としその外ハ巣鴨染井あるいは山坂
市谷中市谷麻布等も絶無しと其菖蒲の映山紅ハ江戸中の花の巻
頭として其余ハ染井巣鴨をはじめ上野の穴稲荷大塚護国寺の石坂
左右の性じなるありといへ大久保に比すれバ万分の一にして中々同日の論に
あらず市ヶ谷柳町より原町通和田戸山の御構に添て尾張様町ありといひ
えりその路傍に砂利場といふ所あり東西南山の間にて東西凡町南北ハ
三町ばかり深田あり海川あり杜若鶏ありといふ小さき流しに続つゞき又あやしの

葉落の三形路傍にありて風景天造にして画きたるがごとし

拾壱

一 下總國葛飾郡國府の台安國山総寧寺 曹洞 ハ寺領百卅八石とかやたし
是を曹洞宗の関東の三ヶ寺と称ん代々住持ハ江戸小日向に寮舎に出張し月
へ番をなして三ヶ寺交かく関東の同宗を支配して録所と号し國府の台ハ着る
にて寺廊相構へ則ち市川の渡しを越ゆれバ三町余にして坂あり左に石
碑を建是より総寧寺境内と記せり此へ松並木の大門を行事四五町にして
して路傍の左に奇なる石を建られたり又行き十町ばかりにして惣門に至る安
國山と認めし三字の横額を掲げられ幅凡三間余長さ五間にて有りけるか
額者の名印をも見ず此門を過又五町余にして中門に至るまでの間

片側の左郷にまさバ人家稀にして松風の音殊に蕭然たり此中門より遥東の
方に裏門あり之に依て境内の広さを推量すべし扨此中門より家根ハたゝへ
建つゞきて禅堂へ向ひ右の方ハ庫裡僧坊に建つゞきて廻廊に伝り丈
幅凡そ十間雨天にも傘を用ひず草履にて本堂祖師堂選仏場之へ
通りけるよし造りなどの構へ様の構形たゞあらう君下見塚青松寺
又ハ白銀瑞聖寺扨ハ牛嶋弘福寺等に似たり但し左郷なれバ家根ハ
三ふ萱葺にて古雅なるのをあり扨て庫裡へ案内し境内見物の由を
申入れバ許諾し寺僧先に立て案内し差図に夫此地ハむかし
安房の國館山の城将里見安房守の出城なりしが北條家の為に滅亡し

其後当代と成て江戸番場の驛より寺を此地へ引うつされしその外左右
の制札の写し左のごとし

右

掟

一当山御寺内にて竹木伐取
　并伐事
一寺中之境内に而陣取之事
一惣而狼藉之族非分之儀申懸
　不可事
右違犯之輩有之者速可被処
之旨厳科者也

天正三年乙亥
五月廿日

御朱印

左

禁制

一軍勢甲乙人等乱妨之事
一放火之事
一対地下人百姓非分之儀
　申懸事
右條々堅令停止畢若
於違犯之輩者忽可処
厳科者也

天正十八年五月日　御朱印

一当境内西手の山に房州館山の居城へ通路を開道ありそのむかし三十六里を
掘穿の内僅拾五里より窟中を往来せしとかや中古水戸光圀卿当寺へ来臨
ありし時近頃穴の口に石にて塞ぎ置ありしが度々の地震に依て此地高く
なりしかば土砂塞りて陸へ塵芥自然に路を埋て今は其形ちわづかに残れり
一墓所のかたはら庭石とも見ゆる名有る大石あり是は沽石にして形ち丸く澤庵漬のおもし
にて但し石面削りかし鎗長刀にて矢疵多の切込し跡數多し是は里見
家一族滅ひて後此地へ蓮寧寺を造立せしより件の石へ辞世を書し
夜ごとに泣叫び悲しみなり是也戦死の者の化石なりとかや又ハ無念に死
亡せしその怨根一同凝滞して此石にとゞまりしとも怪石なりとぞ向て

戦死の霊魂追福の為當院の高祖代ゝの墓になるへし是て朝夕に茶湯

を供し誦経して弔ひ侍るとなん

一天主臺の跡ハ円覚寺の西にありて小山のごとし遠く望ば余る年ゝ土砂流

れ落て今のごとく成ぬれ共雲に聳えし天守をかり遠見せバ相模

武蔵上野伊豆安房上総の六ヶ国ハ眼下に見えつらん世替り時代古く

懐古の情少なからず

一千畳ケ原ハ天主臺の北にあり早雲家より歴代の地ハ善美を尽し

て豊麗をつくし新て建迎し千畳の座敷の跡となん今ハ只草のミ生茂

りて荒れたる廃地なり

一古戦場の地ハ千畳が原より講して總寧寺の境外弐三所の名ありむかし此

処本丸や又ハ二の丸とありしや平場の合戦ありしと見由今ハ千畳

が原につゞきて跡ハ田畑又ハ叢茫たる草原と成彼古戦の跡の奥ふかく松

陰して露くや何ハそのごとも墓の跡と憐歎てしかるに面影社

一早雲家滅亡の御廃墟を埋し処より今もなお古礎石存る

所見在せり世治て後其ケ処を堀出し見るに五種の奇器を得しとなり

則ち唐鏡并面宝剱并振鈴の徳見白銀の天目并ニ南蛮銭の軍

配團扇なり此五品ハ今も總寧寺の什宝として名高く残せり又其の後水戸

光圀公ハ猟りの其ケ処を堀出すに忽ちに一山鳴動し大風起り天気

まで備かりし陣も止すれぬとなん疑ふらくハ軍神を煌めし處歟

一 同處の西に別嶋の館の城址現在寺是なりし此の櫓臺是より東の方に當れ
弘法寺の表門石坂を登る大手として西の方ハ利根川の下流切岸の険岨を
要害とし北を攻めて櫓臺としては城内の地利を量るに東西凡四町南北五六町も
あらん出城といへども狭きにハあらじ

一 隣の臺と名付けたるハ當處西通りの櫓臺ハ高き事数十丈屏風を立し
ぬくの切岸の絶壁にて殊にハ利根川の逆流張り乱れその川幅三町と
かや味方ハ要害をたのみとして大手の方に於て防禦の術を施し櫓臺の
方ハ空虚なりしより際務ハ櫓臺の方へ乱れて押寄しかど責入難きの
手乱ふく川側に犇隊を集め臨の身死事りて勢光き川中に立羽を休めし
候寄手の軍兵皆川中に浅瀬あるを察し心身を励し生死を極めて
一同に渡り越不意に櫓臺より責入し故防戦の術なくして既に落城したる
となん今ハ國府の臺と云ひ又蒼海社

一 同處西南凡切岸の上に住麻凡の跡と稱ふる處あり是ハ 有徳院君
御眺望ありし處なりと称し此處より登臨されハ御城ハ東南にあたり浅
草観音の森東本願寺の屋臺の甍根上野の山等西北にあたりて遥
かに見え此處樹林なし吹払ひにして眺望の風景賞するに堪たり既
に此道に出城をみるが如に臨く遠目鏡にて望む止

一此地を鐸ケ山と称する事ハ里見家滅亡の後此地に当寺を造立し死
亡の者の為に日夜追福作善せしが戦死の亡霊ありけるにや一同に修羅
道の苦患をのがれしと見え嬉しさよとて亡魂快然として踊躍し歓喜
して消失せし故鐸ケ山と号けしとかや

一鐘ケ淵といふハ嶋田の切岸の下水川をいへり里見家滅亡の砌陣鐘を
河中に沈没し其中の主と成しをいへるなり水戸光圀公ハ此鐘を
引上見たまはんと農民に命し既に水中の鐘の竜頭へ縄を通
し引上たまひしかども其際より綱切れ沈むる事三度なり然るに此鐘の
内に大蛇の身を纏ひ九結びとも見え因て其事を止めたまひしとなり

草野ケ岡と号る所かやむかし此際斜の麦もし此ハ古来ニ川幅三四町と
見えしかども度々の出水によりて土砂推出し又ハ諸崩し為に漸々新田畠を
開発して今只川幅纔に百間となりしと寺僧の指さし物かたりき此処
より弘法寺へ東南の方六町余江戸まで行程四里ありといふ

拾弐

一同国同郡真間山弘法寺 日蓮宗 寺領五拾石と称号日蓮徒の六老僧と
称せるの弟五番日頂にて開基の日頂を当寺の初代とせり境内狭きに
ハあらねども此寺庁部の殊に多くして今只農業を専一にすと見えて菜
粟稗胡麻などの類境内に積置く掃除行届かず予が到りし此ハ九月
下旬なりしが落葉路となりて全地ハ塵芥に埋もれて取おさむる流し皆落ちに

参詣もしそのは里見ら争ひし境内さうに人気なく蕭然として只栗鼠啼
らの詳なるもなりたり 扨表門は祖師堂の正面石坂の上にありて南に向ひたり其の
石坂の幅三間余高さ三段に作りて石階を通して八拾余段あり是むかし
里見安房守が出城の大手にして道より下を見おろしたり凡六七丈ほど右は東西へ
押廻して戦ふ時盤石なれバ遁しき要害なりしに頻く武運つきたりけん只
一揆の喚咽と共に敢なく城も中断して当寺の道兵に責入られ里見家一同
滅亡せしは無念といふべかりし今も大手の堺門の面影残りていと懐古の情
深かりける堺地を当門に製して縄学る弘法寺の境内となり

一 表門より山の正面に祖師堂と?社の宮とて左右に建てる祖師堂の外陳
の外側の九枚は元来色紙を並べたるものと見ゆれども年来諸人の擲る瓦にや今
只布目出て古雅なるものゝ折々の風雨にも耐へざるにや所々破損し年久しき
造立と見ゆ 此堂は八間四面土足にて外側通りへ参詣を入れ板に作り立内陣
の三方には格子戸をたてて内の荘厳向の見ゆる様にせり 両人云ふべく此堂内に
憩ひ彼方此方を見廻るに稀に境内を通り掛る男女はあれども祖師堂へ點
禮するものなく参詣の人更になかりしバ実に寂寞として其の淋しくた
なかり日蓮の像は此堂なる番人のなし殊に木像厨子に安置されといへども扉なく
剥出しなるへ塵埃ありけるを埋て蜘蛛の巣いとしげく引きつかりしは折々の
掃除もせぬものと想て内陣のうちにさし覗きいがらかなし同じ日蓮の

像ふかく堀の内村妙法寺の木像を引ちぎりて群参し開帳を称へ参し
金百足とるもとうるに今此祖師堂の扁ましまして参するに人も参詣のなき同
ド木像といへども他人の達ふや場所柄もよろしき日蓮の像も幸々
のあまりあらん道縁禅師の要文を思ひ出しつゝよめる事とは思ひよらる祖
師堂の柱に落書し並ぶる

妙法も世のうつりかはれや僧ともが銭

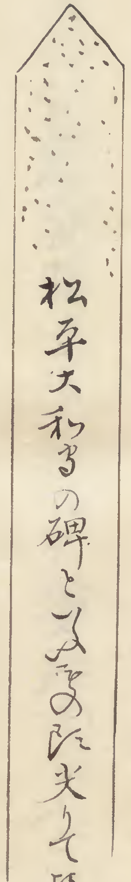
日蓮の顔をうけりける九月哉

一 祖師堂の後ろに楓樹四株あり此内東の方に成木しけるは根を以三尺廻りも有るが
都合四本行儀よく繁茂し西の端に有りしは生しけるは四尺廻りにして四株並ひ
成木しておのくかさ三丈有余四方へ繁茂せる事凡四五間我等経歴せ
ぬはりこぢ少しも違ひなきと又いかにくもあらんだ上人のいへらく此楓の紅葉
は立冬の前より十五六日目を盛とすといへり今年閏月ありしより例く
よつ延びける故寛中をふかめてしまひて寛残多し又三四間を隔てゝ古株の
楓樹の株より根茎より若樹生をり樹のたさ五六寸廻りもあらん故に古株の
真名れりこぢと貴ぜし名木よりて又同程一果の土の上に若樹の楓ありて
立て建札し上境のりこちと記し置しり

一 首塚といふは本堂の後ろにありむかし里見家滅亡せし砌双方の戦死
せし者を一緒に埋めて是を世代門人大石碑を建て弔へり

くび塚や宣きを行るの草かくも

一 祖師堂と大神宮との間北後の小高き處に石の玉垣苔むしたる石碑二基南面に並び建て東へ向ひふきしゆりたる形おなじたのめし いづれも古碑にみえて松平大和守の墓なりと教へき由其あたりを尋ねぞくびしかくれんとぞ伝へり
凡菊寺を道に指四五ヶ處の古跡なだたのだとし



松平大和守の碑と云ふもの形失りて此図のめし

一 真間の井ハ石坂の下左側亀井坊の境内にあり中古此井中より霊亀の出現ましとて亀の井とも称ふ萬葉集の第九に高橋連蟲麿の歌あり

勝壮鹿之真間之井見者立平之水挹家牟手兒名之所思婦
（カツシカノ マヽノヰミレハ タチナラシ ミツヲクミケン テコナシソ オモフ）

一 真間の入江ハ此寺の麓の耕地の細流をいへり萬葉集第三に山部の宿禰赤人の歌あり

勝壮鹿乃真真乃入江尓打靡玉藻苅兼手兒名志所思婦
（カツシカノ ママノ イリエニ ウチナヒク タマモカリケン テコナシソ オモフ）

又續千載集秋の下に歌の右兵衛督為家の歌あり

思ひきや老の身かつしか昔みし真間の入江のあきの夜の月

一 手兒奈明神ハ石坂下通りの町目の橋より左へ入て西表したる社にして宮ハ三間四面古雅にして神寂たりむかし人皇何代光恭帝の御宇何某の従にかやいへりし都人の不以ありて爰に住居の父老人の息女ありけり その心ざえ玄優にして容貌又絶世なりと清輔が奥義抄に始末くはし

こゝをさかり出遂に拂ひかくて眺望の一尓風景又ありひかし万葉集の
第三ふ山部の宿祢赤人の歌あり
吾毛見都人尓毛将告勝壮鹿之間間能手児名之奥津城處
(ワレモミツヒトニモツケンカツシカノママノテコナノオキツキトコロ)
一 継橋ハ石段下通の第一の橋をいふ今ハ勝ふ用ひられ板橋之側ふ石碑
ありて是継橋なりと記し然しも元禄五壬申の年建たり此碑も完からず
百首拾有余年ふ及べり凡昔の継橋を讀める和歌万千ふして千
載集新勅撰續後拾遺新後撰續千載續後拾遺風雅集ふ
出て甚多し今ハ唯二三首の之を記ん則ち前大僧正慈鎮の歌ふ
かつしかや昔の真間の継はしを忘れす渡る春かすみかな

又續後撰の雑の部歌の古跡志臣のあり
葛しかた通ひ中ハ絶えてあみしやかのよれ渡そ継はし
同じ集ふ土御門院の御製ふ
葛かしそ又世通ハんよしもなきまゝのおきはしみし渡の継はし
一 真間の浦ハ大橋より東の方なる田畑なるをいふ万葉集の第拾四ふ歌あり
可豆思加之麻万能宇良未手[乎]許具布補能布奈妣等佐和久奈美
多都良思母
(カツシカノママノウラマヲコクフネノフナヒトサワクナミタツラシモ)
一 先ニ云る於須比とハ弘法寺の山ニ添て東より西へ流れて市川へ入るの小川
也之仙覚抄ニ曰須のおすひとハおすひ之山の傍をいふと万葉集の第

松田に云なり

可都思賀能麻万能手兒奈家安里之可波麻末乃於須比尓奈美
（カツシカノママノテコナカアリシカハママノオスヒニナミ）

毛登杼呂久（モトトロク）

一 松戸の鼻といふハ国府台の社より東の方にて松原の尾末見えわたり何某の居ハ此
真間にて過ぐ松の方を見やりて此方角ハ松戸郡よりて葛飾のあひよりて於
名付けしとぞ

一 栗川といふハ松戸の鼻北下なる細き流れ也何某の居松の方を見やり殿然
として葭原あり 洞の清流ほとり葭しげりて前ハ名付しとぞ

一 篠崎の萩原と篠崎の渡守といふハ猿橋より西の方にて萩原ことに奥義抄に
寺ろをけれは浅乃をきつそう葛飾の浅のかやつるとよめる歌ありしと栢町
しるひしハ此事なり

一 太井（フトイ）川といふハ市川の長流をいへり或抄に曰下総国葛飾郡の中に大河ありふと
井といへる川の西をハ葛西の部といふと又或ハ日葉をとるに利根川なり此
川上ハ筑波根のみなれ川なぞその源ハ常陸文珠か嶽より落る神の故に名
を利根のみなもとをいつて利根川と名付又太井川といふのハ唯大河なるの
惣名なり和名日本紀抄にハ刀禰川とかくをいつて三才図会にも又刀禰（とい）の
ゐ篠崎の邊を市川といへど利根川の流を乃ふ名として則ち太井川
の名れ名なり

一　玉摩子の臺といふハ亀井坊の上の臺これなり衛藁の山の住居ありし
川越ある所ありて形ハ名残なり
一　遍覧亭といふハ中つの西南崖際に造れるあり海も見え遠く東南西
の三方を見晴し此景實に富岳ハ凡千里の風光ハ一望の中にありて絶景
又ふりいふべからず先年　有徳院君も此亭に光臨ありしと寺内に
傳聞と称するハ此いふ歟
一　真間の楓といふハ凡千年にもおよべる老樹なり高さ五丈余四方六七丈に繁茂
茂れり色を二条の楓ともいふなり依て有名なる上覧を給ひしとあんなり
その名四方に高く名木といふなり

一　同國同郡國分寺 真言 ハ弘法寺の此臺六町にあり則ち弘法寺祖師
堂のたる惣墓の中路をのぼり按右へ添ひ小坂を下りて此の山手にあり今
ハ國分村と稱し高千四百石にして一村の田畑広くとありて小名あり凡
國分寺といふハむかし一國に一ヶ寺づゝを造立して然ハ武蔵の國分寺
ハ多摩郡相模の國分寺ハ足柄郡にあるが如し今此寺下総國薬師の
郡國分山金光明寺と号し境内極めて広く左側にハ僧房あり本
堂ハ東向に高く造立し薬師佛を本尊とせり堂大さ六間四面此堂の
床下にむかしの古瓦若干落在せし陣里人と共に椽下へ這込 予も闕瓦の
形よきを三枚拾ひ得て家蔵とせし瓦数多落在すといへども平なる瓦よく

大なるハ稀なり此金光明寺より小三町ほど廃地の藪あり方四五町ありて
是ぞ往古國分寺伽藍の焼跡也此所中川飛弾守巡検使にてありし
御古尾の金きを堀て得させよと命せしに依て一村の人男女を出して三
日の間彼藪を明細に堀穿て瓦く二枚を得られたり其尾に瓦あり
金きハまさる稀なりと里人の物語りき両此国分寺に往古の礎の伽
藍石若干あり丸き竹彫しおのし五尺余地上より出る事さ四尺有余
または或ハ建碑の基石とし又ハ家ての庭の捨石として様々になりてあ
多く有り丸き大石ハ京都大方広寺大仏殿の伽藍石にも継へし
一 又薬師堂の前右手の方に銅像の不動尊あり立像の長凡六七尺

寛文二年と穂附より庭に伴ひ伽藍石を八ツ九ツも基石として又ハ残りの園
ひとして様々なり且此一村の内に八の勝景集ひて風色古雅にして妙
の趣ありとゆへりと早日も西山にかゝりき黄昏にまさる色より東南の
方やうしの駅まで到る所もあるよしなれバ風色を見渡して折々やうて
の旅路へ忘れぬ彼八景の地名左にしるし

一 六反田の落雁　　一 石橋の秋月
一 根古屋の夕照　　一 堺の帰帆
一 姫見塚の夜雨　　一 國分寺の晩鐘
一 小の塁の晴嵐　　一 比良の塁の暮雪

拾四
一 浅草新町弾左衛門が一郭ハ南北三町東西三町余あり南ハ堀の方ニ住居の門を設ケ北ハ江戸の通ニ門ありと不用なりとかハ南ニ而通抜ケ停も有り此一郭の内ニ古物屋質屋湯屋髪結如きまで住居の両側ニ軒をならべ穢多部屋なども並ぶよし家居も見ゆされバ此郭の内ニ住る穢多ハ弾左衛門ニ従ふものあり先祖ハ弾左衛門ハ増上寺へ出這入して信正の代替りニハ目通りして玄米拾俵と鳥目拾貫文を拝受し於観智国師以来代増上寺役職の名号残らず右弾左衛門方ニ所持して一代も闕事なく家名ハ相続なり此濫觴を申さば天正年中観智国師以浦ぶし当年まで存應いまだ不浄の時武州足立郡草加宿と

千住の驛の辺にて野武士の為に衣服ニ剥とられ丸裸と成途方ニ暮居たりし処へ年の比四十余の男壱人通り合せ此体を見て笑止ニ思ひ委細を聞より自身の布子を着せ途中ニてはあり同道しけり既ニ千住を過て別れんとする時件の男辞を低くして申けるハ我ハ誠ニ御身様の為ニ住穢多の者也其僧の姿にてハ江戸へ入給ハんも世間ハ笑止也然を捨て我垣生へ立寄り足をやすめ給ハバ装束衣着類を調進し申べし曲て来り給へとて其の比ハ元鳥越明神のあたり猿屋町ニありし新町の己が居宅へ伴ひぬ存應三日斗逗留ありし十四五日弾左衛門隔意なくいたしハ是新ニ装束衣着類路用ニいたるまで恵ミあたへけり存應ニ深く

並びに重く有りける高恩を謝せしと厚くも述べて立別れけり夫より後
甚右衛門は存應に随ひて年月を送りけるが其後存應ハ[illegible]
なりし 東照神君御帰依擢がし芝増上寺の住職を仰付させ給ひ慶
長十五庚戌年七月廿七日存應上洛し 神君押して再三の御取ひにより
て禅家代々の号を闕せしまゝ存應を觀智國師となし給ひ浄土宗ヘ
國師号ある事の最初後源誉存應を人のよぶ名は永代浄土宗の眉目なる
に有りし 神祖深き御賢慮ありての事となん爰に於て觀智國師ハ寺
僧に命じ浅草新町に穢多甚右衛門といひし者ありしものなりしが解て大河
称て其存命せバ早く召出さるべしと申させ給ふ旨に依て寺僧新町
に至り甚右衛門を尋ね給ひしに漸く存命といへども八十有余にして歩行叶
ひ難ければ竹輿に扶乗させて芝へ連来り此よしを國師へ申上ければ通を
為しと命ぜらる則ち觀智國師立出て許して櫓側へ甚右衛門を上らしめよく
見て曰く汝われを見覚へしや否やと申さるゝに甚右衛門若くして更に存じ申さず
と言ふ觀智の曰くわれハ昔年老てむかしの旅宿なり給へバ又忘るゝも理なり われこそハ汝
が老母と共に見て氣の毒に思ひて汝覚ありやあらん今より三十有余年以前我
草加千住の中路に於て追剥の為に困窮せしを汝が深切によりて其方が
居宅に伴ひ衣類及び着替路用等の厚き芳情を請たりし其時の恩
儀更に忘れずといへども切磋琢磨の修行中一日も閑暇なかりし為むかしの

返礼大ニ延引せり汝も口惜く不定の世ニ存命し今日對面実ニ悦ばし
今日大徳むかしの徳をいはんが為ニ呼寄たり然れとも口惜く今ハ國師の稱
号を頂戴し一山の住職となる事偏ニ　神君の御慈悲ニよりてなり此上ハ
汝ハ對面し於物語りニおよぶハ今日ニ限りなりとて十念を授られ當座の
恩賞として玄米百俵と鳥目三拾貫文とを与へ猶形身として六字の名
号を書あたへられし後も折く勝田ハ口並ニ來まかりとていろへの調菜
を呈して馳走をなしたるが是より先例となり増上寺住職代くの名号ハ
一世ニ關はり重き方ニ下ゲ給ひ猶増上寺代替りの度く米銭を申請る
事昔のごとし但し中古より玄米拾俵と鳥目拾貫文ニ定りぬ是より

て何時ニよらず非常の節ハ其寺裏の方より人足をいだして働かしめ猶又増上寺
よりの門く夜中の出入其寺裏門を免許されて通行なし文ありしハ此謂れ也

拾五

一武州葛飾郡柞川の薬師堂ハ青竜山浄光寺天台と号す梅屋敷より北
の方耕地を行事凡拾余町又四ツ木の町よりハ東南の方拾町余もあり木下
川とも云り表門ハ東面し裏門ハ西より入て南ニ向ひ境内又狭きニあらず本堂
ハ八間四面ニして東ニ向へり且本尊薬師佛ハ慈覚大師の作なりとぞん境内の
松の年古りて花王山中の又若干ありて北ハ川ニそひ東南ハ耕地を見晴し
四季折くの客遊ハ見物多くして首尾よく此地閑寂として文雅風流ニ
あそぶ徒の夢せざらんや　公折く光臨しあひ当寺を御膳所ニ命ぜらる

ぬひ出遣をなぐさミあへる実之

一神祖の御影ハ気高くして　台徳君の御筆にして束帯御姿ハ御墨絵に拝
し着衣しめ御丈七寸ばかりにおんやと拝礼し奉りて御顔の位高く尊し
き寛肖像の上ニハ慈眼大師ミづから筆を染て君徳を嘆誉せる讃あり
此讃を称ニ書写せる今ハあまたど恐も多くして予ハ謁せざりし則ち薬師堂
の左の方回陳を囲ひて御宮の様ニよそひ御画像を掛奉りて
参拝の人詣ふる時を見て翠簾を捲上至近く拝礼を許るゝの
堂宇草葉楼閣等を連峯し殊勝に覚ゆる景ニこそありけれ今予新
治平の世となり太平用ゆるのなく弓ありぬきし隠者の殊更風韻深の身乃

さりながら独り身に杖歩して面白く都鄙の界を逍遥せるも偏に　神祖の御恩
沢なりしと此ハ文化九壬申年四月十七日天気快晴今日参詣してその間九人
と云ふて尊くて聖像の御容貌を拝し奉る事実にありがたくと覚
由皆風流く野径に急滑とこ詠ふく後里院の花枝なお残り杜若卯の
花ふの新政侍に咲てぞ方は日々にさかりハまし花にうかれて途中の旅ゆくさ男女
ハ挽の幽を誌くがぬし或は諸士の輩君恩を思ふるの徒ハ路を遠しと
さはして群参し衣冠礼服に着替又ハ御紋服にあらためて拝礼せる
も多かりき抜くは神酒を頂戴し本堂を立出て境内の茶店に憩ひて
諸人の身形振又帰る風俗の色々さ面白く見るも一興それは何傍きあり

像ハ髯なるあり大きなる蛇捲えして甚だ珍なり種々の人形ハ又面白し
斯て境内の賑ひ見果て立出ぬ例年正四五九の御忌日ハ此御聖像を
拝礼させんと群参をなすハ今も今月今日殊ニ賑し此日是より東の方武
指ヶ谷町を過て平井村聖天の社あり百姓田口吉左衛門と云ふ家ニ又
神祖御陣立の御旗及び　台徳廟　大猷廟の御手道具等凡て諸
人ニ拝礼ニさしむれバ盛ニ彼処へ参る族もありき予ハ此の外ニ急ぐ
用あれバ行ずして止めり此一件ハ後編ニ述ぶべし凡此外芝増上寺御
草彩堀西福寺目白坂養国寺又ハ新橋の外久保町ニ隣りなる草分
名主かよ兼方忠次郎方にも件の日ニハ参詣を許し入るゝこと出

、恭しき此ミ其宮ゟくハ夢しめたき遙拝ニ甚しく腹と御正体を礼拝せし事
なりしに今日斯ニ来り種々と旅を拝しまゐらする奥ニありかつて江戸
より三里此ハ色りん頃その途より川と又耕地を過遠く廻ミ至くなりし

拾六

天然の風景一品として賞すべきの土地なりき

一　江戸巣鴨五軒町の植樹屋野嶌権左衛門といへるあり此家の先祖権左衛
小石川ニ住居今村極楽水元木の通ハ一円也しが其住居の家なりし
ニ神亀三丙寅年の春かとよ行基菩薩諸国経回の砌此権左衛門が家ニ
宿しなひ霊木を以て弥陀の像一躰を彫刻し与えたる是を元木の阿
弥陀と称しつがなく家の内ニ一字を造立し安置せり今ハ小石川元木の

光圀寺 浄土宗 こもと元木と名付しゆへハ行基の六阿弥陀彫刻の初なれハ
なり此故ニ六体の阿弥陀仏を彫刻して後ニ又一体きざミ足立郡
宮城村性翁寺の本尊を木あまりの本尊とハ称せりさるに寛長年
間小石川傳通院に建立より檀左衛門が居屋敷御用地ニ召上られ同所
より西の方三町隔てゝ浅草町を一円替地ニ賜りけり其後又元
禄年間水戸中納言光圀卿の御子頼重を松平讃岐守と号し別家
なされしに付て又々浅草町を御用地ニ召上られ巣鴨に於て
代地を拝領し移住せしより此植木屋野嶋檀左衛門ことに此檀左衛門家より
御入国以前御旗本に召出しなる者三人ありけり野嶋の苗氏を名乗る
御旗本ハ此檀左衛門が別家なりと称されしがむかし行基菩薩の此家へ止
宿しあハざる等も幾何代を相續しけるにや既に神亀三年より文化
十一甲戌年にいたりて一千八拾八年の星霜を経られきむかしより世々零落
せず家名を落さず今に相續して御用木を献り奉り三御殿及ひ大家
の諸侯へ立入なりし連綿として家富栄えるハ目出度家業なる社

拾七

一武州豊嶋郡中野村宝仙寺 真言 ハ淀橋より西の方五町路傍の右側
にあり仁王門を入てより半町余にして中門あり右手に常光明真言
堂左に小阿弥陀堂御成門正面にハ本堂八間四面南に向へり境内
又狭きにあらず公此邊へ成らせられし御ハ必当寺を御膳所に列しなされり但

し境内お賑ひ多く繁昌又になし

一常光明真言堂に弘法大師の木像を安置せり其像の丈凡六七寸も
あらん面像ハ白く彩色し身にハ木蘭色の衣を着せり其年ハ凡じ四十四
五歳前後の容貌にみえ也日輪弘法大師と称して殿所上人とかやいふ名
人の一刀三禮の作とかん

一当寺に大象の全骨あり是ハ享保十四己酉年天竺国の内安南府に
産せしを寧波の商船に乗せて東武に献し奉れり　有徳君殊に百く
上覧しまふ其の後毎に要脚の費驕し後に市中に差置まふ其の後ハ市中
いたし大象少ふて厩地の場所広からず大象及び諸向役人の為大騒の

小屋を築造とかく建かひぬ是に居役せる者を一首の保小屋の張ヶ月
の小屋の何某と繰出し幾あまたなり今一ヶ月より五ヶ月まである其の詮の四
小屋の稱之とるる寛保元酉年石河土佐守を以て四ッ谷中野村源助と
いふ者の請負けて翌壬戌年十二月迄く象扶持を為し食を減せるに
よりて大象斃死したり故に其の全骨を当院に収めし給源助ハ食
を干ゝる段罪より其の家断絶しけるとかん大象の全骨の大さ左のごとし

一頭骨大さ三尺余　　一目の孔八寸

一牙の根本廻り壱尺五分長さ五尺四寸何代語る如し牙先より本
迄三尺五寸

但し膝の邊下より前断にあり

一 猪のかしらに手強し蛇骨或ハ石及び鱗等後世の證據として当寺に収め
什宝の中へ納せり其余くハしきハ略す

拾八

一 武州豊島郡下高田村の山手の方榎戸の茶屋といふハ高稲荷より東北三町
にあり則ち猫坂といふを登り越る事ある所にして左にいふ雑司谷より堀の内
辺への往来なり此処高き事六七丈此茶店より真正面に雄芙蓉峯を見
るに相對せるがごとし更に外にかまへ障りなしその外東西南一里あまりの間
遠山又ハ農田を眺望し或ハ和田戸山につゞきて大久保より四ッ谷の果を遥
に松杉の天然に屈曲して森を帯し松葉家の株のやうなる農田をお畑を耕
し幽に人の往来風情実に一瞬千里の眺景ハ云語に盡し筆紙にも及びがたし
夜に千景又十二の古跡等あまたあれど爲に穿鑿して後編に副述すべし此下高
田村ハ甚広く方二十余町とおもハしく小名あり則ち此処を下高田の原と稱
せり此茶亭を脇亭とかや呼ぶ壬年何者かは翁の句を刻みて碑を
建置ける片辺といへども一箇の勝地にて四季折々の風気自然に面白く
花鳥風月の眺望ハ実に足ぬ處なしとや例の者を脇炉を組立や用意の
茶二品を煮ど床几にや、楽ミまくあふぐさまなり

月にかゝる　附や　鎌倉　五月富士

といふ句碑を建置る程りかや此処より北の方八町ばかりに四ツ家町西の

木戸際へ出る又少東の方拾弐町にして雑司ヶ谷村鬼子母神へいたる又坂下通
東南の方十八町にして高田馬場にいたる此路すこし閑寂にして古松天
然の枝ありて並て逍遥するに足れり

面白さに口をとちけり富士かすみ　鮮僧　以風

拾九

一武州豊島郡谷原村長命寺 真言 ハ寺領拾石にて此辺の建石にも東
高野山と刻めり是ハ西に紀州の金剛峯寺あるによりて東の一字を加へしと
と見えたり寺ハ醍醐山と號せし寺なりしハとて新高野とも稱し侍るにいたる路
もしハ角筈通椎名町より西の方二十余町隔りて左へ入て中荒井村通
西南の方又二十余町にして多井村といふより又左へ入る事十八九町江戸より

行程凡三里余といへり既に東の裏門より入境内広しといへど田舎の殊更寂
土の無人なるハ掃除行届て寺中荒廃すこしもなく本堂庫裏僧房を一棟に
作りて萱葺にせり但し南面にして廊下に谷原山の壁額を上たり表門は
本堂より南の方凡三町正面に建て門の左右に仁王を安置し是より
西南の方二十余町にして石神井村三宝寺にいたるとなん但此地も閑
寂にして花に鶯に富秋の比ハ山門の蘭を採に興ありて又すてかたよ
したいハ此道路ハ僻地のことくしく退座をましき殆と倦りきし
一本堂の西に観音堂あり此堂内に明暦万治寛文延宝年間に奉納せし
絵額若干見えたり久しき蘭若とも見へたり同東に六角堂あり地蔵菩薩を

安置し此六角堂の外に又板囲ひにて一家根を造りて雨露風霜を厭ひたり由緒ある堂にてやありけめ前に鐘楼あり釣鐘甚小さし鐘の銘ハ宝安三年と見ゆ長くらふしき僧寓して安因西の方に庵室あり夜西へ入折曲り小の方を所望して大師堂にいたる左右の諸木鬱茂し又は日影を見ざれば夜の如くハ蚊蚋肌を螫て相つくも忍びがたし

一 無明の橋といふものハ石にて作り欄干ありて長さ凡四間もあり梵字を彫て額付たり但し樹の梢雨露の滴りに依て苔を生し聢とハ見わけがたし又此橋より少し八丁の橋を渡り試て左右にあり枯朽て名に呼ぶハ似も付ざるより大師堂までの両側にハ密宗相承伝燈の祖師高僧を悉く石にて作りおのおの尊像の背三四尺ありよのこその前に石燈籠を寄附とあるもありて竿石にしるす大方ハ享保五年と刻せり扨大師堂といふも格子戸の辻堂にむさくるしく作りたる口三間に奥行六間半ありて高みに少し仕ハ労見し条末さ内陣荘厳向ハ仮殿の事に見ゆ但し尊像ハ大師直作のよしにて平日ハ寺へ賽銭を投されハ開帳せしめ毎月廿一日の三日終日開扉して諸人に拝礼なさしむ別して三月廿一日ハ近郷の男女群参せり去ルほど繁昌にいたりてハ日暮白銀高野寺のある大師又ハ川崎平間寺の大師あるハ西荒井村の大師等にハ劣らしおよばざる所此土地の片鄙にあるその故さらし霊験において何れも同じかるへし堂守井按群大きく又境内広く耕地等を所有せるまでハ西荒井村

を巻蔵し納る堂あり是にて御廟に人の骨を納むる事なれば白銀の塔

寺と大師に系を以て巻蔵と云し又平間寺ハ西の方狭し雑樹を追

又盤茂し境内より此奥に眺望なくば道狭き甲斐なし又長命寺に無

明の橋及び蛇柳などありといへども汚穢して更に道心を生ずる事なし

何もなり昆とせんや後人の心を乱し一往歴して能く観見し知るべし是れハ紀州

高野山ハ大師の遺命により山法として女人堂より内ハ志少しも一切穢

悪の婦女を堅く禁じおかしむるより出し此れ高野山の土を踏む

事ありて蔵に埋る女人の為に蛇柳と及び無明の橋等を設けおきて大師

へ結縁させしものなり又此大師堂のうしろなる奥の院の路傍にハ十王

及び五道の冥官等を石にて作りおかしく高さ三四尺で並ぶ三途川の奪衣

婆と称せるものもあり是ありて冷浄なかりし又奥の院の道中に石燈籠を

基あり高さ三丈三四尺もあらん是ハ 大猷君御寄進ありし松竿石に刻

して慶安三年とあれども是等ハ紀州高野山の図記を百分一に模しける

ものなり例年三月廿一日ハ法要あれバ行て見るべし

一 大師堂より本堂までの間高廊下にて此廊下の間に五百羅漢を安置

せり又おかしく漸く八寸ばかり金屏並べてありいはゞ赤地の綾なぞありて

気をなしべき事がなく外よりハ見えぬ此境内東西三四町にて廣

といへども田舎寺の坪に構へ納めたりなれども又切りりなして面白し但

本堂にて大師の夢想とて積聚のくすりを売事切紙に書て人に与ふ

一東の裏門の左右には酒屋蕎麦屋の類又はわらぢ商ふ家路傍に四五軒あれバ渉りに飢渇を補ふ参詣の者行く道すがら此酒店あるひは長命寺にても止宿をもすることなん是より南北小路を行こと四里余にて保土谷高井戸へいたり又小橋町より入西北の方三里余にて白子の駅よりいたり同じく二里余にて引股の町にいたる境内及び金堂麻宮とも寺小松の平山多く松が枝の陰は門外の花王の咲しなど一品なりて清閑の土地といふべし

弐拾

一相州鎌倉郡江の嶋は東海道藤沢の駅より南へ入て中路に名越川あとりの渉しを越て十八九町片瀬村を過切戸の海を汐干に渉て弁天の嶋に至る凡藤沢の駅よりハ三里ほどなん弁宮嶋竹生嶋厳嶋の浦とも同化なる日本三弁天の内の其一とかなむかし開化帝六年四月の事かとよ此嶋海上に涌出してより後の小角此嶋の岩窟山洞を切ひらき登て春陀武を道智その後弘法大師も来りて神水霊窟等に名を志るし古跡を残し給へるを後世文覚法師の再興せしといひ伝ふ此地の風景真妙にて山谷茂林の年古て海浜の眺望一品なるものをや且下の宮と上の宮との中路たりの崖下に一遍上人の加持水と称するものありて清潔と口へと怪岩の奇勝にして下ハ数十丈の海底鮑蠑なども中く多くハ浮上かくて味ひ

かし猜異し此外に島中井戸とてハなびたる也茂八が海への井同れたる見えを
島中此日用に汲ミきて既に旅店より心利たる案内に焼火を燃させあかりと
穴の形を細見し洞が間を下り岩穴をはひひて海汀に臨み宿り付ひし色水ハ
此地をこめてあれバ松明を照して巌窟に入後出て海浜に憩ふ予倩も
りし事を思ふに恩光十一才の時母と共に此地に遊極せしより此島
に来りおもぶる都合六度懐古の情又少なからず海此岩窟に入
らんとする石の方ハ大洋の浪先打よせて幅狭き三尺ばかりの切戸あり
切戸の東側ハ此方より石面七八寸ばかり高く見えを飛越ぬれバ竜や穴が
猟師等が便所へ出るに基を〳〵此切戸の真中に踏石に乗りしぬきの

真りき尺ばかり丸き石ありて條より四五寸より上へ出てありしを予十一才
彼切戸の中此石上へ飛下りて又向ふの石面へ飛上る事ありし向くえより傍
の者数多見れバ数度見を見をあやまちなむ母及び従者ハ怪我せずやと強く見
をおしとゞめしが危険なりし思ひを今年文化六己巳八月五日夜に来り予今
五十余歳となりしの記憶しぬれバ件の石ありやと切戸の中を見るに
汐の四五寸の中に隠れてその石今もありといへども水中にあれバ飛越の
踏石にハなりがたし但し汐の満干によるならむと福岡子商ふ嬢に尋ぬれ
バ浪先例もおへる石の汐上にあるハ見しことなしと答ふ然れバ四十余ヶ
年を過し今ハ海中浅くなりしかゝるならむ也計り難し

既に四十余年の昔ハ児が渕の下口よりたゝ添て海浜の波打際へ下る石剣
にハ少しの雑木四五本生て予十一才楠木（ヌルデ）の樹へ両手を掛てスサくと小腕の
力一盃に震ふたいとせしを人々何ぞれ今に手やもつきなん又ハ樹の根や枝
なんと叫くに何更諫めしを今も迄も能覚てぬ程に四十余年を過し
今ハ児が渕のあたりより雨や打出しなん大汐や洗ひ出しなん更に土とゞめ
ならし地輪より巌石出て足場さへ悉し斯様子の変りたるの其因変ト寄
海となる秀句思ひあつて人偏家作風俗云語召物箆物にいたるまで
変化せざるの憂世のならひなるか今より又五六十年の星霜過なハ如何
枯るゝものなるらん実にも十年を一むかしといへ〻楼のある事にさも

只此変もかハらぬものハ貝細工と福團子の風味あしきを旅客へ強ひなる
商ふ様をむかしのまゝ見より以下ハ島の古跡名物を左にしるす

一 南の端の窟中なる本宮弁財天女の像ハ弘法大師の作とや内院に弘法
の加持水といふあり此石窟を入数十歩にして左に横穴あるへ分まてつり
暗きゆへ庭のごとし見胎藏界と金剛界の両門を表せるとや窟中
ただ右の見えにハ忍びこて奈建の数をそなめ見るもあやしき石像を寄
寄とあるべく窟内の着松明を照して見遣しに石像を指さし数えて賽
銭を貪より併此横穴ハ後世堀抜えしものとえ遠く江ノ島への
名定古跡といふよの山師見たてより作者こゞちしの事作多き左に信用し

かさなりて又多し西窟中の奥に西記の大日尊を安置せり天女根本の宝
祠といふ又東の窟に無熱池あり蛇形池とも称す又西の窟に弘法大師の護
摩壇の跡あり或は日蓮の跡石といふあり伝へいふ日蓮此窟に籠
り石上に跌坐し其感を祈りしといふ法花経書写して内院に納めしといふ此経
は別当岩本院方に什宝とすといふ西此窟の旧号をば本小岫(モトホソクキ)といひしと伝
古来は金も出しとなん西龍窟の前に奥板石といふあり此岩の西平かにし
て奥板のごとし今は雅客文人此石上にして酌を置酒に興じ詩を賦し或
は詠し鮮魚を調味して盃を廻らし海上眺て遠くは遥に東南
の方森戸の洲崎を見て風景又賞すべし此山の麓に本宮の旅所あり

例年四月初の巳の日には龍窟の尊像を神輿に移せ別当をはじめ社僧神人等
列を正し途中音楽を奏し旅所へ供奉の祭礼あり其の行列も厳重にて
殊勝神式一品にて古雅なり皆土民の男女渡海し来りてこれを見んとて
群参群集し又十月初の亥日元の龍窟へ還幸ある其の作法行粧は四月のごと
し則ち四月より十月までは山上の宮に尊像のおはしますを常房の穴中に入て
祭礼もさもなりし且本宮の御殿の額は江島大明神と書て後宇多帝の
御宸翰と聞ゆ又開山堂は本宮の側にありて弘法大師を安置し其の外末社
数あり窟の花表の額は大宝殿と書て弘法大師の筆といふ又別当岩本院は
金亀山與願寺と号し此島の惣別当として本宮龍窟を守護し密宗にて

妻帯せり此宮殿の額ハ叢林院と書て朝鮮國螺山の筆とかや上の宮ハ
當山中腹にあり祭神弁才天女ハ慈覺大師の作のよし當社ハ文徳帝三年
慈覺の造立なり上の坊ハ密家にて清僧之を司る三坊のうち別當にて
上の宮を守護せり又下の宮の神殿ハ山の麓にあり社説に曰むかし正治元年
良真上人此島に來り志願を立しに感得の事あり後入唐して宋の慶仁
禅師に謁し日本念の湖の事を咄されし禅師の曰日域の江州湖ハ觀音
垂跡の地なり則ち東方の名刹にしてその地の谷に玄門の洞あり又巽の尾
崎に玄門の荒石ありその形蝦蟆に似たり師日本に帰りなハ此の湖へ到り彼
洞の前にて荒石に向ひ社檀を建立し此地ハ龍女常住の無熱池なりと教

えける良真此教示を請又碑石獅子石を携て帰朝し此の湖に到り將軍
實朝公に請ひて建永元年初て社壇を建立し自ら天女の像を彫刻し安
置し且開山堂にハ良真の木像を安置せり且碑石ハ鐘楼の側にあり高さ
五尺余幅壱尺七八寸厚さ四寸許なり但し上と西縁ハ別石にて座石なし
年歴て今ハ土中に埋んで建たり碑文の外すたり折て継合して見而土人
の傳へに此の湖の屏風石と云此碑ハ古事に云宋國慶仁禅師より將来
せし碑石と龍石面に大日本國江州霊跡建立と記し篆字を以て三行に
鐫紀の一字石損じて僅に云扁を存して紀の字とよめる園の男雲鶴之稱に
是古雅風流の一奇品なり碑の文ハ剥缺して分明ならず十景惟人感とおよ

ワたく幽学の者惜むべきの古き道碑の図ハ鎌倉志にみえたり又下の坊ハ下の宮
をまもり護し密宗にして妻帯なり皆修験者を兼用すと見ゆ両州の花表を
島の入口に建たる此の島の惣鳥居也又荒神石も荒神祠の脇山の中腹に
ありその形蝦蟆に似たり種々の浮説ありてさもしき事ハ略ス又下の宮へ
登る坂の半に福石といへるあり俗説に云此石の側にて何にても物を拾ひたる
者ハ極て富貴の身となるといふ愚婦の説なるべし又蓮宅池とて此山中の
崖際にありむかし一遍上人在所の砌此池より弥陀佛有縁の地なりとて
池辺にて念仏せられし事ありし則ち上人自筆の歌ありて蓮花のと
書しやうに岩本院の付堂にて是に又竜窟へ下る数丈の崖下を見が潮

といふ相模にむかし鎌倉建長寺広徳庵に自休蔵主といふ僧ありける其
頃信夫の庄とかや宿願ありて此の島へ詣でけるに此山中にて一人の兒
少年にて行逢ひぬ自休是其の色香にめでてや有けん彼の僕に問へば鎌倉
の相承院に住る白菊といへる児ぞと答ふ夫より人して竊に思ひのありたけ
を文通せしかども稚児はその返事なし依て或日ふと思ひ弥増しいるくと
事を書ていひ送りしでも更にふびく気色見えざりし月をかさねて立し
たとふ切に迫ち立しまま白菊情ある少年なりやありけん或夜竊に宿を出て寺
を出此の島へ渡り侯しか扇子をあまへ松の枝を寄る人ありけん兒を
見せてよとて立別されその扇子に二首の哥を書付たり

白菊としのぶの里の人とはゞおもひ入江の島とこたへよ
うきことを思ひ入江の島陰にすつる命は波乃下くさ
斯二首の辞世を残して此淵に身を投じ死しけるを聞て自休慕ひ来り此
歌を見て悲泣落涙し一律を賦せり

懸崖嶮処捨生涯　十有余霜在刹那　花質紅顔砕岩石
娥眉翠黛接塵沙　衣襟只湿千行涙　扇子空留二首歌
相対無言愁思切　暮鐘為孰催帰家

さて某の色の情れ深き淵りて己に入江の島をうらみしき
かの詩歌を詠じて此渕に其身を投じ死しけるゆゑに児が淵といへり

白菊が塚は鎌倉にあり又自休の像は法花堂にありとなん又児が淵より岩屋へ
行小坂に三天とよめる岩石ありて三ッに裂けたり梵天帝釈天四王天の天部か
迎岩などといひ伝ふ又竜窟より東へ廻る第二第三の窟を白龍窟と称た
是は白龍二ッ常に此穴中に蟠まるが故なり彼の龍が岩屋ともいへり又第四
の窟中に龍池あり諸竜ここに蟠まるといひ伝ふ又第五の窟中に飛泉窟と
いふあり脇の下に池ありこれも白龍蟠まるといひ伝ふ總じて島の廻りに十二の
窟あり又島の東北に聖天島といふあり此島の形歓喜天の像に似たる故に
名とせり窟中に良真上人の像を安置す又東の山の半腹に円可寺と
いへるに地あり密宗にて実に幽閑なる寂寞松風の音に和して遥に波の音

き緑少の勝地なり且此島の名産と称するものハ幅海苔海雲鹿尾菜海
松鮑の粕漬いろ〳〵の貝類等なり但し鮑の粕漬ハ東武より鮮貝を粕に漬て
当所へ運送するを武城の人調へて土産とするなり粕漬ならぬ所ハ
又岩本院の秘書といへる江嶋大草紙ニ曰夫当社の神ハ大己貴命と久延彦命
と称すありて天照大神と共に其の和魂を祀る富主姫命と号する此神
天降りましく弁才天女といふ江島の神秘とせしことを神系図載す和
漢三才図会ニ相州江島の神ハ素盞烏命の子女倉稲魂神なりと書り
ここに據へとして承安三年文覚豆州謫遷の昔頼朝卿に謁し義兵を揚
させんと文覚急の時へ清ぐ弁才天に祈願して其の後平家治り天下静謐の
日又ゝ文覚此竜窟へ参籠し奥州秀衡調伏を祈る此時金窟に花表被建
たりその外鎌倉武将の尊崇或ハ龍窟にて雨を祈りし事など粗東鑑に
見えしなり又鎌倉の執権北條時政ハ江の島へ参籠して子孫の繁栄を祈り
三七日にあたる夜緋の袴に柳裏の衣着たる女房の顔容端厳なるが忽然
と来り時政にいへるは汝が前生ハ箱根の法師にて六十六部の法華経を書写して
二十六ヶ国の霊地に奉納しけるし善根により再生せりこれハ子孫永く権
を執りて栄花に誇らん但し挙動違ふ所あらバ七代を過ぐべからず不審
に思ハゞ国々に納めし霊地を見よといひ捨て帰るその姿を見れバさしもうるハしく
かりし女房長二丈ばかりの大蛇と化し海中に入りき其の跡を見れバ大いなる

鱗三枚を残し置けり時政日比の所願叶ひしことを喜び彼鱗を旗の紋に
ぞ付られける後世に傳ふ北條の三鱗の紋これなり又後奈良天の示現を受て國々の
靈地へ人を遣りて書寫の法華經を奉納させしめ給ふ其の上書に大法師時政と總
めありしは不思議なる社にと太平記にも見えたり是なり天文十八年關八州の太守
北條氏康公の上修の神殿末社諸堂の荒廢を歎き黄金若干并神寶
を納め置しより此代々將軍家の御崇敬有て神駿を獻し著明にして給ふ
江島社内の例祭嚴重なり中にも年々卯月初の巳日殊に賑はしく也
宮旅所より四神の旗左右に列て神幸は其日の巳刻龍窟より音楽
を奏し御出の先に幣帯を副せる警蹕の青侍柳の仕丁白幣獅子頭

櫃を舁ける者神鏡神寶を捧げ太刀弓玉楯の神具等其外樂人はた左右に列して
音樂を奏し荷太鼓は双調を拍し磬は乱調を拝じ社僧七人別當職三人
各々翳をかざして神輿を渡し奉る輿の供は海より歸益を隨へ汁海岸の
上は嶮しき崖路を貫ぬとして神幸あるその行粧いと古雅にして實にめで
たし其の間藤蘿の響きは青海波を奏し峯の松風は萬歳楽をうつぶけり
東武より僅に十三里ありければ男女日ごとの徒參ひきもきらず全國近江の浦々より舩
を漕つけ此祭式を見んと群集し海陸の賑ひ大方ならず此島山の三院又旅
店等は遠近の旅客集ひ泊りて立地もなし其の外の家々も縁ある男女は
誘引來りて日夜に飲宴し群集人の山をなせり且此島山の形勢を似くりと

て金龍山と号し寛忠の紀行には窟を蓬莱洞と書れしは神秘なりと記寛忠
の紀行に此島をよめる歌あり
ちはやふる江のしまりやみかさしらん龍の上なる山さくらかな
実に厳島竹生島江島此三弁才天は供に山水の勝景風光の勝地を撰ん鎮
座あるものは天部の中にも殊に風光の名景を歓びつゝ尊ぶなりさ侍しるなり
は故あることや此外羽根田の弁天忍ばずの弁天洲崎の弁天石神井猪乃頭
の弁天布施弁天の類の弁才天といふも清て事に極めて甚し弁天鎮座の
地は勝るゝに風景の地なれば此天女の尊意実称し奉かく覚ゆ凡此島開化
帝六年背涌出せしより千有余年の絶景乃勝地なりて稜々たき蓬莱の石あ

岩殿の穴ふきに根こそぎ見べしかきば実朝公の世の頃は除しく渡るべき土地に
はあらざりしや左の頃より後の将人の穴は集まりしは漸く四五百年に過ぎ此島の西
片瀬の西に在いしの家は鎌倉右大臣殿をはじめ其世の穴人の詠多千年よりて
多かりきれば此島ゑりさて山洞の路を修造し人家建ならび後世に至りつれも
此島に至り窟極まるものは四百有余年に至るのとなへてより只折しは春に至
て鳥へさ後に鮑魚を調理し口腹を悦ばしめ保養するの土地なるべし恨く思て
案内を供に細えし拾く急ぎしも茂八が宅に宿りぬ此茂八は爾より二十二三ヶ
年以前水道町西野屋作兵衛といへりし小間物屋の時出きし彼の縁ありて客
茂八を身をよせ伽羅の香すが煉て居し頃よりの知己なれば去ぬる文化四丁卯年

忽の御斷燒せしハ茂八が父なりせバ島の規定として三ケ年の間ハ父の不肖
ありハ家名のおもざりしふ去し出火の以前より病ひにかゝり醫者とありて出火の節ハ
漸く合扶育をも逃るれバ殘貨ことなく焼亡し孫子ハ日頃悪まれける者なれば
去れこの年さし許さるゝ三年を經て開帳年なれバとて文化六己巳年の二月
参詣者も出來たりしが今ハ開帳終りて八月吉辰子共々くしき新巳なれバ火
事に及び我形宅の祝儀かくしく名染の者も合せて金三百疋を差投して茂八振舞の
為ハ萬く踊り色々と約しまゝなれバ百疋づゝと定めて出席しける此日奥ハ皆
深山よりて飽満ぬ振舞たのだとし

一 貝燒 あハび　汁 崩しとうふ 車ゑび　坪 赤貝 うぐせう 山椒　燒物 中鯛 塩やき

二のぜん
一 汁 しゞミ 鯛うど 短冊　煮メ あハび 甘煮 長芋 小串 青昆布 椎茸 まきれ麩

三のぜん
一 茶の汁 吸口柚 鱸うしお仕立　平 鰹 マ切 蓮芋 初茸　中皿 鯛 そぎ切 大根 ぬたしあへ　猪口 きくらげ まる芽

一 かうの物 三こ漬 せんりがけ　酒　吸物 もうまし 鯛ハさすり しやのこちらして　砂鉢 鯛 こそやきし 小ふきび 甘煮

一 大丼 ちやぶ昆布 漬り きりさざい　砂鉢 きすゝ細引 三杯漬 きくらげ せうがせん　吸物 鯛あらうしお めうがせん

右喰仕舞膳部撤し入引て猪口茶菓子出し

その夜ハ殘暑も厳しき孫子茂八が能く整せしき種々の物がたりに時を移し えるも海
濱の故の臥ひふりせバ色々ハ醉ふまかせ河東岸一所群集り揚て興をつくぬ斯く
臥々ふ入九逆浪の音聞こえして喧しく又蚤ハ又群を集て蚤きうひの身を
又ふ膝らまばぬ色の水ハ沉醉してゴウゝと鼾ごうく再ふ無くいとゞ蒔かまろバ文部く

海上を見きと吾の脊月ハ戻へ〻思ひて逆浪の音ハ一入ニの凄し又藩図若
て卧といへる兎角蚤の手ゟしやしも禄ハ〻ま禄ハ矢立ニ為して紆懐ニ楽書し
置けり

館傍
大洋

手にとるらふむらふるまでと波の音ふきとて名覚て暮てみしかき

旅のよハ痛覚偽あるいその流ろまく清さき波ゟせの杭也

みえ孫を経て見炉を挽御盈へうちお汀ふ引上乗し舟ゟ徭かりて四方を眺望れ

るに稲村ゟ崎の峯ふ茄のさに松海上の打暗を限りちるまも女大洋ふ帆通てしし

る舟の風情又おさの風景も一品すて面白し形て攝所町ふと又岩ゟ汗

旅店へ戻ちバあさ飯の振舞左のだし

一 鱠 鯖ぬたあへ白瓜 かうがせうがせん　汁 切ふ松原し 青まめ　坪 もどき筍切 いとこけ 蕨こえ　焼物 大あぢ 塩やき

一 平 ひとびさより みつば玉子ぢ　茶碗 鯛切身 葛引わさび　ちよく 膳 にんじん　かうの物かうや

一 酒 吸物 あじ うしほ　小皿 あまび 甘煮

一 彼是と見る元巳の刻も過る頃急ぎ支度を立出るに兼て用意しける案内を
待ぐ路より案内をゟ付置しとてその者ふ案内并当所名所なと訪ねて知
さふ送るかでに片瀬竜口寺要法坐をちかぬ腰越満福寺切通しの極楽寺
虚空蔵等の宝物残りなく一覧し長谷の町ふ茶当を元廣ゟへ飲寄り
材を独し夫より案内の者へ暇きりし長谷寺ゟぞ詣でけり

弐拾一

一 相州三浦郡森戸の明神ハ鎌倉飯島の矢札根井戸より小坪村七湊ゟ坂道しり

を過て東南の方二里ほどといへり其中瀬多古井門を越てより濱つたひ葛
山村の南五町余りにて森戸明神の社地にいたる此社東面して陸地につゞき西へ
は海にさし出たる小島也此島全体地続より涌出して自然石の小山と見ゆ南方
六七間東へ廻りて岩窟の中に明神の社あり祠際に三間四面玉垣をめぐらし
安珠樹此たりの方に松山を七八間西の海手へ引抜て汀にあり此汀より又海
濱へ五六間ほどさし出て別に小山のごとき岩あり是も怪岩あり高さ二丈余方
三間ばかりなるが海濱へさし出し巌頭に雄松四五本生じ高さおのおの八九尺岩
頭すこしは更に土なきに松の根は縫ひたるがごとく岩の硲(ハザマ)にかゝりて汐風に幾年
枝々の曲りたる本根の面白き樹形を造るといへども年々新芽をなしん珠

更天然の奇木實に賞翫すべき也此松は巌石の方にさし出て怪岩の頂上
に生じて年古る霊地の松を社千貫松と唱へて海内に名高し是はむかし
鎌倉の右幕下此松を愛し給ひ千貫にも替じと御所の庭へうつし植
んと欲し給ひしより千貫松とは号しとかや今に其松岩頭に風木して形も
面白く屈曲して頼朝公の御感に思しめしけるも宜也此松六百年の
今といへども大木にあらず幹の太さ僅に差渡し七八寸也しかれども高
さ二丈にあまらずして四方へ枝の垂茂したる事宗枝の数九階にして其の根
の能造りたるも及び難かるべし久しく年代を經ると雖樹のたらざるは岩
頭に土なきがゆへならん只延びして枝の四方へ垂茂きしは汐風に強く当りぬ

收まり放ちたし予御まへに画がきたらバ図画し土産にせんに残恨なからんか
らん依て此地の風景あまりに異に別世界の心地して其景の妙ハ只記臆
にのミありて筆端にハ及びがたく九牛の一毛をもうつし難のミ金澤の八景よし
と雖も当所に比ぶれバ細密にして作りたるがごとし実に生地の絶景ハ言語道
断古来より此景色の風気見事に兎角の論なりし

一 此浜際より西南の海中陸地をさること半町ばかりにて海中に[illegible]
十余間の平石あり是海底より涌かし潮水に浸りて石上とあらハ僅に
あらはれし見ゆ此石上に於て昔むかし松胡公庭成せられて此処にて致観飲宴しありし
古跡なり後の千とせ迄ハ此石激浪の上へあらハれずと到へぞり又此石上へ行

迪での路海中にたゞり飛石伝ひ歩りも乗ってなぎさの平石ぼうし自然に海底
より涌かし石面凡そ人金或ハ三尺大き者ハ五尺にも余り候が海上にあらハまかり候
に付人皆をあらさだして件の大石の上より陸地へ往返すり其石ハ彼二十余間
の平石の面ハ能常さして器物をうけ付此陸石の上にて飲宴し今の見つり又
汐満さる時ハ彼飛石の大ひさきハ悉く激浪の下に隠れ件の大石も海水に浸
りて石面さへ見へず陸より又田地ハ御船ハ小舟に棹さし彼大石の上にまり務に
踵を並べし石上に立て網をおろしたる人もありけり此等の敵景又余にあるべ
しとハ思はれず識によりて言外不思議の奇景なり且又急の情ハ遂に雨
にあつて赤城天の厳窟竜洞究等を見ざれやまぬ又藻虎ハ階段をバ小乃

方なきまで此風色又なべらば古来よりいへる森戸の十景左のごとし

一 佐賀岡の夕照　一 名島の汐干

一 小坪村の月　一 鐙摺山の残雪

一 田越川の網引　一 守屋のよる雨

一 江の島の漁火　一 三浦の帰帆

一 雲間の不二峯　一 光明寺の晩鐘

然此外にもあり世々先哲の詩歌等千首あまど筆紙に遑ば略し且此地の

旅宿ハ森戸明神の神主方と又桜山村の酒店大文字屋にて人々の需に

應じ能此地の佳所を考え彼漁舟の上よりも眺望すべし凡大体の

人々多くハ江の島鎌倉などを見物し森戸を志して行ば金沢をめぐりて東武へ帰る

者多し是唯飲食にたよりよき地にのミ泥みて風景を見せざるが故なり人々かゝる

いろ〳〵と雖然より登し事江の島鎌倉辺を経歴する事六度の内両地よ

りあそび今度実に天造の風景をめぐりあるを観まで後し此地の風景を知

らざる旅人に吹聴せんと干の中に小川を読し並於此地より武州金沢

の川村まで三里同じく瀬戸橋まで三里半又相州安崎浦賀へ東の方之

里ありて安浦よハ道寸の城跡並ニ其の観音浦賀の湊などをもしめ寺社

の古跡勝景数多あれハ是へめぐりしも日数も三日めぐりやせんと色水ハ東武

納所不用ありとて好まざれハ行そしで此所色より陸地を出所余まて

茶ニ山村の市中ニハ大文字屋ニ憩ひて空腹ひを退めぬ此大文字屋ハ当処ニ
ての食店往還の旅人ここに集ひ寄りて飲食せり其の格子草加宿の
市野屋ニ似たり良とがりて憩ひ入此家を立出るニ農夫の妻女と覚しき者
雌牛を引来り金澤まで牛ニ乗りなんやといふハ彼如の費語へ樽を牛ニ肩を
寄りて了解る之牛ニ乗ニ人ハ命永しと伝ふ殊ニ女牛ニ乗るハ年並（スナラ）之事なるへし也
さしもるニ既氣より牛ニ倚がり武州金澤の橋本まで四里の道乗りもしと
歩むニ任き四方を眺望しただし吹せずり旅情をふさぎむ又一興なり凡女牛の
渇然ニして上下の山坂の穏か成ハ乞ニ使さるハあらじと思えり

牛の背ニ又存都へ爲りこち

鎌倉 以風

一武州倉岐郡金澤の勝景を飽まで目下ニ眺望せる実の一覧亭とや知る
大寧寺の山の絶頂ニ建し此大寧寺よりハ侍従川ニ添て東の方三艘ニ上
る寄り湖水ニそひし路宗ニて東の山際なる大寧寺といふ此寺の庫裏の
たより少々の開道を傳ひ登りて絶頂の叢林ひニ出る是なりより一覧亭
なる故ニ此亭ハ瀬戸橋の方よりハ真向ニあたりて湖水を打越西北方の山
上也此山高き事七八丈四方ニ元山ニて絶頂一際平坦なる亭ニ三間四方
なの絶頂上ニ樹林を伏せてがめし能八景を一望の中に接せる此亭ニ南の
方り僅く古来より一覧亭と号し遙ニ北向の方を見れば富士山ハ能見
堂ありしより左の方ニいづミ右の方ニハ稱名寺の山の木立又ハおりしの右林方ハ

乙友の汀漁ヶ崎の渦く野島の松山より塩浜平潟洲崎瀬戸の二橋照
手取ふるへく杉又君ヶ崎の辺より杉坂瀬戸瀬戸の明神琵琶島の弁才天を
そびゆ圓通寺米倉の陣屋龍石の依稀たるより六浦橋本門村田川辺
一望の中にありて風色筆紙に尽しがたく又遥の北には相信駿甲の山々西に
は伊豆天城箱根二子山當又後を振返りて南の方を見れば安房浦賀
まで手に取るごとく東南の海のあなたには房総の山々は墨絵のごとし又東北
仮奈川河崎の出崎より品川芝浦御村の御崎羽田の浦まで眼下に見
亘て風色の面白さ言語に述がたし依て此所を一名四望が嶽といひ或は
十国山ともよぶとかや夫此地はむかし水戸黄門光圀卿は心越禅師を同伴し

のひ当所の風景は唐土の西湖の風景に似たりとて是も八景の地名を付
及ひ八勝景の詩を賦せられしが其の後又京極高鏡岳居の和歌八首并
添りし本国十二景の辺よりは詩歌は泉下に埋せしが如し去れば此大寧寺は
此山の頂上にあり黄門心越禅師の定められし古来真の一覧亭の跡とて此所の案
内に庭は其の後大方は龍石の奇也依て一覧亭へ同道して亭を一覧亭なりと誠
や多く雑談なし又案内者と多くの其の族も地理を知らず何惑はされ龍石の寺
を一覧亭なりと思へり是定よりも然しといへども是は橋本より侍従川に沿ひ東
の方三艘より大寧寺へ案内し真に一覧亭の跡より東の方は山の裾を下りて
空の樹の舟渡しを越へ塩浜を経て瀬戸橋に至るまで道のり一里余遠くして且

山あり船つなぎの船場ありて路遠く隙の費あれバ多くハ栗田の者人々を備
え越ハかり但し飛石の体験亭より眺望すれど雖色ハ唯西側に詳して东北の
二方のミを見るに残一峯の中に八景及び十国の山々の風色ハ見えてかくし且又真
の一覧亭と云ハ飛石の昇天山金龍寺よりハ四五丈も高く四方掛揃なり実
湖水をも越望を一面に景望する備地より大体の人尋来るとしても其の者ハ
皆誑惑せられて体験をなす故にしるして誌し置なり
一此一覧亭より脇を東の方此山の裾へくだりて室の木浜へ出る場へいたる夜よく
登りて風景を眺望すれバ高嶽の頂上にして細密に見えて似るに能く景気
又一変して其の容森実に西向し且此舟つなぎを东北の湊へ越て野島を見る町

の中程より左へ今松山の後通り垣瀬へ出れバ男女老少あ混じて垣溜りなの又
めぐらし海峰村より瀬戸橋の邊より南の方遥に一覧亭を望み見る事
此風色も又一品より西小泉の入江の風情ハ此も更に明神の東隣なる類
漁家ありて立並び眺望し瀬戸明神の名に高き御木なき代々神
に残しあり香細の取合せに家残として石垣の西琵琶島の兵ゐ天を
まじめ五福石ハ湖辺の汀にありて四石八木の取合かも将又昇天山金
龍寺の体験亭ハ石上に三島明神飛来りて新開ありてより以来飛石と
ハ号すとかや強ちに石の飛びるにハあらじ龍あちこち徘徊し見めぐり
僕と共に橋本に止宿し森貫稲荷旅やかたに夜をかり一泉の夢をむすびて

しく旅泊の情をとふぐさえぬ

畑あらに虫さわぎきよしりの声　　鮮僊　以風

二拾三

一　蒲の冠者範頼公の廟所ハ大寧寺　貴洞　中にあり建長禅寺の末刹なり当寺ハ従川の東凡十七八町山際の裾外に當山寺門なく本堂ハ西に向へり當寺に範頼公の自筆の色紙を什宝とし帰元の年号月日ハ過去帳に志るし位牌細まもり折あしく住僧他出して見ざりしハ実に残多し此寺を大寧寺殿と称号をもて後年位牌堂を一寺となして大寧寺と呼事と見ゆ當寺本堂のうしろ竹藪の中に範頼公の墳墓及び従者といふ人々の墓五ッ六ッならび建て古墳の殊勝に見ゆれども年来竹の葉に苔生しておのづから石面許に命をかけし同し源家武将のはかなくいへども此所にて果報拙くおはしぬ範頼公の御墓ハ源君鶴が岡八幡宮の東に隣りて法華堂の山上に恭しく現在して石の玉垣完たし殊に薩州の大守中将忠久天明年間三井孫兵衛親和に命じて右幕下の由緒及び武家の天下と興りしをおもひし武将の棟梁たる功を真さに紀さしめ御廟前に碑を建てむかし治世の御恩ひ出でらる威徳顕然たるをいはゞ範頼公の廟所ハさびしく人多く訪ふなるを桃なく常住竹の葉に苔むし松風の音のみたよりてする懐古の情みなぎらせ

あざきふの世ゝの月日も凡竹の葉分凡風の常にきくらん　　鮮僊　大淳

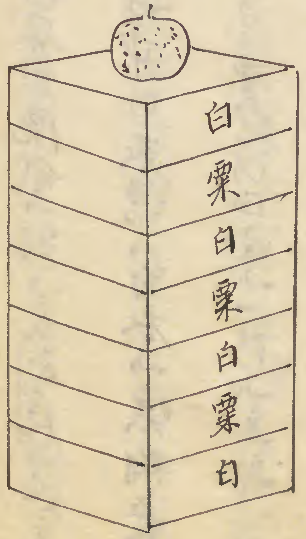
二拾四

一　浅草寺観世音年中行事及び境内の古跡品物数多あれど中に例年大晦日の

一 追儺の式ハ殊に古雅なるものにて堂前にハ主法を始として知かざるも定めがたく押
詰し年の暮にいへど男女老少参詣ハ引もちぎらず且堂中内陣正面中央の
御厨子の前にハ正面に六角形の鏡餅九ツ三宝をかさねて備え左右に穂田原
の草を提上に九年母をさへかざみ餅の二宝ハ向の右とにならし餅と栗餅
とを内先あり武成家成等が供じる造花を納ある為又月じ左右に二宝の
菱餅をセツヅかさねて備え上に九年母をさゝまくり二宝ハ白餅と栗とを内先
にハ何ざかる事ふし其外に中堂御厨子の前荘厳常にかはらず香水一盞
遠山閑窓等と内陣の左に着座し追儺の式を見むやと待ちた時既に申の
刻頃天山の時鐘撞出せると其ともし内陣の右に灼し鐘を鳴せバ相図と見

えて仏前にハ蝋燭に火を点じ香を上て去也居也院代にかはりて別当といへる
僧ハ七条袈裟赤衣[illegible]礼盤の上に座せバ坊中の衆僧ハ白衣に裳附五條
袈裟着して十四五人立出て内陣を前にし中堂の正面に一列に立ならへは
不代の若僧ハ毛皿を持出役立ならし衆僧へわたし終て一同に伽陀を
唱ふその間別当ハ礼盤の上にして呪誦経してふじ手に印をむすび供物をとりて
法会の作法あり又衆僧ハ伽陀をとなえながら時々花皿の中より樒の青葉を
ちらせり此式終て後参詣に随きちらせし樒の青葉を拾ひ家に持帰るも
ありけり両段に伽陀終りて般若心経よみて衆僧一同に下て着座する時役僧
の中より一人鬼の面を頭にあてゝ西より東と後堂より走り三返走り出る

節より内陣の傍らへ篠竹の葉つきを結び同じく延ばさげと延尺ほどの中ほどの前に
杭く篠竹を立て卷をわりて糸を付きニ通りに延ばし追儺の式終り京師年結の
後もさりありて退散にての式終りて後九中の法則是にて御前に供え鏡
餅の図左のごとし但しきわ此鏡餅も数升の分大きさ察知すべし



此菱の二色の鏡餅左右にあり

弐拾五

一 武州新座郡野火留村平林寺 大徳寺派 ハ膝折と大和田の間に挟まりて野火
留の中程南側にあり則ち建石に金鳳山平林禅師と刻せり当寺開山は
石室和尚といふ中古元禄年間武州岩槻平林寺村より此地へ移住せり
さらん織にむさしの中なる大地と呼びし此寺松平伊豆守をもって右京亮
侍る守等一族の菩提所より南件の建石より内南側の左右に松並木の
而も古木の高さ数丈或は邦々又は枝を垂れ繁り茂り迄る天然の古樹は幾年
やかさなりん境内立樹の種類は通常ならぬ面白し此松並樹總門までの間
長さ十八町あり同國足立郡大宮の驛一の宮明神の大門の松並樹是よ
継ぎし南件の霊樹を始事十八町を過ぎて右の方によりて足の表門あり

石川丈山筆の額をかゝげたり此翁壯年の比ハ嘉右衛門重之と号し後ニ世を
遁て凹凸窩（アウトツクワ）といひ又ハ頑仙子（ゲンセンシ）大拙あるひハ六々山人天哉翁等の称名あり天
正十一癸未年三河の國碧海（アツミ）郡泉の口に産る寛文十二壬子年五月廿三日
満九十歳にて没ス日本に於て中古隷書のてぶりと賞美ス又表門の
額ハ金鳳山としるしてあり二重門の横額ハ凌雲閣と書ス又本堂の横額にハ
平林禅寺と認めていづれも石川丈山の筆なり其額の字形左のごとし

金鳳山
凹凸窠丈山書

右の額ハ初手の四ツあし門にかゝる幅凡三尺余長さ五尺余にて四文字を
中高に彫上て金箔を置たり名の下の印ハ四角の細長き形を二ツ押たり
かんがくの下ふく地ハ黒く塗ても自然に見て古雅なる額

凌雲閣
六六山人石凹書

此額ハ庫裡禅堂の前なる中門の二重目の上にかゝる
下ちり又二尺幅凡三尺余長さ四尺余文字をハ
彫て金箔を置たり下ハ四角にしてかんがくの下ふ
しるし二ツの門を初め諸堂僧房ニ至るまで堂塔みなも
古雅にして一切俗事をまじへざり

弖林禪寺

此横額ハ本堂の内正面に懸けたり幅凡四尺余長さ五尺余文字をハ彫て胡粉を入たり下に篆字を二ツ彫たり此外も聯の數若干ありしが皆雨あたりて土足ニ堂内へあがれバ遠くして讀得難かりし右三ツの額字ハ只かたちのミを写し得たれ

当境内の廣き樹木の枝ミに剪込でまた掃除の理細（キメコマカ）に行届て帚木目の青海浪に似たり風情実に寂靜の清地とも云べし凡濁世の僧分有る所状にむかしハ更に惰弱といへども僧房境内の隈々まで掃ちぎりて綺麗なるハ禅家に過たるハなし東武の寺院ハおしなべて諸宗ともに皆繁花の風土に推移りて一切の事俗をこのめども既に清僧の徒あり全く真俗の二品を兼ね流行の風儀をよしと思えるに今此地ハ目に見えぬ程の物迄しらぬ玄妙の掃きあれバ参禅悟道ハかゝる片鄙の場所にありや当又當寺の鐘ハ元禄年中此地へ移住しての鐘なりとて開山石室の時に携られし鐘ハ関東の戦場となりし砌紛失せし也又古陣鐘にせしとや下総國葛飾郡大宝村発光山大寶寺とかや云寺の持にハ八幡宮の社内に鐘あり銘に大日本國武蔵國崎西縣渋江郷金重

村金鳳山何々寺と申三字ハ後摺落しるや廃滅し年号ハ嘉慶元
年丁卯開山石窓叟善玖と識付あるよし 寺僧の物がたりき予その鐘を
見ざれバ是非をいひがたし 但し金重村といふハ今岩槻領にて平林寺
村に隣りたれバ往古ハ一村なりしを裂て金重村平林寺村とせしか又ハ本
名金重一村の中に平林寺ありしが堂塔僧房のありし辺のミを平林
寺村と小名に呼しをいつしか二ヶ村と定めしもしるべからず 嘉慶元年より人
皇百代後小松院の御宇にして将軍ハ三代とこそ申し御名ハ東山義満将軍
の御代なれバ文化十一甲戌年にいたりて四百二十九年におよぶ古き寺なりけり 又
清潔の水の潤澤にして境内を横竪に張り流る 柾いさぎよく庫裏の内乃

そこ元の足本まで清冷の流水張り渦まく 柾ハ霊めづらしく目覚る心地して
朝に夕に心身の穢悪の垢までも清めなぐくらんと思ふる古来より辺ハ一圓
悪濁の水のミにて農民一同愁ひなりしに松平伊豆守三代目信綱ハ此の理
を計り農民の歎きを察し玉川の水を此土地及び引股の所へ分水し引て
より以来当寺ハ勿論野火止一村ハ至て富て街道路傍の両側まで潔よく
逆流せるハ全く伊豆守信綱の陰徳見る当所の一品にして当山しき
事なれや既に東武下谷浅草辺ハ大まで清潔ならざる水も以て買水
として日用とたしける族に此土地の逆流を見させバいかバいえるならん哉て実にも
これおし杜撰ても惣門の柱に落書しけり

堀兼もむさし野広き野火とめの流れなどひきてその水音
聞く門前の農家に憩ひ用意の手焜炉を出し茶二品を煎じ老夫を相手
に談し土地の由来などたづねてむかしふくさにつゝむ茶の水軽くして甘きがため
く煎茶によし當所ハ松平右京亮領分とかや四ツ過る札場より北へ二
引股の町へ出る里余ありとなん

一 野火止といふ地名ハむかしより種々の辭説多し或書に曰むかし有原の業平三芳
野の里に謫居の時その里の女をぬすみて此處に隠れ居たるを國の守人を
はなちて此野をやかんとせしに女つひてわれをよこたれば見を憐みてやく事を
止むる故に名ありといふ又伊勢物語に曰むかし男ありけり人のむすめをぬすみ
てむさしのへゐてゆく程にぬす人なりければ国のかみにからめられにけり女をば
草村の中におきてにげにけりみちくる人この野はぬす人あなりとて火つけ
むとす女わびて

むさしのはけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

とよみけるをきゝて女をばとりてともにゐていにけりと云々 又回国雑記にいはく
此あたりに野火留の塚といへる塚ありむさしのはけふはなやきそと詠ぜしによりて忽に
烽火やみとまりけるとなんそれより此つかを野火とめと申伝へし由の
人申侍りけれバ

若くさのつまもこもらぬ冬されにやかてもかるゝ野火とめの塚

此道真ハ准后の記より考まバ今平林寺の境内に九十九（ツクモ）塚又業平塚と
なづけしふたつの塚あり廻り三間ばかり此塚のうへを詠ト為欤土地の古
老にたづね侍りしかど能とも答えざりし但し余国に准じて考ふれバ野火
止とハ予が広野の草かるに火をつけて焼て地面を肥しその跡へ蕎麦大根
等の物種をおろし作る事なりと大方ハ焼畑といへり其の草原より田畑
火の風の便りにて人家へ及ばんまじきためにある所ハ塚又ハ堤など築き
て野火を留むるゆへ田舎にハ所あるべし伊むさし野ハ古来十郡にまたかり
て広き草原へ火をつけしかば風ありて焼広がりしも此塚の辺にて
焼留りしその所にて依て野火止といふ上を引用ひし伊勢のかたりの説も

佗りその事まバ捨てしがたし且野火止の辺に野寺といふハ名所のよし回国雑記
に今野寺といふ所なも侍りしも鐘の名所なりとぞ此鐘ハむかし国の乱によりて
て土の底に埋みたるとなん其の儘掘り出さざりしと言へバ

音にきく野寺をとへバ跡ふりてこたふる鐘もなき夕哉

此寺にて予尋ねしかど地名や変りけん定（サダカ）かならず又重ねて肩の地名堀兼
村の井引股町の掛樋など一人の為尋子に探させやと止ぬ

弐拾六

一 武州新座郡白子の駅ハ白子（シラコ）ともかき河越へ通行する街道にて江戸より
川越迄拾里余の中路然る此駅より膝折大和田の両駅にハ旅泊の家多く
当駅の外ハ練馬大井の両宿に続き弐三軒あるのミされバ此辺のこ宿の町の右左

ニハ清潔の水張り流れて潤澤なるハ是湛へし尚昔ハ谷より瓜生より沢并
に落る土地なるに彼逆流する側よりあれバ井戸ある者なく銘々に水車を作り昼
昼夜其の流るゝものを擣つ重宝とし盛し種々に此清流外より遠く来
るハあらじ當郡中程の西側亀井清吉といへる旅店の際より小路へ入て
半町余りばかりの所に不動堂あり此堂の傍に池より清潔の水湧出し白子
一郡の人民を扶くその池又大いなる事もあらねバ方三四間もあるべし常に其の
霊泉に依て瀧不動と称して辻の建石に刻みて志るしめす此境内にも相
生の杉の大木繁茂しあれバ高さ数十丈めぐりも壱丈四五尺又欅の大樹弐株
ありおのおの古木にして数百年におよぶと見ゆ囲ミも壱丈五六尺もあり総て境内古木

弐拾七

濛欝としてさびしくよしなし江戸より四里といへり

一 武州瀬田ヶ谷領北沢村淡島大明神といふハ中渋谷道元坂の上右地蔵より
右へ入こと二十余町屋敷村といふより八町といへる寺を森巌寺 密宗と号
し當時の住持ハ灸点に感應せしとて毎月三八の日ハ未明より日暮迄灸点
を施し淡島明神より夢想の告によりて名灸の治法を得しとかや大の
丈よりも三増倍大きなるを三灸づゝすゆる事なるに此灸治して後必
ずその跡より腫物のぬくいだひ膿潰して出べしかくのぬくる時ハ惣身の凝
血悪毒悉くかゝりし萬病壮健なり一切諸瘡の煩ひにもよしといひ廣め侍
がゆゑ諸人これを信じて三八の日ハ山をなして群集して施点に預らんが為に

繁しよする人ハ講中と号し一番より五十番まてハ札を除座りひて灸点を
あふるとなん依て振かつる者ハ夜を籠て三八の日ハ早朝よハ多るこいも
人先の施点にあふるハありかたし就夫翁子及ひまて番数三百有余ニ満ハ終
あるまじきや予は五ヶ年以前より取りて植子のんとのと思ひしに今年文化
十一甲戌三月めぐりし道節の庵を尋んと四ッ谷より青山千駄ヶ谷道原坂
邊を見めぐり小椋村を松打するに実も人家風多するぬく森厳寺の門
前には新に酒食をひさぐ家三四軒程ハ仏事廣く路傍に建つ神座
遠く来る人ハ此辺にとまるよしいかにも其家々草茂をあしく甚廣よ見て
多り人の出這入多く中に食事を為してもする人酒を酌人枕せる老夫稍

て欠たる少女又来る者の怪我をする家ごとには座せる人平臥する人たぶ温泉
の湯治場のかし又門外の出茶屋よりは稍隔たる侘を番数ならに待ける
もありり斯て門を入境内を見るに云哭と覚しき不心は大勢群集して
見くしは番数の着帳ありあるよん此寺はて新焼やしらりん僧房は
小側にありて仏事出来しく写もあまき容斜に見たる梅沢甚明神の祠あ
南の垣根通の土手際にある甲斐なき板囲ひの飛を写四方散らるの
内にまし無数灸点の噂さは廣く世にて社壇の狭く荒果たるには文目を論る
去り此神の霊告によりて彼寺の繁栄となるの其まゞ崇敬の仕組搆ねて
あらんに当に座のかくいぶせきあり古伝は只此のみ斗ふして人が此地田舎の

よ葛川に栄利の片鄙に斯新をなすべて家居し都鄙の男女集ひ来るハ
寺ハ多端一村の潤ひなるべし彼灸治して帰る人をみれバ男ハ左の足の
内膝の下なる三里といへる灸の跡あり女ハ右の内膝の下なる所へ灸治し別
に外の点法なく謝礼にハ浅黄明銀へ初穂拾弐銅の定めあれども貧卑
によりてハ多少もありとなん病症全く治する迄ハ三八の日ごとに来て灸治
することなし我宅より往来する丈夫を求る時ハ功験なしとて六歳未満ハ
必ず通ふ人もありと聞伝たるに予が知己の徒の内九人彼所へ通ひて灸治
せしが弐人ハいつも日比の病ひ治して全快し七人ハ悉くいたりて起居動
静もなりかね床に臥服薬して漸く本症に服しける人その時来

もとよりなる故依て謗る徒あり共に人ありいふの人が為にも又面白し凡道筋
坂より中渋村迄二十余町が間一向の俗地にして春ハ花なく夏ハ日影なしかつ秋
の頃ハいづれあるらん眺望なし路傍村園にて志退屈させるなれび相応せる土地
にあらん江戸より凡四里もあるべし

弐拾八

一 武州荏原郡渋谷金王正八幡宮ハ青山百人町の末より南横町に入て凡四町
ありし神社ハむかし鎌倉の将軍義家寛治六年の草創にして御正体とし
五月の輪に旗応神天皇の尊像なり又本地仏の阿弥陀如来ハ恵覚大
師の作とるらん当社の西後の山広く春ハ蕨を生じて摘草によし
一 渋谷金王丸といふハ義家の臣に渋谷の姓をたまはりて渋谷土佐守従五位下家

童といへり此家童子なきし事を歎ひて此八幡へ祈りに金剛夜叉明王ハ夢
中ニ現じて告らく我汝が子ニ産まんといひ給ひく永治元年八月十五日家童
が妻女一子を産めり此故ニ霊夢を思ひ合せて金剛夜叉明王の上下より
一字づゝを取合せて金王丸とハ号せしとかや

一金王桜ハ鐘楼のたち堂の前にあり俚俗古の名木ハ枯朽て跡生る株
より今の若樹生じ四方に指垣を結巡らし此花立春七十五日目比よりを
よそ比余の桜ニ比すれバ盛り少し遅き方なり此さくら此濫觴ハ文治
五年七月吉日頼朝公泰衡を退治ありて下向の御家童の家ニ宿しあひ
當社へ御太刀一振奉納あり彼金王丸がむかしを思叙しあひ回まじかる忠
抜群なれバその名を末世ニ傳えよやとて鎌倉亀が谷の地之のさくらを之
よを植させあひ頼朝公の命ニよりて金王桜とハ名付しと號

一鐘楼の銘ニハ宝永元申年と見へたり別當を東福寺と号し八幡宮の少
建つぎて家居あり又拝殿ハ社の南ニありて狩野松林惇信が画きし農業
を圖せる額ハ幅九尺ほどあつて渋谷道玄町の者奉納して宝永三丙戌八月
十五日と記せりその外延宝享保年号あの古絵馬并千見出例祭ハ八月十五日
己卯己未丙亥を以て隔年ニ興行に

一大永四甲申年正月十三日小田原氏綱と上杉朝興と高輪の原ニて相戦ふ
氏綱の後陣大道寺八郎多憐ハ小杉を回り渋谷へ攻入て在家を放火此

余今當社ハ今も是迄悉く焼失したれども神体の霊像ハ東の松の梢に
遷りて恙がなし夫よりして鎮座の神木とあがむよし縁起に見へたり凡
天和年号より此歳迄凡百九拾余ケ年におよべハ其の遙以前より廣く勧請せ
八幡宮にあらざれバ久しき神社なりしが怪還より社地まで数百本の松杉繁茂し
て社内廣く森蓊として いと神さびて古雅に見ゆ

弐拾九

一 武州荏原郡中目黒村の別所といふ所ハ芙蓉峰を模して能似せり新築じ
と稱じ此地一体外よりハ五丈ほど高き土地なるに其の一際高き崖の上に又
凡三四丈余の富士山を築立たれバ祐天寺の方より見れバ雲間に聳えて
いと高し此新築に登る路ハ西南の方にあり梅花別所の方より屈曲

して小蹊を登る事凡弐丁所余にして平坦の所にいたる方凡壱丁所ぞり少西の
隅に八富士浅間を勧請せり小社弐間四方此平坦の中央に新たに高さ五丈
に富士山を築立たりその形植虎を伏するがごとく頂の廣さ凡二間ぞり
是より望むに周のおよそ山々村々遠望せざるはなく東西南の三
方二三里の間悉く見へて且景言語にたえたり四季の眺望ハ筆紙につくさ
るハあたはず只眼もとくハ近邊に長流のいさぎよき浅みあるなき浅又山
の中程に古松一株ありて四方へ垂茂し其の形又一景あり此所平らにして富
側の無に葭炉を組立茶数瓶を貯へ腰を掛ひ飢渇をやすめ飽まで
山景を尽さがために是此中にあり近年富士講とて其の流行し其の

田舎の纔相催のみにて新婦を嫡したりき山を寺社の境内に築立る事は
東武の内に多しといへども其の発端は安永年中高田村なる稲荷の境内にある
場所町長呂郎が築きし新富士より起りて今所々に山を築る流行とはなされ
ども其の築山の形容なるや多くは皆黒式（クロボコ）といへる石を以て築きたる其の極
皆な是等の石を積上るが故に更に拙なし見るに長呂郎が作意に習ふのみと
見えて気の毒なりしが今此別所の新富士はそれらに異なりて一体に山を築し
らすに作りなしたりしき作意を存じたれば又彼是がくしたる石を用ひたれば
些か路にも佛神の石像を立て又浅間の宮のみを造立し山といへども
男女上下なるに足元危ふからずして古今の奇地といふなりしたは又奇なる

に及ぶ其の便りあしくその度し山をくだりて遥に顧れば見事なる此山の中腹
に清水湧出せば魚玉を捨ふの心地なるに此山の麓農家三四軒あるのみにし
てあたりの景ふし夫片鄙の景地は風色天然にして面白しといへども一瓶の水
を求むるも容易ならば便なかりし又無花の僻地は尋ねられるといへども作者多く古雅
を失ふなれど片鄙を厭はば景地を穿ちて拵へたるは予が一癖なれば暫く其
景て道を拵ふるの春秋三度に及べり雅称を志しさる人と笑ふべき人
さりとも又却て面白し是より南の方四五町にして新寺又は祐天寺に至
る凡東武ちかきあたりに眺望の第一と目返別所第二道灌が第三下高
田村なし元茶屋なんその外水道の景色にありてはかぞへがたし

一武州荏原郡拾弐双といふハ四ッ谷淀橋の南六所にあり此地至幽閑の地に
して古樹の松杉数十丈雲霧を常に擁して夏日熱しといへども此深林に
入れハ冬のことく寒きが如し又社の東に瀧泉ありて其水音あたりに響き玉
川の分水にて淀橋の水車にかゝり末ハ雑色村にいたりて猪のかしら此又と
落合目白台下にいたりて神田上水と江戸川へ分流し逆水の漲るハ目覚る
ばかりぞせられ本社ハ山の上に南面し杉松檜柏の茂りて古色ハ森々とし
人気稀にして更に閑寂の清地なり当社ハ熊野の権現を勧請して夫紀州熊
野ハ本宮新宮那智とて此三ヶ所にハ三所権現四所の明神五所の王子とて
都合拾弐の神々あるを拾弐所権現といへり今当社を拾弐双とよぶなれハ

右拾弐社の神々を一社の内に相殿に勧請しけれバ社の字を双の字に代て拾二双
といひならハせし事と覚ゆ境内広大にして桜桃杏李の花の咲る頃ハ辰
に雅客をとゞめけ又杜鵑花（サツキ）の咲そろひし砌ハ子規帰つまる雅興の風色
又一ヶ所あり西の方に古池あり南北凡壱町東西拾余間此池にむかしより蓴（ジユン）
菜（サイ）を生ず風味殊にすぐれたり此池辺の杜鵑花山吹のさかりに咲し頃ハ水面
に相映じ西南ハ小松の平山なれバ景色天然にして寂寞の感あり汀に庵
室あり新緒に池壽臨江亭と名づけし五字の横額ハ三井孫兵衛親和
天明のはじめ此地に雅客せし時筆を揮じたり好事の会する所なり麦
飯あるひハ蕎麦切を需めバ許諾して饗應せり亭五六年以前おかよ風と

当宮の末座へ來て両月渡山花彩の三語亦坂連の社中を集て此宮に
雅会しけ季の發句合せしを当社へ奉納せんと人々探題に小首かたふけ
居しを此句合を社頭の神前にいえを探題して開く韻を巻くと許可され
ばいひ捨て懐紙を襷しつゝきし

神垣や雪まて取みよりあさきしよめ　　鮮僊 以風

三十六

一 下総葛飾郡やはたの郷八幡宮ハ市川村より東の方凡六町やはた宿に例
中程にあり別当を法漸寺 天台 と号し社の此後は家居あり社領凡百石と
いやある街道より松並木を入事一町ほどにして仁王門より此門を過数十
歩にして本社の右に老木の銀杏樹あり乳房のぬきし樹の長寝垂たり
て凡五かゝえもあるべき欤但し樹の高さ凡丈ほどは過べからず宮社家其のさび
玉垣苔むして神慮を仰ぐべし、いよいよ尊く覚ゆ又本社の前南敷の後
乃隅に云ふ寛政五癸丑年正月十九日かの土中より堀出せし釣
鐘と云ふあり其の形容尋常にかはりたれど銅色自然にかゝる銘も鑄付
あるその文真の古鐘とみえる其の銘に曰

敬

奉治（冶）鑄銅鐘

大日本國東州下總第一鎮守葛飾八幡宮大菩薩

伏聞　寛平宇多天皇勅願社壇建久及来右大将軍

宗致殊勝天長地久家横巨海後連遠村奥虫性動
鬼鐘時声人獣眠覚金磬夜響永除煩悩能説
菩提

元亨元年辛酉十二月十七日　右衛門尉丸子直吉

別当法印知円

とあり右元亨元年より文化九申年まで凡五百九十二年におよぶ右の鐘
石橋山にて別当法衛寺より霜月を遊び佐殿宝あり里見家合戦の砌
陣鐘になされしものを奉り土中に埋ておきしを玖且当社の例祭ハ八月十五
日土地にハ大市をたちて江戸よりも諸商人集り宿内多く旅人の山をなし

て旅人のみうけん子見さる夜に宿に居るとぞ

三十試

一 同所やゝ去りての藪ハ八幡宮の門前南側の路傍にあり藪の口廣く拾間
ばかり奥行も又拾間ほどハ退屈と思ふ中四の竹藪にして細竹漆の樹杉松椎
栢栗の樹など生えて雑樹生じ南の方日表にまで路傍より能見えたり
なり元来此藪四方ハ垣根等の構えなくまた麦米粟稗などの作物の鳩
屑或ハ塵芥の類などを藪際より中の方迄見える甚汚穢にして怪異
あるべき凄涼き様子なくよつて称し古来より種々の奇怪の巷説ありて
水戸光圀公にハ試されんと推して此叢林に入り叢に土のぬくみにておかれしといふ
排子にハ其体きよのよと宜ひしのとゝて子細をバ更に御さらしなど巻

狂し或ハ強氣の者世上の風説をふしぎとして此藪ニ入久しくして立出ずして藪中
の怪異を語り體て即時に血を吐死をしといひ又ハ誤りて此藪林に入し者ハ又
に出口を失ひ路に迷ひて辟易かなく漸く人に引出されて後煩ひて死せしといひ
又ハ里見安房守ハ其身を堅め馬ニまたがり其所を乗入たりとかむしより侍
ちにも説く同じからざれバ此藪四角にして凡百坪余ニハ過ざれど殊に雜樹扶
踈として繁茂せざれバ藪中暗からずして外より一と眼見て土人ニ尋たる
怪異の説大門ハ实と是信じからし夜ニ小岩田ハ番所附屬の君右衛門宅
ハ此やうし宿のち年ちか余ニ行徳領ニ兵庫新田と云ふ村あり彼藪ハ其の新
田一村の持ニて諸人の不持の藪と作ふにあらざる故ニ此ハこと宿内の藪ニぞ

他村持の地面なれバ宿内の者ハ一切構ハず依て此藪通り掃除等も携らん又
ハ佐倉の城え通行の節ハ兵庫新田の百姓ともより片付候へバ坪数も少く
藪の中ニハ何のあやしみも元より用なき他村の藪なれバ宿内の者這入らざれバ
かし故ニやかましく記さばの藪とうなハ侍ると物語りき此説尤も実
事と思ハるゝ　五七年以前里見巴水の本人を同道し安房さかたい川より本國まで
同船にて御右衛門を便船させしめ彼より此所にて日頃の疑念をはらし程に従
て物事ハ忽ち入て能も乳くべき事なれば其人の下閑ニ然ると笑ひしかバ真之
实にも彼竹藪の中ほどに雨を覆ふて小さき石の小祠あり皆石にハ注連を
引そえへあり其怪異ありて是等も踏込みてハ何でかくのぬきのかざりあらんや

又里見房州等が戦死の概念此藪林にこもれバ一切の掬屑壓芥の甚を擣
る者も皆ゆゑを知らず然るハ深秘虚説といひ伝へきたりしと實ハ熊笹の本
源をつきとめざりしてなす人もハ伝へがたし君子の博く学んで中なり中る
とハ金言なるべし件の忠右衛門ハ条丸のつくりて誹謗を今にきく名を巳川と
いひて後人経歴し彼藪林をえてなるべし

三十二
一 下總葛飾郡中山法花経寺 日蓮宗 ハ八幡宿の東小例五六町にあり路傍の建
石に正中山妙法華経寺と刻せり是日蓮宗一致派の五ケ此本寺の其ひと
つなり惣門まで小一町行事凡四町ばかり右側数を知りて寺居
するハ百姓にて宗旨の行者し者をハ止宿を許さざるなん知りて惣門にハいへる

五寸五行の額かけて下より見あぐる所長さ凡八尺ばかり幅四尺余もあらん欧字
者の名印なし何人の筆なるや欲写たのだし

如来滅後
閻浮提内
本化菩薩
初轉法輪
法華道場

かくのごとく二十字を五行に
志るしたる文字ハ彫りて
胡粉を入れたり額の古びや
風気に侵されざる事は自然
に出たり古雅にて見ゆ

右惣門の際の右に一山禁制の高札を建てあり是より自然に凡先あぐりに

凡弐町ばかりにして仁王門に至る此両側の左右ハあやしの商人軒をつらね
家居に有仁王門ハ南面にして七間ばかり銅瓦をもて葺たり此二重の悉
く光明丹もて赤く塗たり去年中再建出来せしとていと新らし此
二重門の上に竪三字の額をかゝげて正中山と書し筆者の名及び印なし
此門を過てより両側ハ地家ならびに門を構へ七八ヶ寺家居にされバ仁王
門より内ハ次第に凡先さがりに低く三町ばかりにして石橋あり右の方に
ハ常題目堂ありて太鼓小合せて題目を祝ふ是より折渡り西へ向ひ
三町計にして祖師堂あり境内広くして鋪片鄙の田舎寺の庭へ及ず
四垣根も構へも垣もなく掃除の行届かずて甚汚穢し又左りの杉
林の内ハ惣墓と見ゆ是れが祖師堂の前左側に手水屋形あり夫に紅梅の
一株ありて花盛りに咲揃ひし風情ハ又なく見事き枝もあれば右祖師堂を鄙
一しらく過右の方に一構の僧房ハ法華経寺の本坊と見えて隠棲堂との
前にあるされど池上本門寺の僧房に比すれバ棟低の余程狭と覚ゆ
右祖師堂ハ十間四面土足にて内陣外へ参詣にての様形あり弘法池上
祖師堂に異なりに此堂甚古物にして凡百有余年火災の難なしとも
此堂中の正面に横三字の額を本阿弥光悦の筆にて下より見あげる不長
さ五尺ばかり横ハ六七寸にて見る木地の額にして文字のミ彫て紺青を入し
是凡光悦の筆ハ当寺と本門寺ばかり残りて本阿弥三字の書人と云事存す

あるゆへ山額字をえん為ぞうるまじが寫しまして筆法を書くに

祖師堂

鷹峯
太虚菴光悦書判

一祖師堂の右の庇下に佛供所ありて道心者人居まり邑里夕日陳及び堂内
を掃除し祖師へ供物を上ることを司まりまた此堂の後小高き所に小社三ッあり
右神宮と八幡宮と鬼子母神之皆おのおの三間四面銅瓦より境内廣く七堂

成就せりと雖も此所へとしるを隠まて不掃除にむさくるしく池上本門寺には
十数倍劣まりといへども此所飯盤僧坊境内の隈まで綺麗なるは禅家
の外にあるべからざる快晴にて風ふく長閑なるまじ参詣の人多く稀に
良者ぞうく祖師堂に憩ひ揖大おかれおりたぞし数服吸ど人々とて八廣き境
内に道心と為暁と四まで此三人ならでは矢立なおし祖師堂の九柱に書
書し置なり

宝戸かさ向此所妙しいとれ経　鮮僧　以風

法花経も寺よ何ぞ是とりの輝　為暁

一下總葛飾郡本郷村宝成寺　貴洞ハ法花経寺の東ニ町よあり街道の路傍

三十四

一 の北御子葛飾大明神へ向より三町引ごし建石ありて此所より北へ入る
事二町余りして宝成寺といへる此寺尾州の長臣成瀬隼人正の菩提所なり
寺に名高き椿あり樹の高さ壱丈余根もと三茎にわかれて上へ生並に切倣
ち成木し三株合して古さ九尺余廻り四方へ繁茂せしか枝差かさなり其形丸
く恰も笠鉾のめし双方へ丸くコンモリと枝条をひさけるを以て樹の丈高からねども
見事なれど隼人正の持槍を隠居に穂先の鞘さしたるに持たせん客を以て樹の
低からざるを察すべし本堂の前なり此椿の木は至て余木なし花は侘助と
いへる花形に似て小さく葉の中にちらちらと白き斑ありて其形は八重なり色は燃
るゆゑ古今の名木なりともかゝる大木の名をいはざりし彼誹諧の名
高かる事なし先人は此椿を五百椿と号すまらぬよし但僧の物語りき此寺小
院の貧地なれども此椿あるが故に名高く雅客文人来りて事り僧房を賞を
りし事ても弘化いつかは然るに惜いかな四五年以前の大雪に枝折木は立て枯
れたれども今ある株本堂の前に件の椿の枝々を代諸接ぎて植かへし
小枝々より葉生じ花びらも咲て今も在代をおもひの古木に似たりといへ
ども花は今も年々咲り好事の雅人行て見るべし

三十五

一 下総国葛飾郡市川の渡しを越てより東の方舟橋の駅まで三里余の間通り筋
の村々農家の庭背戸又は畑山間等一面に桐を植へ梨の樹を植て皆く
おも事獅し先土地にあつめる此辺の梨は浅草と称して風味又格別也

既にやゝくの驛橋際川島村十年が定に旅泊をし庭の外の空地百八五十坪
の内ニ而梨の樹の棚あり是祖の業父に梨作りていの社の要脚を得るゆと
聞ク年ゝ百二三拾金内外ハ是揚るありとそのかうりぬき郊の家をふ新
のめし三里ニ余る道程の人家なや又舟橋の驛三町目傳馬屋助右衛門宅に
止宿しき二階より脊戸の明地を見おろせば空地悉く梨林ならざるはなし
し武州六合の渡より川崎宿西の方ハ鶴見生麦子安の邊まで村々通り
人家の農家に梨の樹を植て作りおれといへどもその土地にて往来の旅客へ売
さくおゝみしき下総の葛飾郡にくらべれバ九牛が一毛なりん甲州の外江戸の
手通まてハ下総を第一とし梨に又数品あるが中にも上梨と唱ふとも上

品にして当地の名産なるべし

一武州豊島郡王子村金輪寺（天台）ハ飛鳥山の西の所にあり寺領百石とや
公折し成らせ給ひ時膳所と程ばし崖下の飛泉ふぶくさゝのめく可為あり
當所の権現ハ紀州熊野山五所の王子の内若一王子を勧請ありより
て王子村と称さる号底に起る古き宮居にて地中古より此社の西上
野に稲荷をうつして王子の稲荷とて名高く人あし跪などといへども全稿
寺の持なるにたゞ其野狐の人に託してあらざるハ此金輪寺へ来り大
音を揚ていひ入れる規定あり則ち司役の者立出その子細を具に叱さ廿
狐ハとゞの礼を厳きに施を請ふ者ありの湯漬め一椀残さず喰らし

て立給ふ事定式よりなりたる異例と云伝へし此社内の桜花古木多く
花ざかりハ立春七十七八日目ひよりを定めとす別て六七株の桜ハ八重の色一
際うるハしく白ひ色濃き遠ミえし余木よりハ少し遅き方と覚ゆ此より西南
の方瀧の川村彼天王五町といへり

一例祭ハ七月十三日午の下刻よりはじまりて未の下刻まで其の式終ふ先其の宵初午
の中刻より金輪寺に於て太鼓を鳴らせるに三ちとして既に祭礼の式に及ばん
とする時烏帽子狩衣に指貫着たる社人三輩かぐら殿に出る者壱人其太鼓
を一人ハ留主一人ハ代りて此者ども着座して後金輪寺の太鼓打止を相図
として別当ハ法服に七条の袈裟を着ししづかしづかと出る所朱傘を指しかけ
させ金冠を戴びたるハ頭上に造り花をいたゞきし児壱人左右に随え
白張着たる者を具し金輪寺の玄関より優々と往還へ練出し若一王子の
仁王門を入て続いて別当及び児壱人本社の内陣へ練込たるを見届て内
傘（カツギ）を指し白張着たる僕壱人あハたゞしく引返し金輪寺の門内へ駈（カケ）入又走り
出て若一王子本社の傍へに目礼し又更に引返したるの名代にて息をも継だ
走りつゞける斯する事七度半にして別当所より小具足に面あてしたる長刀の
者なきまはりの竹を突小手脇高にいかめしく先に立て壱人出るとき神楽殿へ上
り様例に東面し立ならぶ時社人太鼓をうちはじむ但し撥は本とて打附
角一番をと次出せりその太鼓の拍子すやきも非ぐ遅きもあらず笛の調

子とも舞ふあれば何といふ楽譜もなく只囃子の上下（アゲサゲ）の調子ふ
く始終かくのみ也斯て後に具足面ありける者東より小西の楼側をあち
らこち歩む件の別作を以て神楽殿の欄干を打てつゝ叩き廻る元の所に来
面しまへる時金襴等よりて法師武者両人優々と出きたる此二人左右の腰に大
太刀二本づゝを帯し鞘がしらを組合せ白き結びてくるくる隠兜面ありてなかに
臑当大長刀を杖に突て先にまはるへきは腹に節をさし法師体の者一人出
腹に青藤（アヲフスベ）もこを附し出で来て神楽殿へ上る但し具足着たる大太刀
八本を腰に帯ふれば身おもく元清ハしふ自由よりて面梅先へ渡さし異形の武者
先本社へ向ひ目礼し本小の隅に立まじり大長刀の石突をもて板敷を突く

ぐりに廻る時法体の法師武者も同じくかゞり殿に上り本社を拝礼し西
小の隅に立まる時烏帽子を冠りきし青き白の三兎の紙をつけ帽も横に廻の
花毛の如くふ挿えしものをかぶりたる童子両人柴純子柄の浄衣を着し引
つゞける度くの色しる純子の道服を着し緋衣（ジサラ）を襟にかけたる者傍に六人
出きたる此内小さき太鼓を携し者両人ありて次第にふ神楽殿へ上る右の六人の上
小笥に紙を張し笠をかぶり笠の上にハ紙の造り花を附し笠の四方へ紙の長さ
五六寸なるを細く裁て垂る如く張さげあり此紙に英ふるあり書きあり書きも
ありて総て六人の顔面を見るべからず但し吉羅の笠を四角にして縮切を裁
に者細く裁て携ふるものこ右六人でたちにて神楽殿に入ると舞ひしとくぐるく

と二三返で済りおがり踊りて四方へ立ならぶ此内始終笛太鼓の拍子ちがはず
のめし既に八人ともにかぐら殿に入終りしバ麻上下着し警固しける者数十人役
随ひて四方の檐側に候ふ斯して踊の式をしまるといへども更に一曲でのつゞきを
きくだ元より笛太鼓の調子は発端より序破急の差別なくその踊りの拍面
白きといふはあらず只古雅なるといふ結句古雅なるものに面白きといふはあらず神
代のかぐらふといへるものはいかにもありなん此田楽おどりは始終延びずあって
舞ふもあらず踊るにもあらず飛ともはいりん舞ともはいりん舞ふを隠し足ふ拍子ふ
くはぐるりくと続りて折し二三度で飛起を思へば完了業に至る但合拍
に事変りて家なるが却て古風の雅事と賞すべし此踊の間凡半時余

則ち神楽殿に踊の番組を書張出し置ぬ左のめし

第一王子宮典楽踊

一番 中門口
二番 道行 腰作
三番 行違 同断
四番 背摺 同断
五番 中居 同断
六番 三拍子 同断
七番 黙礼 同断

八番　振三段

九番　中立　　腰祭

十番　楊祭　　同断

十一番　祭流

十二番　子麑帰

以上

七月

右張出しの番組残らず例年勤めて神をいさむるなり又ハ一曲つゝを踊るなり
笛太鞁の拍子ハ序破急の差別あらざれバ知がたし斯て踊り終ふるその時

神楽殿の廻りに待居し者ども我先にと争ひて童子のかふりし烏帽子ハ
勿論六人の花笠にいたるまで一つも残らず狼藉に奪ひとり己が家へ持帰る
ハ其年の魔事災難除になるよしとて例年かくのごとく躍ばかりし物を奪ひと
らんとを相図に八人の者おのおの別当所へ迯込みて定式より此日かぎり殿の廻りに
行列するを結ぶ事ハ遠き所の人々大方ハ武士の従者にて行列を揃えし鎗を
杰にふく一本づゝ持出て此行列にさしはさみ余人の手細くし鎗をかゝげ家に持
帰りなバ盗賊除の守りによしとて数千万億の衣の諸方にありて賑ハし勿論
附合ひたる故侍百姓男女のこと多く町人体の者ハ申すに及ばず社の内外いたるの商人店
ならび集ひ群集人の山をなせりされども皆人覗柵を構えて設けあり或ハ丸

三十七

引の借債に隣を貴きの附甚なきにば此例祭を見ざる人又少なかりし

一 日本西の坂をくだりて稲荷へ三町あり実ハ初の稲荷司さとかや初午殊に旅かく賑ひし例月の午廿日正五九月を式として歩ミをはこぶ人多し中古より別て賑ひ焉し石の玉垣両石坂宮居花表にいたるまで壮麗に造り再建して飛鳥山のたいらなとより思ひし年始の石燈籠の常夜燈又點し此社頭にいたる路傍の春ハ両側の桜花爛漫にして立春七十六七日月頃よりを向と盛ハ杜若の水画に咲きを競ひ山吹連翹の色をあらそふ風情夏ハ東山の耕地を一面に眺望し夏ハ行る秋を引き歩み虫薬気を雪見の頃まで人足多かる時なく本ホむ人あまて一對といへん欤此處より小の畦路を過ぎて装束榎の

三十八

隣なる蟹和村へ凡格四五町ありて漁猟をせざる人ハ從處によりて漁者を雇ひ猟船を雇うけてたのしむ所なり荒川の長流の魚ハ格別にて蟹和の鯉と覚し風味格群なりとかん夜く月夜に船を泛べあり晴き夜をよしとするあり並ハ此よりとも共にしる人もありき

一 飛鳥山ハ王子の東三町にあり此地ハ中古　有徳院君大国挑め忠相に命しあひ此處の産を代調かめ享保年間数株のさくら名花をとを植さしめあひぬ色全く公庄一人か植ゑしかも有ん為にハあらだ此地悉く悪の片郁なりてそこに農家少なく又ハ遊し匠にあるといへども貧村のこれしをかしけるる土地ありしを二萬戸数株の花王を植えしめあそひてより春

秋の月遠近の飄客又ハ近くの雅人乃杖曳示とあり花咲を見るあし
たまりのミちなり川ら乃中屋まて旅部の男女老子尋ひ来り宴を催しあそ
ひまりて自然と追くニ家居建つらなり茶店若干出来て一村及び在
の潤ひとハなれり是文王の霊臺霊沼の益も事の盛らざん年
別して料理をさせて酒樓ハ五ヶ所庖丁と並物の好物をわけて其中も
あやぎや海老屋の二軒茶屋ハ軒をならべて高宅を構へて作り料理の美
味ニ庖丁の手際ある並物ニハ善尽し美尽し客の需めニ応ずるハ近
都ニハ貴きべき欲殊ニ近所農ハ何挨とならく茶店の奇ニ居流して草臥の
人を扶させて歩行ざらしむ抑又四五年さいの如し出替りとて夜の末黄昏より

好事の雅客ニ来り茶店の男女ニ申語りし耕地の試くを逍遥杖を佐
あり或ハ各今親母子の手引ニ来り集会して宴用をなすもありけり予が幼
少の砌より江戸の名所なる深川の二軒茶屋又本所むらの盛んなるど衰微
して今只時めくハ此の地ハかりなり片都ならず王子稲荷
の門前より飛鳥山の麓に続く並の町凡四町余酒樓茶店おのおの軒を同
ふし繁栄の土地も劣らぬ樹ハ是なり　有徳廟の御仁恵といふべし
一 此山の花王ハ立春より七十日目頃を盛りとしおのおの古木なりて王子より
かしこき方も又山上ニハ飛鳥大人のたせる碑あり青石地上へ出る処の高さ
凡七尺幅凡三尺厚さ八寸余元文四年己未秋九月と刻せり文ハ長きゆへ

ありて昭代の盛なりしへて我細工のかくれもなき名産とは

一 武州豊島郡豊島村地蔵堂と稱庵ハ同村西福寺の北指四五町にあり
此地ハ隅田の川ぞひにて風景もよく抑六阿弥陀もうで西福寺を立出て
まづ北の方より豊島の舟渡しを渡り凡半路余の間荒川の長流にそひて
右の諸の景色を見ながら行ほどに左ハ渺茫たる耕地を見わたし心眼なる
折ふしも実に賞すべきの景地なりかゝる土地に富居して花鳥風月に乃
ミなぐさミふが無病壮健にして天元の数を増ぬべしと賞しぬ扨此と稱庵
といふハむかし人皇四十三代聖武天皇の御宇かとよ當國の住人一郡の人々
爰に豊島左衛門尉清光ハ深き志願の事ありて此を豊島の郡七ヶ所の勝地に堂
を建七佛を安置し度なひに行基菩薩に乞ひ行基則ち清光の需めに應
じさせ給ひて七佛を彫刻しあたへらるその七佛七堂ハ左のごとし

一 弥陀堂ハ今当村西福寺といひ六あミだ一番目なり
一 釋迦堂ハ今同村清光寺境内に安置する釋迦佛是也
一 薬師堂ハ今ハ此堂退轉してその地を以て醫王塚と稱す
一 観音堂ハ今同村観音寺といふ是なり
一 勢至堂ハ今ハ堂退轉してその地を以て勢至谷と称す
一 不動堂ハ今同村清光寺といふ則ち今も清光が墳墓あり
一 地蔵堂ハ今豊島村川ぞひ地蔵寺と号稱院といふ是なり

然るに是非遂に及ばずして後宝永二乙酉年祐天大僧正ハ石川傳通院に
至住の砌等称庵を再建しけり其の子細ハ当村に印旛四郎右衛門と云者
ありて夫婦共祐天牛島隠遁の比より帰依せしに 台命によりて祐天傳
通院へ住職せられしが夫婦の者いよいよ宗意を運びありける中にも集隣地等
称庵に於てハ地蔵堂あり此地蔵尊ハ由来なきが詳ならざれハ何年光
明ありて村中の男女何れも引立ちて是かしこまりて像々祐天四郎右衛門の
茅屋をとりひ地蔵堂に於て群参の老若へ十念授与して当庵を一
ケ寺ともなし且つハ永く念仏弘通の一助ならんとありしが夫より一村及び
近隣の村々まで一統して日あらずして一宇造立成就せり祐天随喜し入佛供
養有べしとて宝永四年正月廿七日数多の寺院を具し入佛の法要あり
則ち亀島山地蔵寺と称号を傳通院の末寺に加え永く念佛の
道場となりしハ是ひとへに祐天の道徳といはん歟

一 当寺に安置する訶羅多山地蔵尊ハ祐天の本地身と称し宝永四年新に
彫刻せしを祐天開眼の尊像のよしいひ傳ふ

一 又地蔵尊の木像一体ハ開基常島右衛門清光の需めによりて行基菩薩の
作なり則ち上古より古佛の中に有る地蔵堂の本尊是也常にハ猥りに開扉
を許さゞりとぞ但し行基と清光ハ年代大いに違ひあれバ后によるのこと

一 祐天の肖像ハ丈六尺余宝永二年六拾九才当庵に於て十念授与の姿

をも擬し祐天に似せて開帳し自筆の名号を添へて光を御援の名号と称
して祐天の肖像を板行にし上に件の名号と名書判及び賛詣祐天大僧
正六十九筆の肖像と記し参詣の人の需めに応ず

一祐天百八数の珠数を講中の寺庵に授て永く百万遍修行あるべしとて賜ふ
首に名号を下せり光明寺百万遍修行のいはれなり

一本堂の阿弥陀は宝永三年江戸麴町辺の講徒寄附せしより祐天の開眼なり

一閻魔王の像は地蔵堂の西僧房に隣る文化七八年江戸小川町の某と云ふ
板宮田也何某寄附して祐天開眼の本像のよしいひ伝ふ光明寺は亀谷山
地蔵寺と称し院と号せしといへども境内狭く纔に門及び三方垣根なるのみ

耕地の中に唯此寺のみにて辻の庵室のごとしたゞ地形を高くし石垣を築
て荒川の長流を眼下に眺望をもとめば景ある地にして六阿弥陀へ参詣するの
徒は此傍なれば尚庵に憩ふもの又少なからず

四十

一武州荏原郡和田村大宮の八幡宮は堀内妙法寺の西南弐拾余町にあり
惣門より中門までの間左右の並樹は凡千余数丈の古松は雲に聳えて宮
林垣をめぐらし別当は北側の中程に門構へして神宮寺といへり社まへ
東面して裏門は南の方松山を遁へて千余町ばかりにあり社内も広く松杉
鬱茂し沢は卯月の末つかた松むしとかやいへる虫梢に鳴つゞき或は雷鳴
又は梵唄の声松風に吹たぐり唯寂く寂しとしるべし和光同塵の神慮の

程近く覚円高社に中古叛逆の棟梁と聞えし由井正雪が肖像の絵
なるありて幅は一尺四寸丈は三尺四寸ばかり白鷹を画き賛に慶安三と
書て二の字を引消て四と認め直したるを慶安四年にて正雪忠弥が
徒一味徒党して謀反を思ひ立し年なりき書画ともに正雪の筆なり
されど名を隠して記さゞるも深く思ふにこの者なるかとなん慶安四年より文化
十癸酉年にいたりて百六十余年におよべば自然と板の虫目ある星根なく
なりて古雅にみえ伸し此絵するを正雪が筆などと又極し事は享保年間の
事なりとよ　有徳なる君島社へ御成ありせたまひし時此絵を上覧ありて
是ぞ正雪が自筆なりとの台命にて其后一同に明君の鑑定を敬感しまつる

まことなんその比までは誰人の肖像とも知る者なかりしに此
時より正雪が掛なりと謂るなど人云ふ説て夫より此尊に秘蔵せられて百六十
余年の今も残りて寺宝と賞せり

四十一

一 牛込筑土明神後通りだいこ坂の上情昌院（天台）に中古元禄年間播州赤穂の
城主浅野内匠頭家来大石内蔵之助良雄をはじめ真忠の義臣四十余人の
為に亡命せし高家吉良上野介従四位少将義央（ヨシヒサ）の墓あり又其の御家人
を手近くさせじと防禦して義央の為に討死せし家来の墳墓六ツ七ツも
義央の墓の傍らにありしを同院の情昌院の住職は無得心にやあり
なん無縁なりとて取捨て今は跡方なし　たとひ寺へ対しては無縁なりとも上

野介へ對しては命を捨し真実の者なるを墓を許され石碑を立おかれしも其
懇志を感しゝ実にも世上の者共しも其孫の墳墓にも石垣をし又石塔あれは踏跡の
場へ没して小橋などをなるも文言とかいへん殿の戒名を彫り又は地藏等の形
ある者の土足に踏しものは哀此にかうりなし されは吉良上野の居屋敷と物
代り年をもちて本所回向院後通りに今残りて上屋敷と称されり義央の墓

元禄十五壬午年
十二月十有五日
霊性寺殿實山相公大居士
従四位上左近衛少将吉良
前上野介源義央朝臣

たのめしや下谷
通り四千五百石
を領せし吉良三郎
左兵衛とかやいへりけい

四十二

義央の嫡孫のよしまて忠より惜昌院へ仕侍ありとあん

一 牛込赤城明神東門前通天徳院 曹洞 は法華坊に隣りて五軒町にあり當
寺に梶川与三兵衛が墳墓あり此人元禄年間浅野内匠頭長矩か吉良
上野介義央に饗應使の御用に意恨ありける怒り度の胸中に鬱し
當中にてはからずも切かゝりしをとゞめ抱き留大膏に殿中にて御財の所通し
しかりつゝ長矩を抱き留しとかや忠によりて後日加恩ありて連綿と
相續して今梶川左兵衛の家にして元禄年間より二十余年の後病に
家に死し五軒町天徳院に葬まり彼忠臣義士と世に持囃されあやつり本
に梶川を加古川と書き其の臣は播州赤穂の城主なりし赤穂は塩の上京なり

まゝバ苗氏を塩谷とあらため吉良上野ハ高家なれバ官の師直と作り替役
賀川本蔵が大石父子に向ひ述懐して悴に極める言葉に叶る家来のあるな
がら讒けるこそ此塩谷家にハ掛捜内匠頭をいふなるべし戯作者といへども
竹田小出雲三好松洛並木千柳二等が作意実に賞すべし忠臣の義士をくり
上ゲ四拾七人なりしまゝ仮名手本と探題せしもおもしろき面白し此時代の戯作
者ハ悉く国史を見て一切の書によらしけれバ仮初の戯作といへども見るに感あり
賞あり今の作者ハ只小説のミを閲し古哲の糟粕だも嘗て戯作するが
なく一ツも拙なし是学ばざるが故なり彼る千門左衛門をはじめ小出雲松洛等二ら
が戯作ハ実に面白きもの忠臣蔵の狂言乃流行さるも此ゆゑなりと宜なり

件の梶川氏の墳墓左のごとし

享保八癸卯年
八月二十六日
謙亨院殿閑雲古水居士
俗名梶川與惣兵衛平姓
頼熒卒年七十有七

四十三
一あさくさ浅草の矢大臣門通文箱地蔵の向に檜前(ヒノクマ)馬坊といへるあり
三社権現の社僧にて先祖ハ彼檜前浜成武成なりといひし兄弟の漁者なり
今ハ三家と別れ累代おのおの血脈をつぎ三家ともに三社権現の社僧として
内陣表事之羽織の一刀を帯し仰持ちる者ハ檜前馬坊と称し紫衣衣

を着せ於ハ苗氏を除きて只秋葉坊とのミ呼て真俗二体を兼ぬるもの
の家ハ濱成武成より引つゞき今ニいたりて六十余代血脈相續して連綿たる
事也よりて伝来の重宝ありやと問ニ只古来より多人の出資と日記覚書抔
の物ハ伝りしと其ハ備々年ゞ立合出拂ひし古家文書年番ニ預る
よふん当時の秋葉坊ハ数寄の道を好ミしと見え堀川の人物にて古三段
家方茶事ニ賑合し当今口吻なるを聴て且又濱成武成の両漁者を
三社権現と崇めしも尤ハむりし孝徳帝の御宇大化元年河内勝海といへる
小さき草堂を草創し個中感得の観世音を安置しけるが後文朱雀帝
の御宇天慶五年安房守公雅ニ此観世音のありかを知れるニ依て深く崇
千の地面を寄附し七堂伽藍悉く建立せし莫大の施主なりしバとて此公雅
を濱成武成の兄弟ニくはえ入て三社権現とハ祭りしものと且又個中感
得乃向右の観世音文ハ御の個ハ千有余年の今日迄と成て僅ニ残り哉
火災の度ゞ霊仏の飛去て遷座しあひし槐の樹ハ今ニ存して拝観世音
の脇侍等ハ矢大臣門通り西側蔡堂（アカザ）一の権現の別当方ニ伝来して今ニ在る
し能人ゞの志る處之

四十四

一湯島天沢山麟祥院（妙心寺派）ハ本郷春木町の路傍北側ニあり表門ニハ
海東法窟と云額あり此寺佛殿料として駒込と柏木の両所ニ於て五百
石とあひ領地の内ニ当ての殺生の儀を禁し百姓等ハ諸役を免許

しかるされバ此寺境内も荒廃に覆ひまで掃除の約(ママ)ふ届きしかバ
月見影寺宗泉院に能似たり又外構の植殻の生垣の年来荒込しかれ
又一ツ不思議なりしハ当寺ハ春日の局の木像を別殿に安置して春秋の彼岸又
ハ盆正月廿六日ハ参詣の人多くありけり即ち鱗祥院殿従一位禅尼と号して
此老女の素性ハ明智日向守光秀が家来斎藤内蔵助利三が娘にしてお
婦くといひ稲葉三左衛門へ嫁し一男子を出産し此時の乳を以て大猷廟の
御幼名竹千代君と申上たりしが此幼君へ乳を奉りて御乳母と成りしが
元来叛逆人を殺しの家来の娘なれども女なれば候ふて撫ひ参らせ君の御
為に付ひ忠道をも深し既に老女が産挙せる男子ハ忠勇にして大

猷公君とハ乳兄弟なるを以て立出さる故稲葉丹後守（拾万四千石 山城国淀）の家号
なり此女も聡明叡智にして又かゝる道しさ勇士に劣らぬ覚又能に招
きり孫子 神祖深く御崇敬ありしバ弐年湯治の願ひを申立駿府へ
参殿し其の真忠を申上ける功又粗からずとて後化粧料として三千
石を下し置き死後当所に一宇を造立なさしめ彼老女が院号を以て天
沢山鱗祥院と号し五千の寺領を下しおひ継て春日の局の像を安
置し崇め丹波又本所牛島弘福寺にも此女の木像ありそれハ稲葉ふ
丹後守が菩提所なるにより

一 当寺に秋葉三尺が朝鮮国より持渡りし閻魔王の石像ありその

ありし五本といふハ春日の局の兄なりし斎藤内蔵亮といふ人と共に明智
に仕へて斎藤伊豆守と号しき日向守滅亡の後ハ名を隠し姿をかえ
て斎藤立本と名乗加藤肥後守清正に属し朝鮮国へ渡り当て戦功
あり凱陣の節彼地にて閻魔王の石像を得日本へ帰国し家に安置した
りけるに清正病死して後浪人たる者となり孫子傳通院へ石像も小石川天満
宮の社内に於て鉄火を握る者の誓ひありしが春日の局の免なしに依て
御祈念を請しなひ改めて傳通院へ石出して今は小日向中の橋斎藤
健治郎 七千石 の家にありけるに朝鮮国より来りし閻魔の石像ハ家
なれば或ハ怪異又ハ不吉の事なきも多きにより鱗松院へ収めしとも一説
に朝鮮国王の肖像なりとも又後勘を待のミ

四十五

一 小石川御簾町小横町松平播磨守屋敷に隣りたる井上新兵衛 幸右 屋敷
ハ数十百年功経し大蛇住て例年夏の初より秋の末迄て夜毎に家
中の小路を徘徊し又ハ家根より家根へ這渡り出る事ありと巷説ま
ゝ其の大蛇の出て這渡る有ハ眼を以見るの引摺りしく板家根ハ
ゝし尾落る事何あり其の丈凡五六尺胴の太さハ其の人の股を見
よすりて於めし相違し其ハ塗桶なども有て胴ハ鶏卵程よりも太きし
ともいひ又ハ胴ハ升の約瓶程もありと見し者もありて怨念の恐怖して
見るが故に首尾ともに種々全形を納めに能見定めたる者なし然も

よし此蟒蛇片眼なりといひし傳へ説ハ當家より數代のおや射殺し退
治せんとや思ひけん強弓に矢つがひ飽まで引て放ちしが鋭ひきゝして蟒
蛇の眼を射しより以來片目なりと扨此やしきは廣く北東ハ白山の茶園下
通田畑へつゞきて山をかこへり奥門の地形次第に低く草深き住居なれ
ばかゝる怪物も年久しく住居りしものならん當主にいたり數代此事なきに
住居をすれども怪物ハ其の遁れ得ざるより此地に蟠るとみえたり勿論人に
對して害ハなさゞりしかども毒氣を吐に觸ればかならず長病を煩ふとなん
夜ハ折〳〵出て微細にすれども晝ハ更に出る事なしこゝ迄なりて日毎に來數
升をあらへて養ひたれハ又出ざる夜もあり其の彼怪物出る時ハ家中一

同に太鞁を鳴さバ早く己が栖家へ引込と扨夜中何時に限らず太鞁を鳴す事ハ
またハ五六ケ及び門前町家の者まで彼蟒蛇のおかしと言て是を知て折節ハ風
につまされ鳴をとく太鼓のトウ〳〵と鳴る夜伝ありと是怪物のおとづれ家々に
鳴る太鼓に小さしといへども家中一同に合擣するが故に音聲喧しく近隣に響
出又彼怪物家中の小路及根などを這ある時ハ自然と毒熱黯しく蒸(ムス)がごとく
音又ありと伝ふと是等奇怪の説なかりし毎に全通の花浪といひ又井上家へお
這入ある人の物がたる條を志るし置の但し當家にかぎらず總て住居の廣
き舊家にハ怪物の如し同様に栖家とするものハ彼是聞えるめづらしからず

四十六

一 武州入間郡川越ハ大井の驛より壹里半卒旦の地なりむかしより此邊を外より

片里と稱して續後拾遺集ハ新續古今等ニ和歌見えたり故ニ城内ニみよしの
の天神の社ありて例年二月廿五日ハ詣人を城内へ許し入て拜礼なさしむ 此ノ
故郷名語しと號ハえり柳嶌城の濫觴とぞ見へたれとも或記ニ曰永禄年中迄ハ
上杉家領の持分後天正十八年まで北條家の持分たり同年小田原落城の
後酒井河内守重忠こまでを守る分限壹万石慶長十四年酒井備後守忠利
こまでを領し分限三万七千石 轉駿州府中稲嶌城内壹万七千石後ニ加増
拾万石息讃岐守忠勝但し父忠利存生の時息分の領とも寛永年中若
州小濱ニ得替寛永十一年堀田加賀守正盛賜り分限三万石同十六年信州
松本ニ得替寛永十六年松平伊豆守信綱賜り分限七万五千石轉武州

忍稲嶌城内壹万五千石正保四年加増同守息甲斐守輝綱寛文十二年輝綱
の息刑部少輔信輝 後号伊豆守 嶌の内五千石舎弟万千代ニ配分元禄野州同
年柳澤出羽守賜り分限とぞ 又或書ニ曰河越の軍後柏原院永正元年
十月堀之扇谷上杉朝興与山内上杉顕定数月戦而後和睦し而後北條
と原合戦ニて 鎌倉九代記ニ曰天文六年七月十五日北條氏綱 氏康親父ハ武州深
大寺の堂ニ楯籠りし上杉勢を追落し大将上杉朝成を生捕 朝成ハ朝定の伯父て武
勇をも儕ニ輝しまで川越の城を攻る城主ハ上杉修理朝定也此河越
の城ハ太田持資入道道灌が父道真とともの砌ニ築しむり有原業平
此里ニ来て多のむのかりをいいりまさまんと讀し入間郡三芳野の里とハ

然れとも道真此地に久しく住して要害に流石に堅固なり城兵心を一にして
防戦を励けれバ敵をも苦しめさる虚きなるを先日深大寺三本表の
合戦に伯父朝成の為敵生捕され残る勢ひを失ひぬれバ縦ひ堀に篭て防
挑とも運を到るくなれハ難叶るべし一先城を開て軍兵の気を養ひ重ねて本
意を遂せんと老臣おのおの評定にこそ及びて搦手の城戸を開て大将朝
定を始として諸卒女童に至迄我先にと走り出て川越より北の方三里
余にある松山の城に逃入ぬ此松山の城と云ハ難波多弾正といふもの之居城なし
よく引入要害を密くし兵粮秣藁にいたるまで潤沢に用意して人馬の労を
休めける河越の城をバ北條左衛門大夫綱成を以てこれを守らしむ綱成之の

名字ハ福島武久島とにて救援の軍功によりて北條氏より黄條の絹旗方に
八幡の二字を書てこれをのぼりとせる故に人これを黄八幡と号す同じき十四
年九月廿六日山内上杉憲政扇谷上杉朝定古河公方源の晴氏従見合
て兵八万をもつて川越の城を囲む上杉憲政本陣ハ砂窪よりの要之城将綱成
が兵僅に三千をもつて能これを防く時に北条氏康八千の軍兵を卒してこれも
砂窪の辺に出張し敵の備えを窺ひ見て夜討せんとするを探る是より先城
将綱成が子兵千代といふものあり若年なりといへども其の心いさゝか武略
あり小田原にありけるが氏康にむかつて曰父綱成後詰のいたる事を志らずして城を
開くるやもしれん我まづ先行てこれを告んとて氏康其の城へ入の計略を以て

こゝを許さず千代則ち敵の陣中を只一人何も通り入城し父に件の事を
示し綱成なればおさめし後氏康の兵八千囲しき四月廿日の夜
憲政が砂窪の本陣の乱に入ておびやかされ氏康大勝利上杉朝定討
死し憲政は上州の平井の城に逃入る上杉いよいよ衰へ関東の諸士多く氏
康に従ふ而後古河の足利晴氏を氏康の城に移す文安二年五月十三日武
蔵河越に電ふるその大さは重さ弐斤小なるは四指斗人馬鳥獣多く死れと
云又回国雑記に曰河越といふ所にいたりて最勝院といふ山伏の家に一夜
やどりて

かきりなく かはりよみはべるむさしのさかひきて川越の里

此里に常楽寺とて時宗の道場あり 下略 されば上京にふめくる芳野の里とよ
は一体に川越の並びて東京葉平の橋所なりといひ傳へ伊勢物語曰むかし
おとこむさしの国までまどひありきけりさてその国にある女をよばひけり
父はこと人にあはせむといひけるを母なむあてなる人に心つけたりける
父はなほ人にて母なむ藤原なりけるさてなむあてなる人にと思ひける
このむこがねによみておこせたりける住む所なむいるまのこほりみよし
のゝさとなりける

みよしののたのむのかりもひたぶるに君がかたにぞよるとなくなる

むこがね返し

わが方へよまとふくるみすのたのむのかり銭ハ川ハつまとむ
となむ武士の国とても野郷なる事とおもむ様ありさりしことなり
一当城下諏訪大明神の例祭ハ九月廿四日の夜より翌廿五日にいたる但し子寅
辰午申戌年ごとに殊に練子の出ハ祭礼の度ごと異にして花美をつくし雛
子方務子の者ハ江戸より雇ひて衣裳に綾羅を着ならしめて城下の町々を
通行し花美なる事神田明神の祭礼に倍せり東武よりも見物に来る
人数少からず予ハ見ざる故是非を評しがたしいかにも城下の町並盛
栄にして江戸ノ門川橋通より神田須田町筋に能似より町々ハ甚盤
町々も旅籠ハ商家の容体甚子の風も更に江戸に似るハ狭き事

ハ東武の拾分一にもいかん欤南元付の町家より少しハ市中を行抜る事凡
拾三四町も松山の町ハ通の往還にて是より日里八町中路に井草川といふ流
舟つなぎ有ここに荒川の水上より東西ハ市中凡七八町もあらん欤中程より西ハ流
より蓮磬寺の門前通りを北へ本町迄行きて本町と出又西の方へ行橋を越
て石原町とてあり旅店ある側に形をつくり稀て東武ある宿町の曲輪あり但
旅店の能ハ諸木(ヱユモリ)や釜島屋等ぞ江戸の流べきハいせ屋金蔵の外に
しと土人のいふ此路筋ハ比企郡岩どの観音参詣の往還にて此土地ハ
せバしと雖頗る繁昌にて賑わしく栄ふる商人も多くあり彼南町なる横田
次郎吉といふ家ハ七万両分限の聞えありて醤油造りも年々三千石を超(ツブ)といふ

いや千年城をより物部給ふ命さられしとなん

一　当城内に三角芝とや稱する一塁の塚あり是当城防禦要害の括目なして いでや敵兵城を押よせ難儀に及ぶ時ハ此一塁の土を除き石ぬきをされ退且ハ折ふ水湧かし須臾の間に至辺満水し城地のこと浮島となり敵兵みに漂流して途を失ふとなんいひ伝ふされハ上ふ云石原町より西の方の往還ハ比企の岩殿へ四里ありて中路に高麗（コマ）川と入間川の二川横たハりおのおの舟わたし也毎此路をゆけり西の方より秩父山ハ波濤のめくりつらなり又ちかく京堂の面し諸さむるかなし且此川栈の土地さしたる名産なく只若生袋と簾紙と黒芋と称す地の川栈にてふりけり

四十七

一　武州新座郡大和田の駅乃入口坂の小側路傍に駒つなぎ松といへる松樹の古株なんで成木せり土人伝へ云むかし小栗判官の馬をはなれし立る松と號但し昔の松ハ枯朽て根茎より又若松古株ならび生じ成木せり今ハ竹垣ゆひ其側に小社を建祀て土人是を馬頭観世音と崇めぬ此大和田ハ膝折の駅より西一里にして川越鉄道これハ此大和田の在所かとよ須恵といへる處ハ此辺の名所のよしきこゆるのちに歌もあり
むさしのをくるのきはのくぬハ先なるなつむ清そいへる
田園雑記当をくるといふ所にいうて名にきこえしききなどあげ給ふよみたる

旅ころも袖やつれてむさしのゝくさのゆかりをきゝしそめしくちなさし

又ある説の名にある中野村は堯恵法印東国紀行に曰廿八日（文明十七年六月）むさし

しのゝうち中野といふ所に平重俊といへるが庵にまかりて胡

露を見すて眺望するに何の草も乃まも只白雲のかゝるを限りと

思ひて又やとりの里へかえり侍りて

露はらふ道は袖よりむすびきて尾の草葉にかゝるむさしの原

やりし日数かさなりのぼりてよしある草の原をたつねくる夜あかさむと思

ひかへて侍りしに草の上に重ねる雪の降るとおぼゆる程に富士の

雪うかさて侍り

夜とまる宿や富士の根の上に白雲のきむさしのゝ原

むさしの原はいにしへ十郡に跨りて西は秩父根東は海北は川越南は向か岡

杉原が原にいたるとなん古文書ありて読むべし数百年を追て民居村里とな

りといへどもむさしの秋の面影は今も残りて平原をそりふく夕垣も野邊も

秋はおくされ花さけるがめしも萩すゝきをはふえしの色も甚異なる此理に

ふさへかすし殊に多摩郡にいたりて富士見塚といえるありて高きこと丈あまり

めぐり五十歩もあらん此道は江府より府中の明神にいたりて七里せ秋の

比府中の驛に宿りて是より数指四五町計もあらん西の方に行て彼塚上に登

りて月明の浅るを見れば寒く清明萬里又似夢も我もなし富士の山は西

南の表に望む筑波の山は東山の方へ少しかへりて見ゆる彼姉じの顔を好みさぶらひ見
ましかばさぞなあるべし山ふかく有りしや、ありけん大人の陰助を得しのみ

四十八

一武州豊島郡板橋の駅は御領にして下宿上宿とわかれて一駅なり駅中に
板橋あり長さ九間ばかりを上下の堺とす此駅の西の方を前野村といふ
此村の内に清水村といふあり是小名のやうに一村の廣きを案ずべしされば
件の駅を出てわづか八九町ばかりにして街道より左へ入ること凡四五町に清
潔の冷泉湧出す清水の号はこれより起るとなん是は往古此村に貧し
き農夫ありて老たる父を持り此老父性質酒を好みて朝夕求れどもいへども
家貧しければ心のまゝに飽まで飲て酔ふことのなかりしを志けるに或日彼老夫酒に酔

して漸く家に帰るその体も酔て臭きを酒を求めし依て其子父に尋るに
答て曰彼所に好味の芳酒湧出し侍るゆゑ閑に居ていつも日比の志願を遂て飽
までに飲しまで覚えず酩酊せしと物がたりぬ彼子不審に思ひて大方ならねば
老父と共にその地にいたり見ければいつもながらの盈る酒臭し其ければ其の子
飲時は水にして老親の飲めば則ち芳酒なり是老父が為に天より授与なさしめ
給ひしなるべしと見ゆ故に生涯飽までに飲酒に富みて死せり依て彼地を呼
て酒泉澗（シユセンタニ）といひ後又清水村とあらためたるとなん彼濃州養老の瀧の
相似仁助の話なりけんされど彼は又高き飛泉にて是は窪き溪間の細水
なり先年の所は往来の北側をさる丈余りなりしかたへ下れば幅凡三尺長さ拾余

同池のぬくみ温えて深さ壱丈ふハ退て西の崖下ふ丸口数ケ所ありて清泉
湧出し旱魃も涸るゝ事なし此水甚軽く煎茶によしと沙て宮田市左衛門
清風亭 駿雨 及び京東路牛の西土を麦ふ同伴し同所西角百姓利右衛門 新右衛門号
方まて一覧し文士瓶ふ汲て帰宅し煎茶してたのしめりその後仁父子又ハ
伴右衛門他を同道し今ミ風炉を細くして途中ふおゐて煎茶し嬉しかりしを
の後又遠山潤閣吉水一蕃の高隠士を伴ひて泉川の種ニふ名ありき
清水権右衛門か宅に憩ひ麦飯のりてふしる腹ふくらしと又ヶ湧泉の四地
を道指しる椎右衛門宅よりハ凡三町余又縁切榎の西建石よりたの畠
路を入て凡六町ばかりもあるべし此外ふ目黒行人坂上松平主殿頭下やし

き千代が崎の谷間ふむかし酒の湧しと云井あり井戸側ハ陶粉を練て作
りしものと覚ゆ後巻ニ譲りてくはしく弁ずべし

四十九

一 武州荏原郡羽根田村の弁天ハ六郷川の下流河口の東の鼻之東武より此
道路ハ大森村の板橋を越左側の酒店の際より南へ細小路を入て羽根
田路あり此通りむかし海濱を京里ちるが故ニ予がかねての於歴の肯
髄ちりを年世上ニ好事の人若干ありて巨細ニ寺社を穿鑿し古器をあつめ
の品物田舗京園等を穿ちけり数里も於遠しとせず肺肝を苦しめる
をいく却て楽しことなりそれハ後世ニ伝えて名を貴んが為とふ予ふ知
で道し古跡を見废埋のまゝし京地をたづねて道於し保養さんと予の奴

是の家物ニ任せたるの類く方ニ指出しおくさむ是世の好みなれハ大同小
異といはん歟但し先に足乏しき事をその儘ニ打まかせ置んハ実ニ本意なく
孫子の為ニハ諭し祖父が所為ニせと吟定しては書集る事をたのしミとし
見物をきしとや笑ハんする族をのとや諭らん今へ予が一癖ありて止めてきを
バ件の細小路をとて海浜ニそひ行ハと凡壱里余の所西南の方なるた
弁天ヶ崎磯馴松を目あてニ羽根田村ニいたる此路をゆかば右ニハ耕地を見
左りニハ渚ニ千鳥鷗などの求食(アサル)又海士の藻刈あり左海又海鉄の幽あるし
ニ房総の遠山を京見氏此風景天然ニして眺望いはん方なし既ニ羽根田
村ニいたれバ多くハ漁者の家居なり是より南の方三町の洲崎ニ

弁才天あり南ハ只渺々たる大洋西ハ六郷川の下流ニして河口より川崎仮名
川の磯辺より遥ニ浦賀の湊を望て東ハ芝蘭ヶ崎の汀より芝浦まで
京見し海浜の風光又あるべしとハ思ハれざりきされバ此辺一体地低なり
といへとも弁才天の社地ハ三方壱町余の所浮島ニして毎度の大水ニも御除
出来ざりしとなん弁天堂ハ西向ニ建て大さ三間ニ過ぎ且堂守の庵室ハ離
れて海岸ニ依り表ハ北ニ向ひ裏ハ大洋ニ対せり既ニ庵主の座ニ憩ひて
眺望すれバ房総の帆船の目当となる常燈ハ右ニありて海浜の佳景実ニ妙
らし磯馴松の汐風ニ枝の曲りたる樹形の天造なる又海風の南より吹
抜て夏ニハあつさを知らぬ地なれバ是一箇の佳境と賞すべし此弁才天当社の

し海月化にかゝる縁ども更に参詣なし乎がぬき好事の詭人又ハ千社参り
となん適ありて札を張り黙れして急ぎ帰るもありて人の集ひ来らざるハ
土地の不幸といふべし又庵室の傍へに古蛇の窟穴といふものありとて此川端を
拾町余也庭より羽根田のはづれにいる又此家一場の風色六郷川とハ異に
して一興なり是より大師河原の平間寺へ半路ありと教田既に行くしたゐ誠
ば路もがしの路傍に村長（ムラヲサ）と覚しき門外に古樹の名松あり枝の揺紅
幹（ミキ）の風情たぐひなき造りまでがぬし則ち末廣の松と記して建札せりこそ也ん
年上頃ありて名を下しぬる名樹なり

五十

一武州橘樹郡平間寺 真言 八川崎の驛より東南半路にあり当寺の大師は
弘法の作とぞいふ昔当所の海濱へ流れ寄しを漁者とも引上しハ幾
年か海底に沈みて奥蠣殻（カキガラ）の結ひし結縁やしけむ本像の背中に蛎売の
付たる所ありけり本像の長丈一尺五寸ありしより以ての尊大師河原と号せり昔
ハ此邊をも藤際の河原なりしも年々海落埋まり樹林繁茂し田畑造るよ
開発せしかバ今ハ些波打際を去事弐拾余町大師河原といへる名も似ざる
土の俗地なりされバ大師堂ハ南面に作りて五間四面内外の荘厳気きよび
やかに思ひの絵馬奉納物ハ堂内に狭りて異験のあるゆへん厄除大師と称せ
門外にハ商家酒樓食店等軒をならべ又境内にハ大師堂をはじめ玄関僧
坊庫裏水供水手水屋形門並石等にいたるまで肌目（キメ）細に善尽し美を

し建立成就せしハ東武の人の志ありてなるべし別して文化九壬申年春
公御年四十二の御厄にあたらせ給ふ依て御父子様ともに厄除大師へ成せられ
翌年癸酉の十月西御丸にて若君様目出度御誕生殊に御平康
中様御服より御母子様ともに御師の御陰にもあらせらる左右の祥瑞よく
顕れせ給ふハ是全く日吉山王宮をはじめ諸天善神の守護なる人々也
一ツハ厄除大師の霊験によるべき故ともよりて諸人いよいよ信を増て群集
せるなるべし　さてこれハ公家より西の方は路うちに川崎の駅茶屋と
かやうに賑ひの際へおよびし其の路ぞいて田をなし畑に随ひ風景又めづら
しく四季ともに道挽をするに江戸より凡四里半ばかりハ遠からめ

五十一

一　武州足立郡大相模村大聖寺天台の不動堂ハ草加の駅より北東の方弐里
ばかりその路すじハ草加宿の先加茂よりかやいえる立場の建石より右の畑道
を入る事一里あり此遠路ハ春ハ梅桃椿さくら梨花連翹杏の花をこぼし
め楓の芽吹にいまだ清て優におもしろく夏ハ杜若杜鵑花とりどりの尾花雪
ふでし又所々の蓮池にハ紅白の色を清くさき咲し風情又ある趣しと
も思ハれざりき予此辺に道挽をするに三秋中秋の末比より綿畠の乃花
の盛りなるも最めづらしく殊に路傍にハ秋の草々の花咲こぼれし様ハ
実に面白し土地又一品なるものをや

花に吹風通でぬくしりとさくらかな

鮮僧　以風

斯て大相模村の入口より切石塔あるべし農民の墳墓か町家に似て路傍の為劇
に数をなすべし寺号の石凡四五町ほど覚ゆ 扨大聖寺の門前にいたれば法
則の高札を建てり当院寺領六拾石末寺を隣に六院ありて随く縁を
次第して当寺を住職するものなんおれたのなし

禁制

一 山内に竹木伐之事

一 山林之内殺生堅不可致
事

一 狼藉之輩於有之者捕之

可訴ケ事

寛保四年甲子二月

右寛保四年より文化十酉年にいたりて七拾余ヶ年に及ぶり当寺の不動
堂は相模の国大山不動の根本なるよしにて土地を大相模といひ山号を
真大山といふなりし境内も広く南の仁王門より北に向く不動堂まで
いたる間凡五町 平坦の境内なれども門外よりの見通しは下総成田山より
は遥にまさりて悟らず加茂よりは壱里に遠く又桃が谷の驛よりは裏門
通で五拾町もありて街道の路傍なれば稀に知る古跡の霊場にて都鄙の
参詣少なく四八日の外は群集をなして来らざる人あるは恨なきをみるべし

一 仁王門ハ柱本の南向にありて高さも棟高く彫ものハ巧工を尽し左右の角
より虹梁目の柱の上に牡丹をちらし獅子の容形いろ／＼番匠が作りしや
らん此門東西五間余南北弐間上にハ真大山と書し竪額あれど筆者
の名なし又ふし此門を過て矢大臣門まで凡壱町余左りの方ハ僧坊ち
甍を作り桜瑞の外面にハ茶屋ありて床几をならへ右の方ハ尼店とかやに
ての店をならべて小間物等をうりあきなひの商ひハ木柄とて見苦しからぬを
ならべさるも又めづらしく花く矢大臣門を過右の側に垢離場あり垢離堂
あり此あたりより境内次第に広がりて奥深く既に矢大臣門ハ二重屋根
の楼門にて上下に額あり上なるハ弘法の筆意にて不動堂と書下なる

ハ佐理卿の筆法を以て真字に不動堂と認めたり但し弐額ともに筆者の
名なきも惜し恨をなし矢大臣門ハ大さ東西五間余南北弐間是より本堂
まで弐拾余間もあらん段々左手鐘楼堂左りにハ左ありての天神の天神地祇
の小社あり又右手の方にハ酒楼食店の家居も五十軒余あり又不動堂の
小裏に門ありこれ我ヶ谷の駅へ通る道下又東よりくるあり是ハ寺ども等への往
還なりと也且又門前にハ旅店商家等軒をならべて建つゞき多く軒ハ茂り
片鄙に此精舎ありて例月廿八日ハ殊に賑ハしく近郷の男女群集するハ
名誉にて著（イチジル）明き霊験もあるゆへなり
一 不動堂ハ八間四面にて方勾欄（コウラン）にして前面に飾まり正面の御厨子にハ公の御作を

高欄にも登りて内陣荘厳の結構首尾よく備はり又さまざまの志願に依
て男女の髻(タブサ)を切ていくつとなく納めたるあり或ハ絵馬をさゝげいろいろの寄進を納
めの品ハ堂内に飾りて目を驚かす此堂四方勾欄の結構をハ両方共ハ参詣
の諸人足を穢さず衣裳を濡さずして百度の心願を遂させる様に能くせ
しハ成田山の不動堂にかはらず且正面に阿遮殿(アシヤデン)と横に三字にてしるせし額
ハ朝鮮國性弼の筆にして名印ありしと見えて額大さ横六尺程竪
三尺余あるべし且又古来より奉納の絵馬若干ありて文禄慶長元和
寛永年号等あきらかなれバ年古し道場と見ゆ彼下総成田村の不動ハ中
古より不圖繁昌して今年々事悉く成就し本堂鐘楼経堂三重の
塔楼門本地堂奥の院籠り堂をはじめ別當新勝寺の門玄関坊舎ハ
勿論表通り石の玉垣にいたるまで約かに首尾備足し容躰作る事年
移りハ不動の第一といへども寺領としてハ堀田相模守より五拾石を寄附(アテヲコナ)
ふのミ此大さかさの大聖寺ハ相州大山の根本として六拾石の御朱印
を賜ひぬるハ年代久しき不動堂にて此地江戸より九十里にハ遠し

五十弐

一 武州久良岐郡能見堂擲筆山地蔵院曹洞ハ程が谷の驛の南四里にあ
り是よりいたる道路ハ中里の町新茶屋といへるあるより随く山中にかゝ入小坂
をのぼり険路を経て拾余町にして能見堂の土地にいたる是より金澤の
瀬戸橋へ弐拾余町ありとなん当庵ハ東武青山青龍寺の末刹とかや

先近くといへる所より四方を眺望すれば西北の方に富嶽の高根白く
そびえさやかに見えて又豆州の島々遠村は画けるごとく既に頭べをめぐ
らせば東の方は渋海漫々として帆かけて走る大小の舟船又遙に房総の
山々は海彼に見えて〻落墨に勝るがごとし斯て弟稜杉の元に至り
眼然として風色を京望せるにいかなる青巌山水は眼下に集ひ近くは
瀬戸洲崎の入江ひろくめぐる海士藻を苅る代の女も小児の柏に見て瀬戸橋を
人の行き来も風情又猿島烏帽子島野島をはじめ夏島六浦三浦葛浦
ならびに一面に見えて此より先正面の前には一覧亭の絶頂は雲に聳え六国見に
は瀬戸の明神弁才天の小祠は湖辺にさし出未申の方には浦賀より鎌倉山

につゞきて遠近の連山は波濤のごとく房総の方には名にしあふ鋸が嶽は一際高
く西は安房の二子山常総にてふ一望の中に歴然たり又眼下には関白
公の領掛松引つゞきて入江の上の松杉の樹茂をしは塗桶山とや又東
の峯なる二本の古松を村君太夫の夫婦松或は山の裾なる入江の汀に一際
目立を君ヶ崎の刻松とふん此日折よくも天気快明風色を見るにさ
ど良かつらく夜に想ひの眺望更にいはん方なし日本国指折の名勝の
ひとつとも云べし実に理りと覚ゆされば此能見堂といふは九百有余年のむか
しかとよ宇多帝の御宇仁和年間画師巨勢の金岡といふもの東へ下り
し御此松が根の下にて此地の風景を書留んと筆をとりしに須臾の間

山風も千変万化し絶妙の景なりける故に書写なりがたしと筆を投捨
し景色のみ感賞せしとぞ土人此樹を筆すて松と称ハ此ゆゑなり
其の後寛仁年間御堂関白藤原道長公此處へ光臨しありし眺景に愛さ
せ給ひ此地に志ざし草庵を結び慰て給ひしとかや今の本堂僧坊ハ久
世侯の造立にて擲筆山地蔵院と号し其後延宝の頃にも水戸
黄門光国卿ハ僧東皐心越禅師を具し此地に来りありし唐土の西湖
にありける瀟湘の八景に表どり此地にも八景の地名及び四石八木の号
と八景の詩文七言絶句八首を作まり後又京極無生居の和歌八首
を作り添へより武州金沢八景の詩歌とて今も専ら人の知る詩
文八首ハ心越禅師の作なりかくまでハ万里の海陸を歴て我邦に来り国に居て
程遠き唐土の風色を眼前に見るの勝地彼西湖の八景といふも此土地に
似たりとあきらかなれバ故郷の事何ぞ全国を慕ハんやされバ心越禅師ハ漢朝の首
孫にて顕る博識道徳の出家なるに依て光圀卿ハ師弟の約をなしたまひて
の上御妹君を心越へ嫁せしめたまひ偕老同穴の絆を以て永く日本の地に
引とゞめ置度思し召るに年を経るといへども猥なる事なくして却て姫
君へ無常菩提の道理を志めし参禅悟道の志へ至りたまひしかバ姫君も
折て開悟したまひけり相州鎌倉英勝禅寺といへる尼寺の始元是なり
此より此処能見堂の名高く四石八木の跡及び八景の詩歌を世に伝

えたるが全く発心菩提の学解によるところ且能見堂を去りて金沢に
止宿せんには名主五郎右衛門橋あたりまた安本橋本営をよしとん

五十三

一相州鎌倉郡行合川とは腰越村と稲村が崎との間七里が濱の中路に
あり七里が濱とは行程六町を一里として濱通四拾弐町ありとかや
此中程にある川より三町ばかり西の海濱の細流あるを行合川と号けしも
かしこは川なりしや覚束なし今は小倒の山岩より波打際へ流るゝ細溝なり
江戸の方言に溝飛越のドブにひとしく音なし川といへるも又かくのごとし
されば此行合川の名は愚俗いひ傳へて日蓮上人を此濱砂の波打際に
引すゑ首を刎んと振上し刃忽焉と三ツに折たりしも諸天及び三十番神

の擁護によりて事止ハ此奇特を訴えんと此川まで走り来るに同しく向へより
も日蓮の命乞叶ひ赦免状を竹に挟みて走り来る人双方行合ひたる故
依てそれより以来行合川といひ傳へたるとなん此一條本條ハ左にあらずと予
壮年のいにしへ日蓮宗の書をあまた見たる中に録外（ロクゲ）の書とよめるもの是ハ
六老僧以後の他門より只日蓮一宗の光澤（ツヤ）をつけ添んとて若干あり皆誑惑の
書なり又録内（ロクナイ）の書といふハ日蓮上人及ひ日昭日朗日向日興日頂日持等
の六老僧といへるその者述或ハ日記等にて正統の書なり夫日蓮上人ハ人
皇八拾五代後堀川院の御宇貞應元年壬午二月十六日安房の國小湊
村の漁者が子と産れてより踰り人皇九拾代後宇多院の御宇弘安五

年壬午十月十三日武州池上村の草庵に遷化ス法寿六拾一才其後の世の
艱苦危難又命かゝりの小松原剱難の様の事録内の書にて実正を承へ居
しに去る文化三丙寅年八月十七日某代七郎兵衛の宅にて茶寮の茶話の内
村妙法寺隠居古雲庵謙道と相客にありし同月毎日三番伊織茶席に
又相客し同じく十一月三日忍田徳市郎（后清助息 後源蔵）の宅茶事の砌みも参会し
て相客を待る間彼妙法寺の事を云ひ語振して謙道に向ひ語りて曰
既に刎首の座に坐し大覚禅師の命乞ゆさ行しが折節叶ひて太刀それの
役人ハ白刃を鞘に収めつりしを導師ハ書それかつて其れハむりより語変するにハ
謙道の信え承りぬと物語りして我等も若くし先年録内の書をみたる

柾も侍りしなど云合せて此語り畢て日蓮の徒ハ録内の書に執然とするの
事を深く隠していひ様の自讃謗他の癖あれバ兎角僧俗ともに我慢偏
執の痴質なるまゝかゝさに此謙道老僧ハその教の族にハ似も付ぬ温順にし
て有徳におとなしく若えしハ流石に某等の事を承わりぬるも理なりと思ひき
されバむかし文永八年九月十二日日蓮を土の牢内より引出し浜辺の荒磯に
て既に首を刎（サシマ）んと用意せし時兼ての知己なれバいかにも惜く思ひ日蓮
の器量の逞しきを惜ミん建長寺の住持道隆（後号大覚禅師）其時の執事へ
いろいろと申て日蓮の助命を執達し甚危き場所にて赦免ありしハ
将又不思の仕合といふべし是ひとへに大覚禅師の慈悲の手扱ひによりて

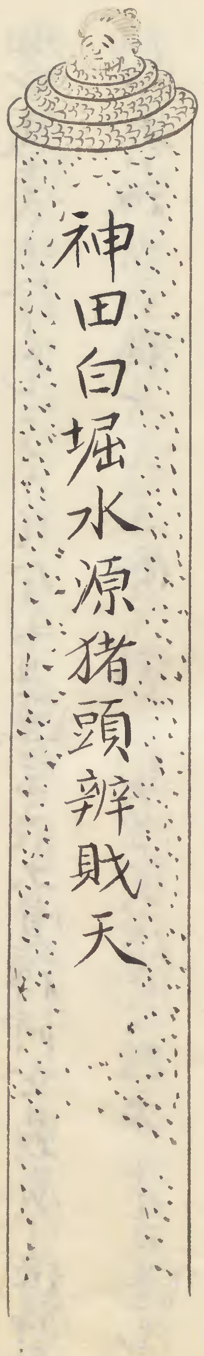
ありし意味合の書え如し然れバ佛神の加護ありて振上し古刀の折たる柄
にも傳えしものゝ例せバむかし仁平三年癸酉源三位頼政ハ鳴弦の法を以
て鵺（ヌエ）といえる妖怪を退治せしを矢もて射留し杯子画き又猪の早太と
いふ者が九字を切りて九刀利通（コノガタナ）し留ると短刀を抜持て画き傳えしが如し
依て児女等ハ誤たる事を誤ること実なりと思えり何れも木剣の外ハ常せ
ざる帝の御寝殿近きあたりで真剣を抜きちらし血をあやさんや是画家
の作意なる事を察すべし去ながら今日蓮が別首の期に及んで太刀の折まで
程の佛神の加護あらバ何とて自ら足に後手に括られて何そ土の牢内の艱苦
を救ハざるや或ハ佛神もまゝしの者へ靈驗ぶりも示し別首の罪に極はらさ

源以等に何で助ず救ハざるや皆誤たる事なるを察知して大覚禅師の深
切と感賞すべし是によりて今も日蓮宗にハ大覚禅師を尊崇し禅師出
師の名ハ禅家の稱号なるに依て新た大覚大僧正と稱号して日蓮徒の
一致派の五ケ所本寺同じく勝劣派の三ケ所本寺におゐて大覚禅師の木
像あるいハ位牌を安置し月牌を供じて崇敬するハ日蓮が龍の口の危急
助命の高恩を謝せんが為也彼宗の僧徒深くつゝ隠して秘したるに依て
其の宗旨の者も知らざる族多し

五十四

一 武州多麻郡吉祥寺村猪のかしら北立天ハ大宮の八幡より西の方一里半
あり別當大盛寺ハ甲路自寺東南の方牟禮村に住し居吉祥寺村なる

もむりより吉祥天女勧請の土地由てに古来かくハ名附るよしや此弁天の小社ハ
坂をのぼりて右手低きの地中にありて社の大さ僅ニ九尺四方ふ過ざる程なり本朱ニ
塗ありがへり前ニ御殿あり大さ三尺四面且又四ッ谷へ引玉川の上水ハ坂の上
南之の高みを東流せり逆流ふして目覚る心地せらる先小金井橋の川下
なり猪首不坂の下り口ふ又上るがごとき四方面の碑あり碑の銘ニ弁才天ニ猪頭
ハ老翁ニ体ハ蛇形にてとぐろ巻て蟠(ワダカマ)りたる全形を刻みたるものなし



弁天堂を下りまで庵室ハ西側の崖下ニあり此庵室ニ憩ひ例の如く毘炉
を組立炉火を焚で一炊し賄ひ此土地の様子など問て休息す此庵室の
西後ハ松山の高さ凡三丈古松枝を除ずして繁茂せる事数百本定て秋
ハ菌(タケ)ふどおやせんと問ハ老父答て此山麓ニとふハあれど御留山ふてし
ハ無造(ムザト)入ふくさむ者なし我此庵室へ引籠りし当分ハ夜ふく此松山ニ
鳴しき音して大木の折倒るかと思はる事度々あり又震動鳴りて庵室
の戸障子迄一同ふガタつくと為し或ハ家を推(ヲシ)ゆるがし中天へ引上振落し
地上へドンと投落しなどする事ありしが唯ふるへ居て臥所ニかくて居
たる程く別条なく翌朝ふなるふ更ふかはる事なし是ぞふ天狗の所為なり
とて此ハ居名燦られハ古和の仮ふしとその如くなりき事ガ如き臆病ものハ

井し此庵に移居ハ成かたし三ヶ所の宮に人家にてハ只此庵室のこるまゝ
能く氣強き人ならではすみなん難し此池五ヶ所三反四畝余もあり坪数にして
壱万三千四百拾壱坪ありと云此池の西の方に出し 神祖御茶事を掟
げしる御用ひ給ひし井口とて建札あり依て此下流を御茶の水と稱し
又池を廻りて辛夷（コブシ）の樹あり 大猷廟にも小刀にて猪のかしらを彫刻し
給ひし木ハ切細寺の什宝となりて現在の樹に建札あり又池の辺に小宮
きありて御茶屋を建給ひし所を今御殿山と稱し又慈眼大師也し上
七日の祈念によりて池中七ヶ所より霊水湧出せりとて一名を七井の池
とも稱し又柳の古樹あり 大猷廟にも楊枝のさし樹なりとて建札ありて梅

此弁天の境内ハ唯池の三方に切れ廣さにもあらず東の方池の辺ながら
ゆに廣くあらねども蓮の生繁り足えずて蓮の代株にて足をいれて通行
成がたし一体此辺地低くに四方ハ壱丈余も高し池の外ハ雑樹繁茂し
地中も立枯の蓋茂の柢多くしてあるまよし溢流を見がたく元より村の
人々の水路ハ更に縦横なし責ふかしむべ解地とて下民にいる人
粮を用意せざれハ飢渇の愁ひあり此小縁乃蓮谷の中を数所巡て
往還ハ小金井ハ凡弐拾町ありて此道にさらにいる道路二ヶ所あり一ハ
八堀内村妙法寺辺より大宮八幡の社内を過西へして往還を行て凡
弐里余も脇路にて泉を引あるがことし是ハ猪のかしら弁天の表より入る

の路より二ツハ妙法寺の後をたどりて青梅街道光圀寺村の辻より左た
入りて凡壱里半余ハ遠し是ハ弁天の裏より這入の路より予ハ春秋両度と
も此度の道程せしがこの路ならて西俗地にして見晴しあしく路近きを
生じ憩ふ茶店稀ふ行路人気少なく凡東武より四里半もあらん一度ハ
道遠きべし一両度ハいとふべからず

五十五

一 武州多麻郡小金井のさくらは府中の駅の北壱里半程のかしら弁天
より道東北の方拾金町にあり立春凡七十日目比を盛中とし但年
の寒暖によるべし是小金井村外谷桜樹多き故に小金井の花王と称
此常て小金井橋ハ玉川上水へ通りて架せる板橋ふて長さ五間此水西ハ
羽村といふより水を引き東武にいたるまで玉流拾里余大小の橋え多し
其の地名をもって橋の名とせり則ち南ハ野中鈴木貫井(ヌクイ)小金井梶野小右
廻田(メグリタ)野中鈴木是政関野境新田と両屋拾ケ村にかゝりて東西壱里の
間さくら木多し左右を植来ふして中ふ玉川の上流を洗してさくら両岸
石垣ふて川幅僅か三間余逆流の清潔なるハ自賞にる此地ぞせず際此
長流の両側ふ桜樹数千株を植て川筋をえりて東ふ目のおよぶ
ふおよんで凡さくら長流ふそひて両岸数千万株の花をつゝむ存ふ
至ぬべしおもさくら樹ハ中古元文年中御代官川崎何某台命ふよりて植
しが今ふ木大ふなりて開花の時花を爽ふ芬芳鮮英文ある趣しと

も思ハせざりき依て　有徳君ハよし野のふがなにも陶させめんとて徳理(カチノ)
ても地名を移させ給ふなれバ此長流に架せる橋すべて七ツある中に小
金井と貫井の両川の二公より掛させしめ給ひし故此の風景においてハ
小金井なるをぐましくも此橋上より西の方ハ芙嶽函山を望み又南岸を
さしはさむ桜花ハ落英繽紛として前後南北をえらび殊に武州一国
の壮観春色まさにありまるの頃此小金井橋の左右に南三軒の酒楼
食店ありて御飢を去のき旅情をなぐさむ此地極境の雅客ハ大方
此酒楼に止宿をとるなれバ此川筋の両岸に花王を植しハ春をた
のしむ故にあらバ花茶をさらの奔流に沈むはハ毒自然に消
除して無病ならしめんが為也実に此地の風景ハ雪も又きしき稀也たハ
いへるよく憩ゑ愛ハ唯此小金井橋の辺りて川筋桂葉の名更に茶店
なく解遁(タマサカ)に店(タナ)とハいへどもあるとも馬奴(マゴ)の徒集ひ店々憩ひがてに茶に乏
しく酒に渇(カツエ)食に飢(ウエ)るの土地なり隅田村の花見に比すれバ桜も枯ていハ
よしと雖古今の僻地後人道途して考ふべし

五十六

一 文化十癸酉年二月廿三日武州多麻郡小金井橋の酒店に止宿し翌
小金井の号を老翁より少々あらましを聴たむさし野の原とくハ先
吉祥寺村の内弐拾四町西久保村の内六町関野村六町同じく新
田ハいりて三四町土橋を越て道路弐筋あり右の方ハ小川青梅街道

あり左の方ハ砂川街道の北を保谷新田といへりこの路に随ひ拾余
町ありて玉川上水の橋にいたる是より桜の林の北邊を境ひ新田と云
川の北を関野新田是政新田鈴木新田梶野田新田小川新田とて五
ヶ村居あらざり又南の方を梶野小金井新田貫井新田なりとも野中
新田上(カミ)ともいき新田等の六ヶ村あり凡東西三四里の間むかし皆渺茫
たる平原なりし毎公の仁恵深く新田と開きしかバ此道へ玉川の水を引しめてより
今さかふ居村となりしども新田と号せるハ此謂なり爾故小金
井の桜も三十年前まてハ今より花も盛なりしかそのころハ又江戸も
此ほとりへ人も少なかりし也されバ騒客も少なかりしに年々紅塵の

雅人見物に来りてかくはやりしといへども花樹もふむりしといへ衰えぬ方長
えてさかりのぬし況や昔年の花さかりをやと古老の人物かたりき且又
小金井橋ハ鈴木新田より小金井新田へわたる橋にて夫より南へ行ときハ
府中の駅に出る是上州より奥へ通りて東海道へ出るの道筋なり
此小金井橋の川上三拾余町小川新田といへるに南府中の本町より
鯉か久保を過て北へ通ふ古道あり此所ハ橋あれて往来せしに橋跪て
より其小川新田の人北之北へ往来せしが則ち此所を北へ凡一里余
にして野川に出又武里許にして入間川ありとぞいふにも耕地より西
北の方を京原すべて広大にして目に障るものなしむかしハ平原の砌

ちいう社よりありけん懐古の風情又少からず且又堀井と名付る井
ハ當所よりも南の方に人見山といふあり此山より清潔の水湧出して一村
の人三拾戸余を養ふ又東此邊凡三四里余の間むかし多く清水なく
或ハ土中に錢氣あり又ハ塩氣あり或ハ赤く或ハ白く或ハ泥味ありて濁
る飲かたく人住居ならざりしに天の扶助によりて自然と清水を得
るもハ黄金を拾ひ得しに似たり故に居村を成て小金井といふ名付ぬ
神代にハ酒泉も出たるよしなど旅泊のつれづれ古老の物かたりしを拾ひ
旅日記に書留侍りて後にきゝて其所を見るに実も今新田とよぶ村々多
くまじりて其居村の前後ハ平原打つゞきてむさし野の面影今も残れるに
ぞ彼古歌によまれたる

行末ハ空も一つのむさし野の草のはらよりいづる月かげ

むさし野や行ども秋のはてぞなきいかなる風の末に吹らん

など古人の秀逸も思ひ出されて臥更に入て夢をむすびぬれバねざめ
に旅泊ハ心に任せぬ事多かる中に此家の行届しだに旅川蕪(?)まにまに
つるも又一興ありて面白かりし

五十七

一 武州比企郡岩殿の観世音ハ坂東弟拾番の札所にして本尊千手観世
音ハ行基菩薩の作とかや入間郡川越の城下より西の方四里といふ
此所まで入間川のふる川を越三里ばかりにて街道より左へ入て

山路又ハ里あるべし其の途中の家めづらしく丸山あり松山ありなだらか成
ありさかしきあり路傍にハ千草の花の笑ふがごとききらんたるもの一ツ感あり賞
するに稀にハ山間に行人あれども居村の遠きや更に牛馬の群さへ見え
ず彼空山寂寞として道心生ず虚谷逍遥して野鳥の群を賦し又
春山友なくしては相求むれバ伐木丁々として山更に幽なりと作り
いかなる風情にも花と風色に愛ぬる路なく人にあらねバ覚束なくも山の
路通りを右へとめぐりて行なかに定月と岩窟との地境ひと為武
本松となづけし希代の古松あり幹（ミキ）の高さ凡五六丈根の少し上より
数本と見ゆる太さ五六尺余りもあらん枝々みな下へ垂茂して其の樹根

畫面の樹形に似たり境ひ樹とさゝも埋りかや東武の近邊にかゝる天造の
景木を見ざるなるべし殊更畑中に獨立せし名木ゆゑ雅客なども画心ある
ハ寫しおくべきものに殊多し是よりいよいよ右へ行く爪先さがりに山の裾
をめぐり事凡半道にして千日堂のまへに至る是より左へ僅にして岩窟の
町口なり夫より観音堂石坂際まで三町その間両側にハ家居立ならび
ある町の半を過てより酒店あり酒食を出す家ありて肆店さらに
なく旅店ハ門前に五六軒粒ぶちしかも石坂下左の側なる橋本文
蔵とかや家居よしと少し傳えてその家に旅泊せしあるじ雅人にして
活花数十瓶を別室になしべ誹諧の風雅も嗜み折々東武へ出て小石川

邊に住せしより蕉風の一新又江戸住の風俗美濃伊勢風の流行より此
流せし狂歌の事など予が好みなれバ旅すがら聞に適へど答へしかバ
面白がりて一両日逗留しぬらんや当山の別当及び近きわたりの友よび集
めなんと頻び強て滞留をすゝめらるゝかゝる山寺の僻地にも人の住ひて
数百の新をなすべく俳諧の流に雅なりと揃ひ後世を思ひけり家内八九人
むつましく暮らすハ眼前に此親子の妙なる力の家業と云ハん歟扨て二階に
憩ひ窓さし覗（ノゾ）けバ東の方北へ打て南西北の三方ハ必ずにも山つゞき
周中に入るがぬき鉄谷の思ひをせしむる此門前の一重ざくら又紅梅の殊
に色よく美が今を最中と咲乱れきしハ江戸にて名高く時ハ三月二日なれ

ど世上の花ハうつろひし盛にて今一重のさくら此盛なれバ山気だも去ハ花
開きによろしもかゝる土地なれバと感慨の情又少なからびたりけるに黄昏
過ぎる比武州飯能（ハンノウ）の人の旅泊して予と一席に相宿しけり獨りのさび
しさハ日毎のつれづれ夜ごとの友を得て時しなき事して其国の咄さまざま土
地の咄しの面白し又ハ其の人々の風俗方言賢愚利鈍の差別の咄しおかしく
一興にして旅中の伽（トギ）となる漁し此男年三拾五六石工にて後世に名を
手に残さんや夜に入て土地に深山のよしにて松茸を煮メさせ夢中にし
するを肴に味淋酒を与へよきなどやかなり飲宴し翌日ハ此男を友として
第一稲荷へ参らんと約しておのおの臥床に入ぬ

一此土地一体にみな巌石なりむかしハ岩にて也ありけん岩屋と称せりされば
町の入口より爪先あがりに観音の方へ才に高く坂際までハ弐丈余も自然
にあがるべし既に観音の山といふハ東西北の三方ハ石山の高さ四五丈もあらん
必至と閉ひ僅に南方の山間にのミ月の輪なる入口一間計ありて三方ま
ぐろりと丸けハし石山の覆なるがいるが如し岩屋と号せしもむべなる哉
此観音堂ハ山上に東向して六間四面石坂二重にて八十五階あり此
土地ハ地轄より天然の石山にて土砂少なしと雖年古し諸木ハ岩
の根をかりミ或ハ根わがりのぬく成木し枝をたわめ盃盞せし風情なる
他るもいまだ及ばん樹しの枝根の雅妙又数ひ殊し既に石階をおおり

登し数十歩にて観音堂にいたる家根ハ銅瓦にて葺なり此堂の正
面に草書にて観世音と横に三字に認めし額ハ佐文山の筆也堂中の絡
摘内陣の荘厳目を驚かせりその外奉納の古額なるハ明暦元年を記せ
しを初めとし万治寛文延宝天和貞享元禄宝永正徳享保寛保な
どの絵馬若干ありてさらぶの奉納をの類し

一本堂の左りに乳なし限度といえる古樹ありて岩上に生し東の方へ傾きぬ
高さを丈に過ぐたさ又を丈余もあらん乳なき婦人此木へ身り念じまいらせバ
必験しありとなん又境内に出茶屋数十軒あり旅人のミにあらずして
凡の参詣の者の賑なるきも観世音の霊験によるべく念じども思る山

陰の僻地にハ不思議といふべし
一本堂の後山ハいと高き巌石を屏風を立しごとき数丈の絶崄なり
此頂上より望臨すれバ秩父の山々種を波濤のごとく西南につらなり唯
四望皓然(カウゼン)として目に障るものなく絶景又類ひなし 東南の方遥に九
く白く見ゆるハ品川の海なるべし 扨て絶壁を下り土龍九出し一覧せず
やと先清水を手に掬しすくひ見るに白く濁り一覧して見るに茶の如
味を失ふ此土地一円井戸なく水に乏し家々に釜を借く 僅の洞
水を溜置て呑むとぞ只秋の頃一切の菌(クサビラ)畑山にあれバ木の子を食
するなりしと是より光寺観音へ四里第四番いたる 五里よりて九

五十八

一 観音へ三里ありとなん
武州比企郡岩殿稲荷ハ松山の横宿より西南の方六町にあり 川越
より八里程 六町といへり 此稲荷ハ凡拾四五年以来の流行神なるが
その以前まてハ少しも及ハざりしが今繁昌にしてハ武州一国の中に肩を
ならぶる稲荷なくハあるべからず 岩殿の観音より見て山越弐里あり
されバ岩殿の町を出て本道左へ付千日堂の際より東北を指して松
山を望みて本街の渓路三四町を過て丸山といふ谷へ下り坂を登り
て山の絶頂といふ所に茶屋あり 茲に憩ひて
四方を眺望するに岩殿の山々を見下しとハ風景一様にして耕地を望て

中路に土岐川の横たはれる風情此辺の景色実に面白し西は此峠を北
東の方へ下ればさて農家の前に細路数筋あり右の方は路より山を
めぐらして耕地の中路へ出一村を過ぎ左りの方境に出る所を除の
川をひ境として此川を土岐川と称して苗打つる所より松山へさて
里といえる此先の路を行く風景ともなく一変してなほ既に河端
にいたるに川越する人足なし暫く猶豫(タメライ)しが此川広しといへども浅ければ
さればいでや渉り越さんと御供なと共に甲斐々々しく裾をかゝげ単を帯
よ足を引し合せ中に入るに水清らかに川砂利の映(ウツシ)さまざま赤き白き
あり又の名石薬玉の如き等の水鉢になりてあそぶ五色の砂利もいそで見に様

らん相州大磯の砂利にもおとらず愛でたき眺めより先は絶景を過て逆流よりも
まであり称ば河中に久慈(タズ)の景色は又一興として渡し場より村を過ぎ耕地を
過ぎ松山に入り草原に出て数軒の家の町ありて名を八重桜の花盛なる所あり椿山坂
の森中なるあり或は松林の中に何の神なるか小社の鳥居しみえる海は遠くその
山々は波濤のごとく容り連なりし風情さまざま手に取れる如きの骨髄見るその一
ことに面白く心身をやしなひ耳目をよろこばしむ又名のしるしぞや斯てあゆむと
もなく字を稲荷の町といふ人家少しく増る処は当所の故郷の地なれば
盛なる東西の町の名を九三町両側家居軒を列し旅店あり糧店あり
又商家酒楼の家も以て金と建つらなり帰る人行く人の旅や只男女の

捷来ハ乃もちぎらだ屋ふめづらしきハ町家の店先ごとに板もて作りし花表(トリヰ)
を出さしく高さ僅に弐尺四寸横幅二尺五寸ふハ過ざるべしと思はるゝ物
ハ丸木にあらざ譬(タトヘ)バ操材などにて作るがぬく家より見るが彩色せし液
為丹と見ゆるもあり又ハ稀なる松板の幅四寸ばかりにして花表を似せ
竹釘にて打付丹と墨にて彩色してその製まさに簾素なるは之疑節の者
志願をもてふ造らしぬるとぞ銭傳ふるとあれん既に鳥居を過本社にいたるに
小社ハ頭ふ三間むかしといへと荘厳の壮麗なる又其細の猶ほをて
ふぬきたりの寄進の品若干あり稲神等にハ別当と覚しき僧侶竈
の判形ト筮(ボクゼイ)のいとなしさ火防の札盗賊除の符あり口箱洗米等に至る迄

男女むらがり集ひて喧しきがぬし鳥居の額ハ正一位箭弓稲荷大明神とあつて
名ある新田の正親岩松満次郎の筆とかや又此社の東より後に古き鳥居
を積立てり高さ凡五尺余幅凡三尺ばかり長さハ拾余間恰も練塀のごとく
積上並ぬるに斜めに高き板もて拵えし鳥居の新まで黙しく片付並
しハ熟かくるさまの多きを察すべしいかなる者も此御山なる古鳥居をみて
驚かざらんやのぶし此頃宮居再建の企ありて北西の方拾間余も去り
地形出来して盛しければ遠からず作るなるへしかゝるとみえて実も西の
方に普請小屋折曲ひて数十間ふ元土つみ棟木垂木柱升形彫もの組
たのふ至る迄あらかじめ出来して入並ぬ又社家の猶図面の建札を見まいらせば

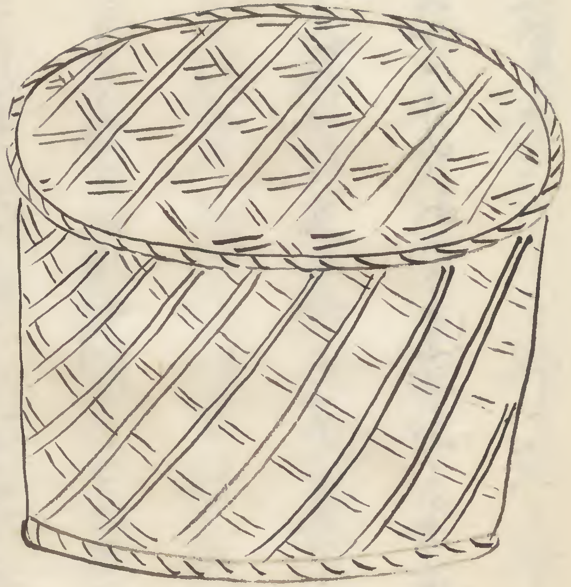
宸翰作りの社に再建さるゝと思へる大さ六尺四面也いにしへの流れで無名なるを
祭るべし川越の城主より社領百石を充行(アテゴナフ)ふよし然れば此稲荷天明年中
より不図流行をなし今斯繁栄し片鄙の田舎にありながら莫大の社殿
建立のよし尚出来まじき名誉といへん欤旅泊の先々噂さを聞に此稲荷の
霊験多かる中に盗賊の品どめ失もの方角をしるし人の善悪病人の死生のまで
しハ奇妙の事どもあまたきこえしかば我東武よりも集ひ行人かぞふるばかりにして川越の彼
方よりハ大体にふ松山の笠弓へ参詣の人も此辺村の賑ひかきりなかりし

一 武州新座郡膝折の駅东の入口坂の下條より西の方ゑ正面に全形の芙
蓉峯を見る其の裾の方にハ秩父箱根の山々飛越ていと清しさに
かゝる三四里もありぬべく思ハるゝ別して富嶽の一條なる雲中に聳えし風景
いと殊に絶偏にして兔角の論なし東武にてハ水道橋通り御茶の水の上坂の下條
より西南にあたりて全形の富士山を見る風光是に似たり四国雑記に同膝折
といへる里に市侍りけるがかりやどりなとて例の誹諧を詠じて同行にかたり
侍る

あき人ハいそぎつゝんで膝折の市にかつけをうるや有りける

此歌に在るかつけハ地名を膝折といへるに對して脚気(カツケ)といひ与へしその為なれど
も実ハなまりてかゝけを賣と讀しハ土地の方言をいひ付たる古方の意を
含ミしものゝ膝折を過きてかゝ市といへるハ文字にハ家急(カキ)とかきてかつ市と

いひ伝ふる大竹ハ豊後笹の細き竹を割てよせて組し竹籠なり是に九
きしあり小判形にしたるもありて大さも又弐寸ならいふる差と覚しきハ細
竹割なでよせて一重に組外ハ八重に組たるを〆とせりしより好多く良する
塗様四卯許飯杓子の柄に従ひて出る件の籠に入器を多らし至愛せし人ハ
煎茶の茶碗茶巻など入て至るのあり東武にも近年古道具屋の店先
に堆ひたるを見る多ることありその製巧まして雅物にもあらんと予が茶友
片岡永次郎谷生源内節米出数など面白しと平生稽古の炭斗に用ひ
しが格別に古くもなくして味ひよきハ稀にして大概籠の高さ八寸以上なる
バたのミ孫重なるをのするもあらんその家籠（カツケ）の図左のごとし



一 武州勝折の脇かたに片山村法養寺 浄土 ハ芝増上寺の元寺にして觀智國
師いまだ存應といひし時住職の寺なりしが 神祖存應を歸依し
給ひ後御菩提所の住持となし給ひたり此日右井の驛に急ぐるの待

早う渡し立ちつゝし旅路に立つけど

六十

一 武州入間郡大井の驛ハ川越領にして大和田の西壱里にあり酒楼旅店

旅籠屋ありて東武より河越までの間止宿すべき驛ハ白子と當驛のミ

なり 回國雑記に曰川越にて常楽といへる時宗の道場にて日中の時の聴

聞のため参りけるにおほ井川といへる所を行すぎにけるに

里を思ひ出て

うちわたす大井川の水上に山やあらしの名残やとまらん

此里に月よしといへる所ありて連哥なとしけるにおもしろき雲の夜

旬の空も侍りぬるは

庭の雪月よしと見る光かな

此夜句して百韻の興行侍りしとあんとなり 右にある事のあるか是

大井村にある夜の川やありしん来の古にハ東武より川越まで行程凡拾里

余の間更にハ川々をき川ふし唯平坦の街道にして春秋の旅路ハ遠

ながらもよくの景色ありて驛路といへどもさびしからずやさし

六十一

一 武州豊嶋郡目白臺下さらにありて塚て世俗庵ハ関口大あり井堰の西三町

にあり萬庵の地ハ高田町洞雲寺芭蕉の配下よりさんハ此庵の後山ハ目白

臺につき蛇嶺の崖下に天満の松柏鬱茂し溪澗よりつゞくハ湧出る清水ハおの

づから見ゆる落川あたりハ猪のかしられ末流いさぎよく前あたりハ瀬茂る耕地を

又そのかし東ハ夜さむの里より牛欲を眺望し花に富る宿寒ハ遠きをの花
に竜睡路に橋をかける人又ハ菜のさなか蓮花草のさかりなるさき風流ならハ子規田
植する秋ハ虫の聲月のさかりの夜ハ枯野雪のゆふ暮にいたるまで天然に
居なからの景色ハ飽事なし此庵に雅客文人の徒ハ連月此庵室へ集り已が
社中を引て雅宴を催ふるのあまり冬なりとも去し文化七庚午年の春
驟雨がさるめにふりて下東路牛を同道し此庵にして日暮煎茶の雅会に遊
ひその後も一両度此庵室の煎茶の席に侍りにたまりしが点茶の作法に比して
是ハ又に祝雅なく行儀をかれ飲礼殆(ホトンド)にたらし蒹葭堂(ケンカドウ)の糟粕を嘗て
いさゝか己が覚えを添我意を加へ俗に雅に似て優なりし此庵にその後も煎

茶の會もおさめきされば菊庵の西隣ハ胸突坂を降りて山吹之神の小社
ありて則ちさゝがれ庵のむかし見を司役され見ハ猪のかしら此御水を流を
尊るが故に此神の宮を営み建立しけりとや蕭遥年間より此事にあん

一 五月雨塚とよぶ事ハ彼桃青翁がさゝがれなる庵にてまゐらせのや谷田の橋といふ
發句によりて後に碑を建てさゝがれ塚とも世俗庵とも号し此碑ハ元
禄年間に営み文化十癸酉年にいたりて百有余年におよび蓋(ケダシ)東武の地
にて世俗の句碑を建るの権輿とした

六十二
一 武州比企郡松山の町ハむかし上田上野介居城の跡ハ松山の城と称して
その後ハ城下の町なりしより今も町屋盤昌して上宿中宿本宿下宿横

宿として町なみ広く東西四五町南北三四町の名高側なきを以て称て宿旅
ハこゝより西の方ハ小川の町本庄の駅大みや町通北ハ野原の文珠寺へ三里然
ヶ谷の駅へ四里といひ東ハ岩室へ半路よしミ北観音へ壱里路の巣の駅へ
三里南の方ハ川越へ四里八町東武へ是より拾六里ありとふんされば此地
も旅客の市中まて川越を除きてハよほ川の外大体此土地まて無用に
ある此松山の町より三四町南の方に生首(ナマガシラ)五郎新田といへる小村あり家居
とわずかに僅よ五郎あまりばかりなり むかしハ生首(ナマクビ)が原と唱て古戦場ハの所と
物語ある原にて夜ハ時々死骸ちらばりて斬首往来よありしが中古より
農家四五軒居よ出来しよりより自然に災害もなく不慮の変死もなし

ましバ今ハとなへを留て生首五郎新田とよぶとかやいくはもと此ミ南北の
往還数十町の間人家なく殊よ崖際(カケギワ)にて東ハ深田西南ハ野本村の
小松原よつゞき昼といへども唯松風の音のミにて凄涼(スゴキ)かぎりなきば
むかしハ名もありぬべし又崖下ハ五丈余も低く一面深田の南北の名凡
三十余町又崖際より東の山際まで十八九町の間往古ハ一面の沼にて
てありしよし西又深田の向ふ東の方に小の山つゞきより西南の奥峯へ
つゞき出たる高嶽ハ上田上野介が城跡にして本丸二の丸三の丸天守台矢
倉の跡よと覚しき構所ハ諸山よ際だちて此方より明細に見ゆ此山
高さ九七八丈そのむかし山際の為よ落城よ及ぶとあれど又此生がしら

新田と杉山町との間四五町耕地の路傍西の方五七歩に小高き一基の塚
あり椴の大樹二株ならび繁茂し其下に小笹の生茂りたる塚上に石碑存り
幅弐尺余竪六尺余石の厚さ三四寸なる石は根府川に似寄し生まの儘成
石上に建たり此石五尺四方もあるならめ外に台石等なし此碑東を表として路
傍の方へ向て建しが塚上小さく其間漸く三四尺に過ぎ地形のあきし方に
此碑も半分西へ反返り倒れきぬ危をもちし此杉山の城将上田上野介亮
が実父なる上田案独斎なる入道宗調の古墳なり懐古の情いとふかゝりし
予此辺へ往歴せるものはかゝる古墳古器等を探り風流の地を尋んが為なれば
拙も小笹おし分け塚上にのぼり寫しとりぬ碑面左の如し

南無妙法蓮華経
施主上田能登守源朝臣朝直入道安独斎宗調 生年七八
于時元亀二年春辛未弐月時正中日起立之

右のごとく少しかくしふきたる事を推正しきへ知る者もなきや元亀二年より文
化十一戌年にいたりて弐百四十四年の星霜を經たりき用意の蝋墨も出し
摺らんど苦生ト石面はうくしとくし摺るもかくしして安土地の古老の説に
上田氏の家は世々傳ふ英雄五人あり垂城丹波守能登守因幡守兼
古紀伊守山田伊賀守十二ノ其獲守とて何れも智謀武略の臣なりし由
此は天正十八年四月二日武蔵杉山の城攻の節は城主上田上野介殿は小田原

の塀に籠り当寺を守りし家人雑賀多田備前守等都合弐千三百余人と称
当城を指す七万余石ともいひ又七万石とも説区なりと語りき嗚呼時去と
いひなから微運にして亡ひし当所の城主なりし人も今世に至り時ハ
末世に移りて墓も朽しの巷にあるものなれは雨露に濡風霜に曝され誰
ありて香花を手向る人なし殊に此辺に墳墓のあるをしれる人の多
きハ無念といふへし憐愍の愁情少なからす卑賤の田夫野叟の数ひきる
なりし墳墓を営て造立し折しの追福作善を修行せるに何事も
有為転変の世界ハまるめのこ少なきものなれ共左ハいへ今に家臣山田伊賀
守の裔孫ハ百姓といへと営持して例年上田氏の菩提を弔へ怠忘せさる内

ハ外檀家の施餓鬼乃仏事も執行れは寺まて檀家として是より粗古文の追
善もあるなりとなん当氏家の東の崖下へ下りて耕地の中路を行事十余町に
して岩室の観音にいたる其の路すから東北ハ山々を遠望して村をひ南ハ
深田の果しなきこなたの風色一品ありて賑る佳景多し

六十三

一 武州横見郡岩室の観世音といふハ城山の麓根古屋村にあり此入口に板
橋かかり長さ三間根古土呂(ネゴトロ)川といふ水上ハ北の方根古土呂の淵といふより
湧かくむなし当松山の城の下なる大沼へ流入して名見なりと称此岩室の
観世音といふハ元来上田の塀内に安置せし上野助(介)の持念仏にして今に
東く其の由緒残り先代の諸大衆の堂の構形なる也数十丈の屏風

を立しあきし山の渓洞と覚しき西表の巌石を高さ凡三丈幅は五間に
魚付ひろあり縁りぬきいる洞の中へ一盃に二階作りに堂を建たる
そのさまの作事の能なる岩室の中の細工にて見事なり南正面の軒には岩
室山といへる横三字の額をかけたり往来より石階を登る事二十段ばかりにし
て観音堂中にいたる是より階子（ハシゴ）を上り二階へ登れば楼上に聖観音
を安置し漢土より将来せし御仏となん且又二階より西の方を眺望
して僅といへども風色又なきに似たり此城山むかしは岩ありしや
今は切株より塘えて三方ともに絶険論外の巌石にて又山といふの山なる
きわ五六丈此観音堂の海へ山さなりの真盛なるは最もめづらし又本の

かかりも只なる様は堂内の様子麁末なり

此別当は自性院と号し西山の方指金町にあり又此岩室の出口に通り
を隔てて本堂庵あり側に酒食をひさぐ茶店あれども土ぼこりて賑ひ
て城山の様子など尋るに此城又根古屋牛房とてむかし風味御方と按
群なりし名高なるよし下総の大浦牛房是に継るきしとぞいへり南又北
かしら新田の崖下よりむかしは横見郡なりしを伊奈代にいへり根古土呂
川より東を比企郡とし西を横見郡とせり此辺むかしは一円にて上田の
城内なりしよし林なるきしものがたりに予聞しく今此城山に登らんとて

事也又頂上にハ何であるやと此に登て同じ観音堂のうしろ胎内潜（くゞり）
迄より三の丸二の丸と云も道路現在し殊に高く頂上までハ五七丈も
あるべし二の丸の下通までハ今平地の処ハ追々開発して牛房麦などを植
又頂上までハとをりがたしの雑樹叢などを荊棘当村の者自ら上下せず今日
も空く強て頂に人の居らんやうにて四方を眺望しかへりしむかし落城の御焼
ける兵粮米ハ山へ向ひの崖より今も不残あるなどと云もきゝしに花
あらバ城山にゆきて品物をもやと伺ひし平生信も年も携えし雑物を
茶店に託す主五ひの甲斐もしく身軽になりて件の城山へいそぐ又
一旦寺へ且此所より山の方堺山の裾通り指金所にてよきこの観音へ

いまだ此路もなく多くハ平山に松の木ありて川にそひ谷へそらり山を耕地
なるなど梅桜杏椿山吹連翹などの天然に咲て風色のめづらしくおもし
ろさ惜も庭無の山水の景色に似たりといはん歟

六十四

一 岩室の後の胎内よりより東西の方へ攀（ヨヂ）やすき凡五六丈その間谷さよと
覚しきハむかしの堀の跡にあらん哉ハ云指定す四角に平坦の地あるハ天
主臺又ハ櫓の跡ならんとあるハ二の丸本丸等の曲輪今も地形に残りて曲し
き要害の城なりしを今新英雄の名のいひ傳ふる人の盛衰世界は変
化いふも流古の感情かゝるらん既に小の方の崖際より進来ハ足て在り
土と共に瓢しかなその員数いつ程とも云べからず数平生情と予彼崖

の穴より抓かし手拭につゝみて樵へくゝり焼米のをみ干し今に家際に伝
是よより突し服きまじハ婦人の血の道一切の煩ひに妙薬なりとぞ此山の
山腹まではいにしへ中古より麦牛房など植ゑ追々耕作の為に稀にハ矢の根武器
の鉄物まじりを拾ひ得るものありしとなん頂上廣く平坦なる所凡四所余方
もありし故土人とりでし者一面に枯芦を刈て居しまたぞと呼ぬ
頂登せる若者などハ苅萱(カリガヤ)の上を匍匐(ハラバイ)して良きつむりて四方を眺望する
に風色のおもしろさあるとめでよる兎角の偏なし側に猿どもすとかやいふ
樹ありし傍に矢立一本かし落書しありき
咲そふの媚(こび)ハ思案の外なり　おかげるうかきの春のしんや傍

此上田の城跡頂上東西の間僅に三間余に過ぎずして狭く又東北ハ山つゞき
にして西顔し大手の方ハ西向にして大沼を前にし搦手ハ東北へ向ひて山
つゞきにて当世まで年代相移りて此頂上を優しと匍匐して登るなる
景色にたへハ往昔といひなから城将の出りを観きまば神をめぐれる子
ぞ去し天正十八年上田上野介小田原の城に籠りし比ハ大手の方は大沼の
浮きをたのみにし城の矢倉等にハ菜人弱をこしらへて搦手ハ山つゞきなれば
不時の災害覚束なし城を大半搦手を防禦せしに小勢ハ茂を組て
大沼に乗入追て押寄るに仕寄るによりて城兵又大手の方へ請て搦手此
事虚を伺ひ埋伏しゐる兵卒相図をもて搦手より責入火を放ち焼

討せし時城中不意の急戦大ニみだれ城兵千三百余人既ニ血戦して滅亡ニ及びしとなん今山の崖際より土砂ニ雜りて出る焼米ハ籠城の砌兵の手を断切るを城ニハ水絶ざりしと敵兵へ見せんが為ニ米を以て馬の脊を洗ひて遠目ニ其所の軍兵へ見せしと也是ハ糧倉の跡なりしとなんといへり予進米ニ焼尾の所ニて二粒を得て家苞とせし

一武州横見郡吉見の観世音ハ坂東拾き番の札所ニて本尊正観世音ハ行基の作ニて別当を安楽寺と号す寺ハ南面ニ作り石階をのぼりて本観音堂ニいふ三堂の正面ニ補陀路と横ニ三字ニ書し額ハ安大乗典禅七十五書とあり又本堂の西の方ニ別当所あり又坂下の左ニ摂待堂

右ニハ銅像の濡佛あり山寺とも岩殿山ともいふ又本堂の内ニ横ニ三字の額かかけり黄檗獨立の筆也九札所と稱する程の寺ニ境内の狭きハあらじ本堂僧房まで目ニ見へしと造化を全へ門前ニハ旅籠屋を商家ハ軒を並べて往来盤しく土地旅人ハ之より西国秩父坂東の札合百番の札所の寺々へ参詣し又四国八十八ケ所の札所を巡れば未身の資糧ハ事足りとて安楽の族の思ひも宜なりけり此当所表の正面より南の方ハ川越まで四里斗又東北の方ハ此のあれ野へ五里西の方ハ松山の町へ壱里あるとなんされど此所より松山の町へ五町まての間岩山あり丸山あり松原あり耕地あり渓洞あり堀川あり諸木の花の咲

盛に道路の草花ハ毛氈を敷くも争りこれに及ばん天然の風色を有するに
堪ふりたハ又途中憩ふ茶店なし路傍の草原に休息すれバ

一　六十六
武州入間郡芦河内(タガウチ)村の温泉ハ青梅の駅より西の山道へ分入る事八里
ほどにして頗る名湯なり少し温(ヌル)きに依て沸かして浴すれバ一切の金瘡くじ
きふ其外霊妙なる事神のごとし此温泉を初て知りたるハむかし蛇のおし
穴より自然と温泉湧出しけるよし其後此地に又大き蛇あり石を敲(ウタ)ばん
路をふさい者を斬り既に高断(きし)ならんとせしに此温泉に浸(ヒタ)り居しより
胃まで全身本服し山へ帰りしとなん是より人々の能を知りてあまね
めて浴に依て一名蛇び湯ともいえり相州湯河原の温泉に増る事十
倍まさるといへども此地ハ片鄙なれバ家孫に四五軒に過ぎず八里余の山路
を上下しまた青梅の町にて一切の品々を買求むれバ不自由の程察すべし
又外に絶嶮の間道を山越にすれバ八王子の駅へ四里半ありて用弁よろしと
いへども是亦難所にして怪獣の患ひあり故に芦河内に入湯する者自他共に
青梅の駅に出て万の物を調ふれバ一切の品々殊に價の安きその
なし此温泉ありて居風呂に浴するが如く四季ともに湯治人絶えず
然れバ又山中へ入る事八里なれバ寒さも強し夜の間入湯する時ハ茄
子大根隠元ささぎ木瓜の外野菜なし殊に此土地ハ高き所にして数丈の崖
をくだれバ玉川の水上にて逆流潔しといへども多勢行き荒川なれバ魚猟

心に任せだ殊更夜も幌多く蚤蝨しけれバ湯治する人ハ紙帳を用意べし

こまふたりく病ひを患ふるの徒ハ格別懸念に湯治する族ハ一首にして極

めて逸価なり故に此湯泉その名高けれど世上の人知らずといへども効能に

於てハ當て然くの名湯強を見る事神のめし者が蓮社の知己に井沼新

左衛門といへるものハ春より夏かけて三夜まで此湯泉に浴し夫婦とも病

氣全く平癒し殊に長寿壮健にして今は安寧なりその路をたづぬれバ四ツ

谷通やき浴の驛を西へ三里に青梅の驛より西へ入山路凡八里にして

常河内といふ江戸より凡四拾里ありといへり或人の曰武蔵二國の内

にも流行しなきしものあるべけれど只温泉のなき事を根とするといひしが名知

けるが故に何とて武蔵の土地に名湯のなかりしや是は東武はなきものハ

不通（ヤボ）と妖怪（バケモノ）なりと此世諺（セゲン）ありまたなけれどもふハ此國に住まし数百

年の大小名ハ當國に集り集ひ其他名家福祐の者多く群居するまじけれバ彼に

なきものとてハあるべからざれど現に武州に常河内の温泉あり又吉安明神

の社内に名誉の神湯ある事也

右初編全部三冊于郷邸十方庵老衲著述

以上六十六ヶ條文化十癸酉年林鐘著作之功畢

遊歴雑記初編之上 終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan